

仙台市文化財調査報告書第109集

# 南小泉遺跡

第14次発掘調査報告書

1987年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第109集

# 南 小 泉 遺 跡

第14次発掘調査報告書

1987年3月

仙台市教育委員会

## 序 文

仙台市南小泉地区周辺は、政令指定都市に向けての市街地南東部の重要な拠点となりつつあります。一方、古代においても南小泉遺跡は県内屈指の著名な遺跡として知られ、現在に至るまで、人間の居住地として良好な環境であったことを物語っております。この地は、かつて「古今和歌集」などにも詠まれた宮城野の南側に接し、さらには、陸奥国分寺・同尼寺にも近接しており、中心的な地域であると同時に景勝地でもあったようです。藩制時代には、遺跡の西側に伊達政宗が晩年を過すため若林城を築かせたのも自ずと理解されることでしょう。

しかしながら、現在では宅地化が急速に進展し、古代の面影すらも払拭され、遺跡内に残った遠見塚古墳だけが、シンボリックなものとして浮び上がってくるようです。

今回の第14次調査やそれ以前の調査から、読者の皆様が古代以来の人々の生活が景観を想像できれば、調査成果の一担を果たしたものと申せましょう。

本調査でも、地域の方々の御理解・関係各位の御協力の賜ものと深く感謝申し述べる次第であります。と同時に、市民の文化財への理解・教育の場・学術研究に役立つことを念じて序といたします。

昭和62年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

## 例　　言

1. 本書は、仙台市農業協同組合による宅地造成に伴う発掘調査報告書である。（第14次）
2. 発掘調査は、仙台市教育委員会文化財課、佐藤洋・鈴木善弘が担当し、遺物整理・編集・執筆は佐藤洋が行った。
3. 本書の作成に際し、以下の方々から御教示・資料の提供をいただいた。（敬称略）  
（須恵器）　育英学園高等学校 渡辺泰伸、埼玉県立歴史資料館 酒井清治、  
名古屋大学 素藤孝正、東北大学大学院 藤沢 敦  
（金箔瓦）　大阪城天守閣 内田九州男・中村 博
4. 本調査の資料は、仙台市教育委員会で一括保管している。活用されたい。

## 凡　　例

1. 本書に掲載した地形図は、国土地理院の1:25,000「仙台東南部」の一部である。
2. 本書の土色は「新版標準土色帖」（小山・竹原：1973）を使用した。
3. 本書の図中の方位はすべて真北に統一してある。なお、仙台では磁北方向は真北に対し西偏7°20'である。
4. 層位名は、基本層位をローマ数字、遺構内の層位は算用数字で表わしている。
5. 図版中の水系レベルは海拔高を示す。
6. 土器実測図中、中心線が一点鎖線のものは図上復元実測図である。
7. 土師器実測図でスクリーントーンを貼ったものは、その部位が黒色処理されていることを示す。

## 本文目次

I.	遺跡の概要	1
II.	調査の経緯	3
III.	基本層序	4
IV.	発見遺構と出土遺物	7
	(1)古墳時代の遺構と遺物	7
	住居跡	7
	溝跡	18
	土壙跡	20
	河川跡	21
	(2)平安時代の遺構と遺物	30
	住居跡	30
	掘立柱建物跡	37
	畝状遺構・溝跡	37
	土壙跡	39
	(3)中世の遺構と遺物	42
	溝跡	42
	(4)近世初頭の遺構と遺物	44
	掘立柱建物跡	44
	井戸跡	48
	墓壙	53
	その他の遺構	57
V.	分析と考察	64
	古墳時代	64
	平安時代	70
	江戸時代	70
	若林城時代の居住者について	72
	金箔瓦について	75

## 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第27図 S I - 04平面・断面図	35
第2図 若林城下町推定図	2	第28図 S I - 04出土遺物	36
第3図 II区 南壁断面図	5	第29図 S I - 06平面・断面図	36
第4図 II区 西壁断面図	6	第30図 S B - 06平面・断面図	37
第5図 I区 北壁断面図	6	第31図 1号欽状遺構平面・断面図	38
第6図 遺構配置図	8	第32図 2号・3号欽状遺構平面・ 断面図	39
第7図 S I - 01平面図(1)	9	第33図 欽状遺構・土壤跡出土遺物	40
第8図 S I - 01平面・断面図(2)	10	第34図 S K - 01・02平面・断面図	41
第9図 S I - 01出土遺物(1)	11	第35図 S K - 07平面・断面図	41
第10図 S I - 01出土遺物(2)	12	第36図 S D - 01・02・12溝跡 平面・断面図	42
第11図 S I - 05平面・断面図	13	第37図 S D - 02・12出土遺物	43
第12図 S I - 05出土遺物	14	第38図 S B - 01平面・断面図	44
第13図 S I - 08平面・断面図	15	第39図 S B - 02・03平面図	45・46
第14図 S I - 08・S I - 09出土遺物	16	第40図 S B - 04・05平面・断面図	49・50
第15図 S I - 09平面・断面図	17	第41図 S E - 01・02平面・断面図	51
第16図 S D - 07・S D - 18溝跡平面・断面図	18	第42図 S E - 01出土遺物	52
第17図 S D - 07出土遺物	19	第43図 S E - 02出土遺物	53
第18図 S K - 05平面図	20	第44図 S M - 01平面・断面図	54
第19図 S R - 1出土遺物(1)	23	第45図 S M - 01出土遺物(1)	56
第20図 S R - 1出土遺物(2)	24	第46図 S M - 01出土遺物(2)	57
第21図 S R - 1出土遺物(3)	25	第47図 表土出土遺物	58
第22図 S R - 1出土遺物(4)	26	第48図 壁分類図	65
第23図 S R - 1出土遺物(5)	27	第49図 高坏の接合方法	69
第24図 S I - 03平面・断面図	31	第50図 仙台城三ノ丸跡出土碗	73
第25図 S I - 03出土遺物(1)	32		
第26図 S I - 03出土遺物(2)	33		

## 表 目 次

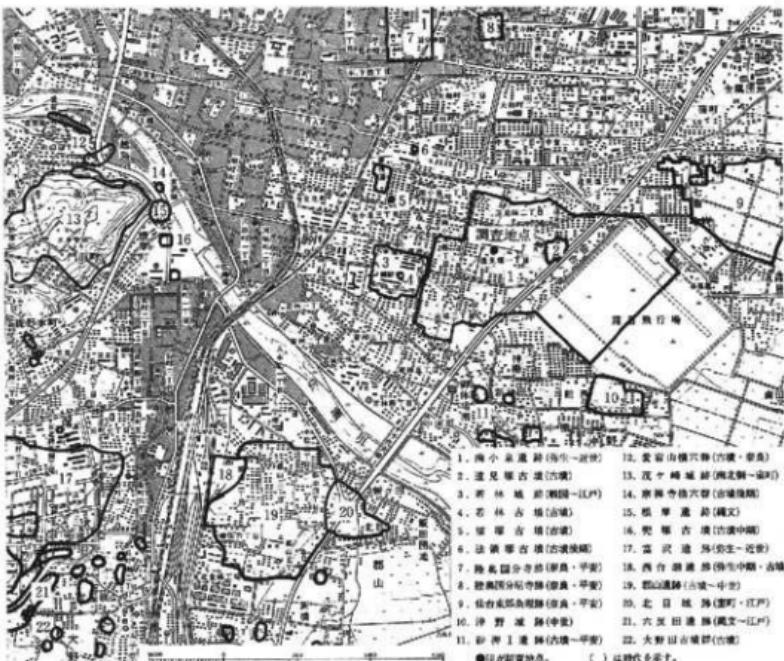
表 1 土師器観察表	59	表11 表土出土遺物観察表	62
表 2 土師器観察表	60	表12 土鍤観察表	62
表 3 須恵器観察表	60	表13 瓦観察表	62
表 4 須恵器観察表	61	表14 金属製品観察表	62
表 5 土鍤観察表	61	表15 金属製品観察表	63
表 6 土師器観察表	61	表16 紡錘車・石製模造品観察表	64
表 7 須恵器観察表	61	表17 石製品観察表	65
表 8 土師器観察表	61	表18 造構別坏組成表	66
表 9 須恵器観察表	61	表19 家格別陶磁器保有一覧	72
表10 陶器観察表	62	表20 若林城関連者・伊達政宗殉死者	73

## 写 真 目 次

写真1 調査前・區別全景、基本層序	77	写真8 古墳時代出土遺物(3)	84
写真2 古墳時代の造構(1)	78	写真9 古墳時代出土遺物(4)	85
写真3 古墳時代の造構(2)	79	写真10 古墳時代出土遺物(5)	86
写真4 平安時代の造構	80	写真11 古墳・平安時代出土遺物	87
写真5 中世・近世初期の造構	81	写真12 平安時代出土遺物	88
写真6 古墳時代出土遺物(1)	82	写真13 平安・中世出土遺物	89
写真7 古墳時代出土遺物(2)	83	写真14 江戸時代出土遺物	90

## I. 遺跡の概要

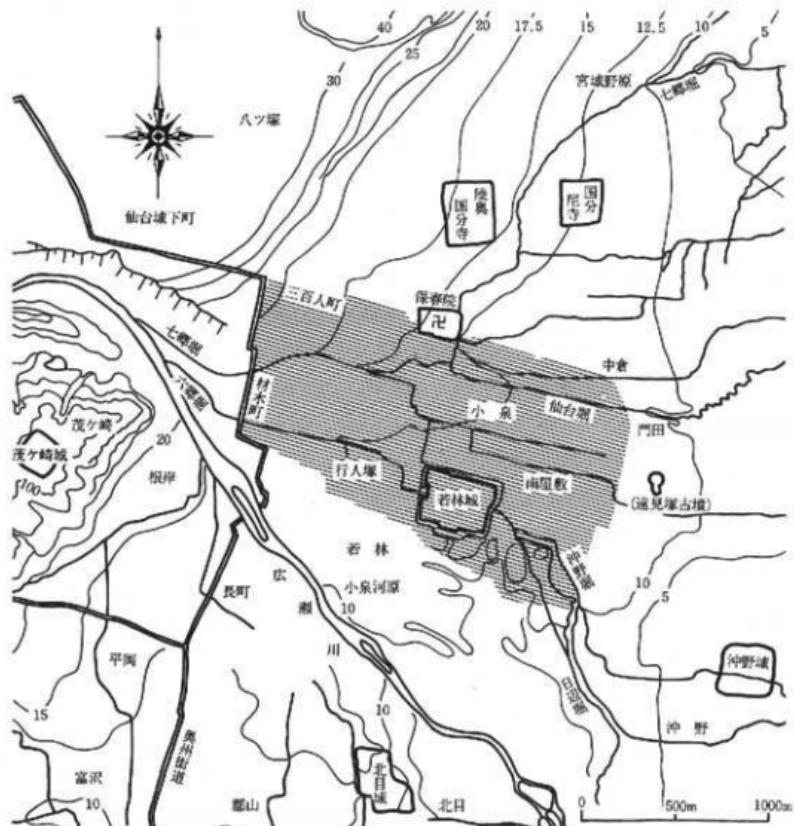
遺跡は仙台市街地南東部、広瀬川左岸に位置し、この河川が形成した比較的大きな自然堤防上に立置している。ほぼ同じ面に陸奥国分寺や同尼寺がのる。遺跡付近には条里型土地割が認められ、「二ノ坪」・「三ノ坪」・「尼坪」などの地名も残っており、安定した地盤を背景に古代より有効な土地利用がなされていた。また、本遺跡を特徴づけるものに、弥生時代・古墳時代前・中期の集落があり、古くより研究者の注目する遺跡である。遺跡内には、国指定史跡の遠見塚古墳があり、遺跡の西側では法領塚古墳・猫塚古墳などの古墳群が知られている。昭和40年代以降市街化が進むにつれて調査が頻繁となり、9世紀を主体とする平安時代の集落や遺跡の西部では鎌倉～江戸初期の構造群の存在も知られるようになった。遺跡の東側には、自然堤防や氾濫源から続く泥炭の発達した後背湿地がみられ、このような変換点に条理型土地割がみられる。弥生時代以来の開発が進んだものとみられる。しかし、条里型土地割に限つてみた場合、奈良時代の集落が皆無に近いこと、平安時代に集落規模が拡大することから、そ



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

の起源は、現状では平安時代以後のことと予想される。中世においては、国分氏が開発の主体者となって登場する。のちに、伊達氏の勢力下に入りその主体者も変化する。

江戸時代初期には、遺跡の西側に隣接して若林城が造営される。これに伴って小規模な城下町が形成され、遺跡のほぼ西半が含まれることになる。元来、この若林城の地は、国分氏の居城があったと言われ、ここに、寛永4年仙台藩初代伊達政宗が若林城を築き、翌5年には完成した。城下町の割出は城普請と同時に実行なわれ、侍屋敷や町屋敷が置かれた。その範囲は、北は保春院・三百人町、西は南木材町、南は古城三丁目と若林三・五丁目の境付近と考えられる。東は不明瞭であるが、今回の調査地点には若林城下町の一部と考えられる建物跡が検出された



第2図 若林城下町推定図  
(大正14年発行の『仙台近郊図』  
「仙台近郊東部・西部」に基づいて作製)

ことから、この地点よりもさらに東側が城下町の範囲に含まれる。城下町が割出された当時の道路が現在も名残りを留めているが、遠見塚一丁目の範囲まで認められる。調査地点付近ではこの町名に変わる以前は「南屋敷」と呼ばれていた。おそらく、現在の遠見塚小学校の西側付近が、城下町の東辺を限るものと予想される（第2図）。

## II. 調査の経緯

南小泉遺跡内において、仙台市農業協同組合より昭和59年8月13日付で、宅地開発に関する届出が提出された。届出の内容を検討の結果、事前の発掘調査が必要と判断された。現状は畠地となっており、計画では宅地部分は盛土、道路部分は掘削となっており、調査は道路部分を対象とし、必要に応じて拡張することとした。調査は、昭和61年4月より約3ヶ月間の予定を行った。道路部分を中心に5mメッシュを組み、南北にアルファベット・東西に数字を付し、グリッドの南北ポイントを基準（グリッド名）とした。調査は、バックホーによって表土を掘削し、調査後の埋戻しは行わないこととした。調査区は「T」字状の道路に合わせて設定し、北部の南北に長い調査区をI区、南側の東西に長い調査区をII区として調査を実施した。

調査要項は以下のとおりである。

遺跡名 南小泉遺跡（C-102）

調査名 南小泉遺跡第14次発掘調査（仙台市農業協同組合による宅地造成に関する事前調査）

所在地 仙台市遠見塚一丁目20-3、21（畠地）

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課調査係

担当職員 佐藤 洋・鈴木善弘

調査期間 昭和61年4月14日～7月11日

整理期間 昭和62年4月13日～8月31日

調査対象面積 約2,600m<sup>2</sup>

調査面積 約520m<sup>2</sup>

調査参加者（五十音順）

芦野ヒデ子・井口祐二・伊藤すみ子・岩間キノエ・柿沼幸子・兼子ミヨ子・菅野ツルヨ・菅野正道・熊谷信一・黒瀧ふくえ・佐々田弥生・佐藤愛子・佐藤よし子・芳賀英実・渡辺みつゑ

整理参加者（五十音順）

相沢史子・石井多賀子・砂金よしぇ・柿沼幸子・金沢君代・菅野正道・熊谷信一・佐々田

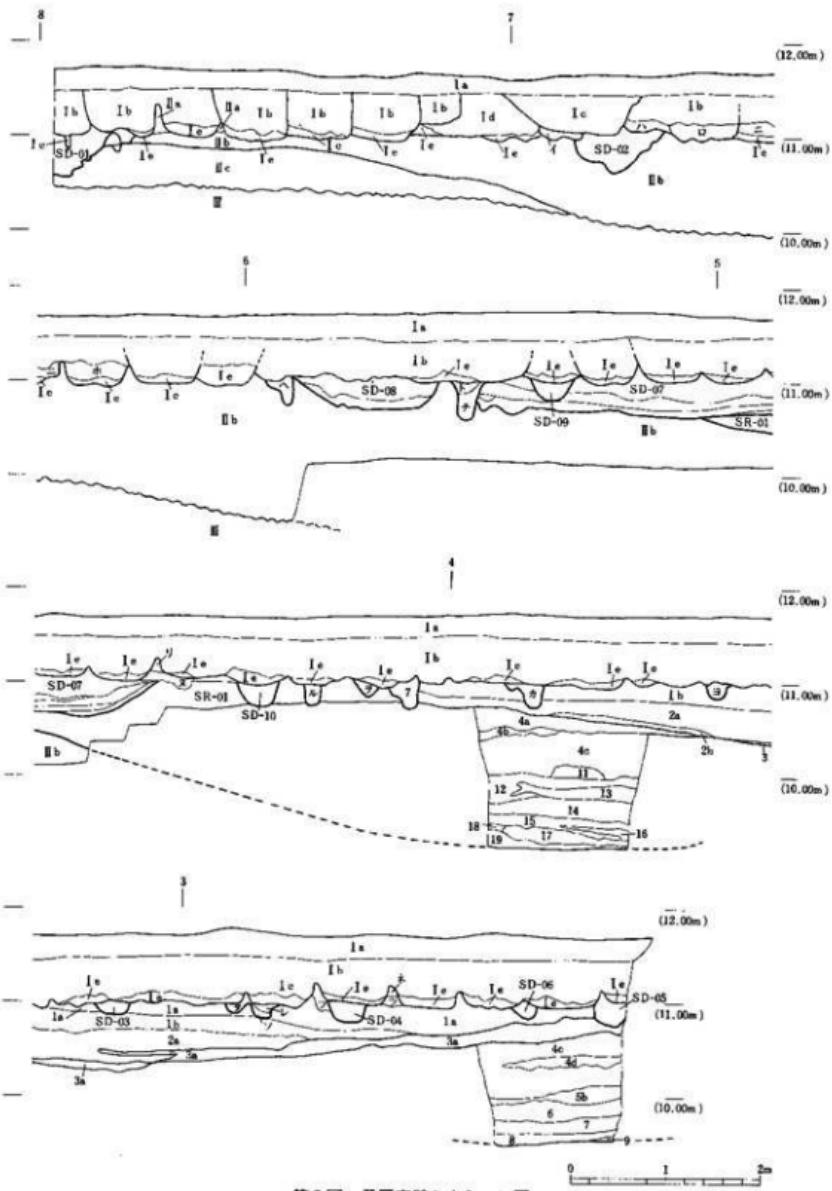
弥生・平 照子・芳賀英実・村田佳子・湯浅ます枝・吉川陽子  
調査協力 仙台市農業協同組合、㈱大木建設

### III. 基 本 層 序

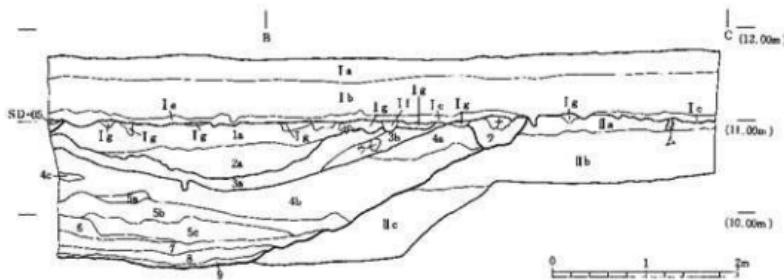
基本層序は、4層に大別できる(第3~5図)。I層は耕作土であり、さらに5層に細別される。このうち、Ia層は現在のものであり、他のIb~Id層も最近のものである。層厚は約20~130cmである。Ib~Id層は機械による深耕の結果であり、I区南部部やII区全域に及んでいる。従って、これらの地点では近世以前の造構は全て上部を削平されている。II層は黄褐色シルトで、I区北部で最も残りが良い。3層に細分される。おそらく、本層は相層の変化が著しく、場所によってはさらに細分し得るものと考えられる。III層は礫層で、拳大~人頭大の円礫で構成される。層厚は、井戸跡壁面の観察では0.5~0.6mである。I区やII区北東部で高く、II区南西側下がる。後述する埋没河川は、礫層が下がるII区南西側で検出されている。河川底面では礫層は確認できない。III層以下では砂礫層が井戸跡壁面で観察され、地表下約3mよりさらに下位に続くものと予想される。この礫層及び砂礫層は段丘礫層ではなく、氾濫原堆積物と考えられる。

本遺跡が自然堤防上に立地していることから、II層以下の層は河川の堆積作用によって形成されたものと考えられる。一方、後述のごとく調査地点は、藩制時代の初期には城下町が形成され、その後は畠地として利用されていたことから、I層の形成は城下町廃止後とみて大過なかろう。造構は、最近の耕作によって削平を受け、I区北部ではII層上面で、I区南部及びII区では削平面すなわちII層中で検出される。

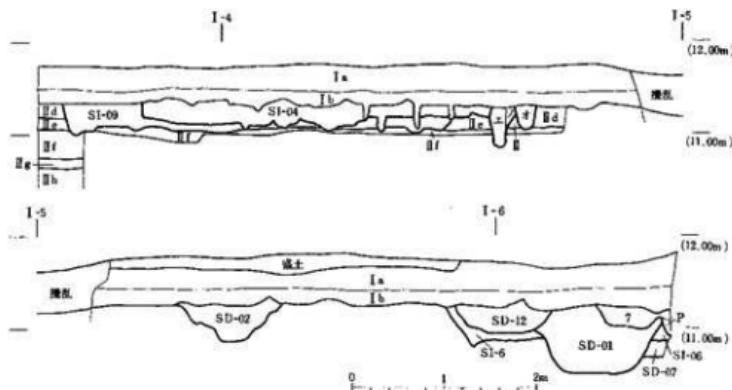
このII層以下の層は、地質学的には沖積世の霞ノ目層に相当するものと思われ、前述したように、氾濫原生成になる層と考えられる。比較的安定した地盤を形成するのは、弥生~古墳時代以降のことであろう。今回の調査で検出された埋没河川や遠見塚古墳下にある埋没河川の存在は、逆に一部にまだ不安定要素を残していたことを示すものかもしれない。



第3図 II区南壁セクション図



第4図 II区西壁 (SR-01) セクション図



第5図 I区北壁セクション図

I区・II区基本層位 (S R-01) 土層註記表

部位	土 色	土 性	備 考	部位	土 色	土 性	備 考
1 10Y R 5/6	暗褐色	シカト		7 5Y 6/6	淡オリーブ色	粘質シルト	HIV色(褐色との互換)
2 10Y R 5/6	暗褐色	シカト	無化物・無化物を少量含む。	8 5Y 6/6	暗褐色	粘質シルト	木の味・苦味含み、水分量の有無を含む。
7 10Y R 5/6	暗褐色	シカト	無化物・無化物を少含む。	9 5Y 6/6	淡オリーブ色	粘 土	下部に軟分離層(沙田畠下層)
				10			欠番
1a 2.5Y 6/6	セイ-褐色	シカト		11 2.5Y 6/6	暗褐色	毛 土	
1b 2.5Y 6/6	オリーブ褐色	シカト	無化物を含む。	12 2.5Y 6/6	暗褐色	粘質シルト	11より細粒が強い。
2 2.5Y 6/6	褐色-7R6/6	砂(颗粒)	無化物を含む。	13 5Y 6/6	淡オリーブ色	粘 土	
3a 2.5Y 6/6	暗褐色	砂	無化物・無下層・土解剖、無機物を含む。	14 5Y 6/6	淡オリーブ色	粘質シルト	
3b 2.5Y 6/6	暗褐色	砂	無化物・無下層・土解剖、無機物を含む。	15 5Y 6/6	淡オリーブ色	シルト	褐色の妙を含む。
4a 2.5Y 6/6	暗褐色	シカト	無機物を含む。	16 5Y 6/6	淡オリーブ色	シルト質	褐色の妙を含む。
4b 2.5Y 6/6	暗褐色	粘質シルト	無機物を含む。	17 5Y 6/6	暗褐色	粘 土	
5a 2.5Y 6/6	オリーブ褐色	粘質シルト	無化物を含む。	18 10Y R 5/6	暗オリーブ色	泥 砂	
5b 2.5Y 6/6	暗褐色	シカト	無機物を含む。	19 5Y 6/6	淡オリーブ色	泥 砂	
6 2.5Y 6/6	オリーブ褐色	砂		7 5Y 6/6	暗褐色	泥 砂	
8 5Y 6/6	オリーブ色	泥 砂					

## V. 発見遺構と出土遺物

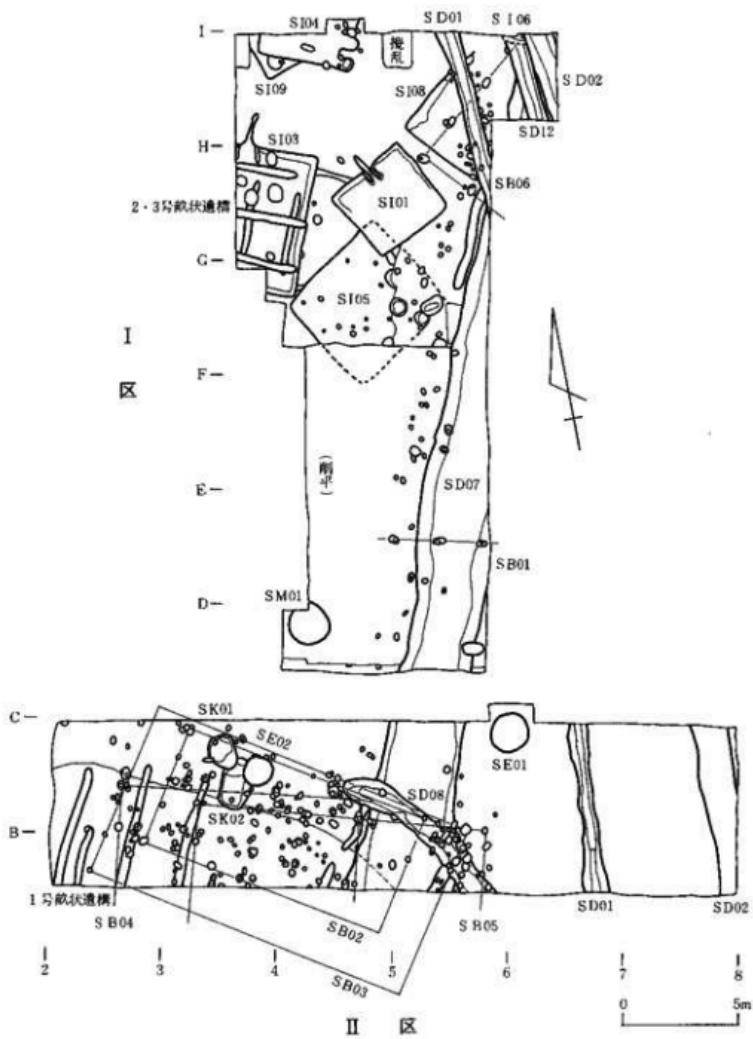
### (1) 古墳時代の遺構と遺物

古墳時代に属する遺構は中期～後期を主体とするもので、住居跡4軒・溝跡4条・土壙跡3基・河川跡1条が検出された。なお、住居跡のうち、S I-02・S I-07は欠番とする。前者は当初SD-02とSD-12の間に検出されたが、後にS I-08としたものと同一のものであることが理解できた。後者は、S I-01・03・05の間に位置し、周溝らしきもの(S D-13・14)を検出したが、積極的に住居跡と判断するに至らなかった。

#### 住居跡

S I-01 (第7図・第8図)

G-4・5区に位置し、S I-05・SD-14を切る。規模は3.62m×3.37mで、正方形に近い整形なプランである。壁高は最大22cmで、最も残りのよい住居跡である。床面は平坦で、下位には掘り方(单層)が確認された。カマドは北壁中央に位置し、残存状況は比較的良好。煙道部は長さ0.82m、幅0.3m、深さ0.22mで、煙出し部に向かってやや上がってしていく。燃焼部底面から正立状態(高床脚部転用)の支柱が出土した。ピットは8個検出された。P<sub>1</sub>は41cm×37cm・深さ47cm(柱痕27cm×24cm・深さ35cm)、P<sub>2</sub>は54cm×42cm・45cm(柱痕17cm×16cm・36cm)、P<sub>3</sub>は61cm×52cm・79cm(柱痕33×21cm・70cm)、P<sub>4</sub>は45cm×44cm・48cm(柱痕21cm×42cm)、P<sub>5</sub>は24cm×20cm・19.5cm、P<sub>6</sub>は22cm×18cm・13cm、(柱痕直徑約10cm・深さ18cm) P<sub>7</sub>は29cm×26cm・3cm、P<sub>8</sub>は43cm×35cm・10cmをそれぞれ測る。また、土壙は1号～3号の3基が検出された。1号は北西コーナーに位置し、円形を呈する。規模は50cm×47cm・深さ25.5cmで、鍋底状を呈する。2号は南西コーナーに位置し、不整円形を呈する。規模は67cm×56cm・深さ15cmで、断面形は皿状に近い。3号は南東コーナーに位置し、不整隅丸長方形を呈する。規模は101cm×65cm・深さ68cmで、断面形は「U」字状に近い。土壙の周圍には黄褐色の粘質土によ

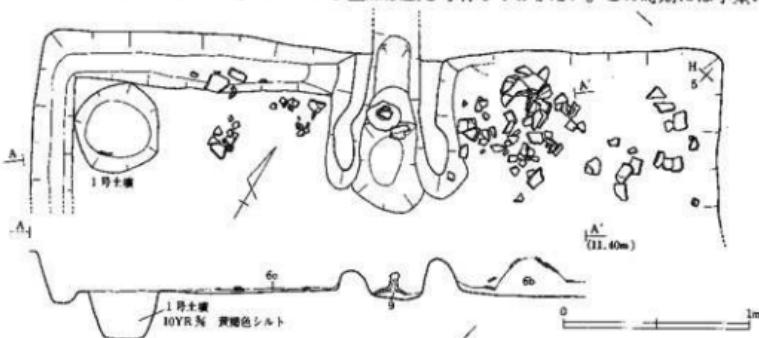


第6図 造構配置図

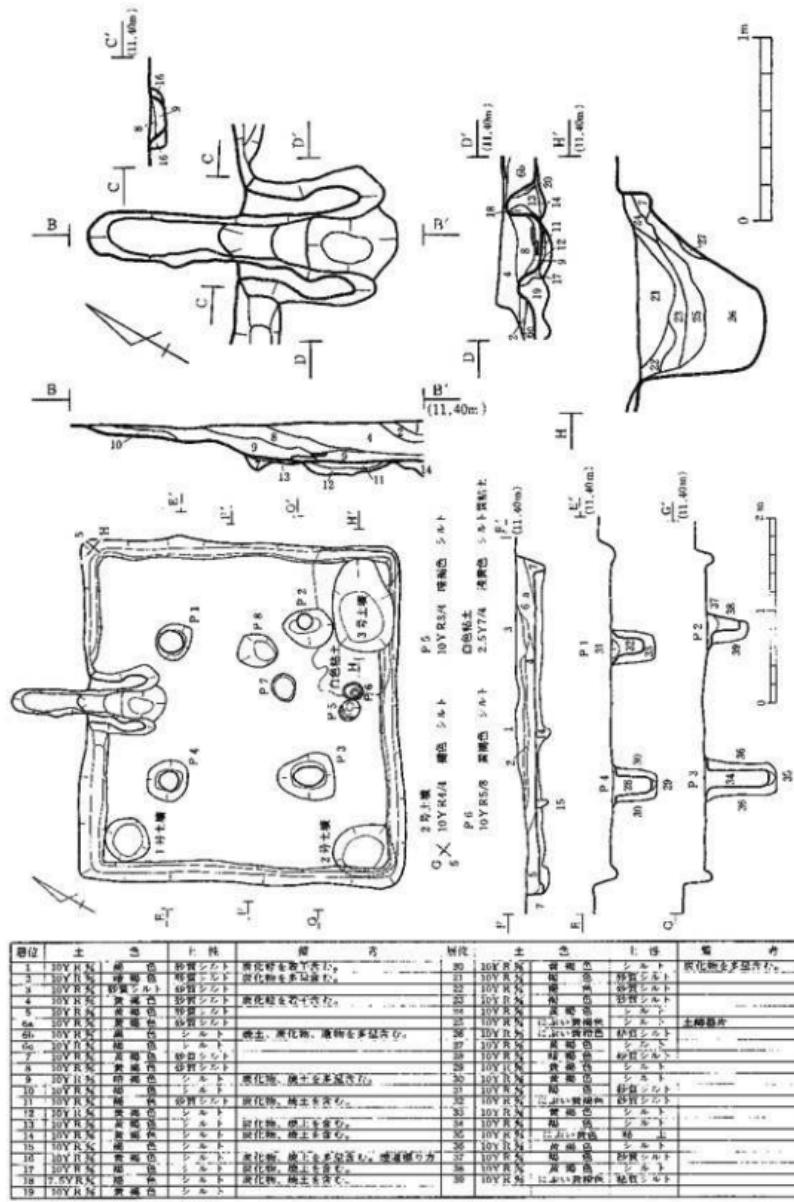
る周堤帯が巡る。これと同質の土は、土壌内の最下層（26層）に厚く堆積している。この土は、陶芸家の大場拓俊氏の御教示では、土器製作用の素地土と考えるには腰が弱いとのことであった。カマドの構築や修復を目的とした粘質土の貯蔵を想定すべきであろうか。いずれにしろ、本土壌は貯蔵穴と考えてよからう。同様の例は、S I-09・S I-05にもみられる。遺物は、カマドの東西に北壁に沿うように出土した。特に、東側に多く、ここでは土器の下位に炭化物・焼土混入の黒色土（6b層）が堆積していた（第7図）。この黒色土は他の床面には分布しておらず、カマド東側の土器群と分布が一致している。従って、住居廃絶時かそれ以前に土器群と共に廃棄あるいは放置されていたものと考えられる。

#### 出土遺物（第9図・第10図）

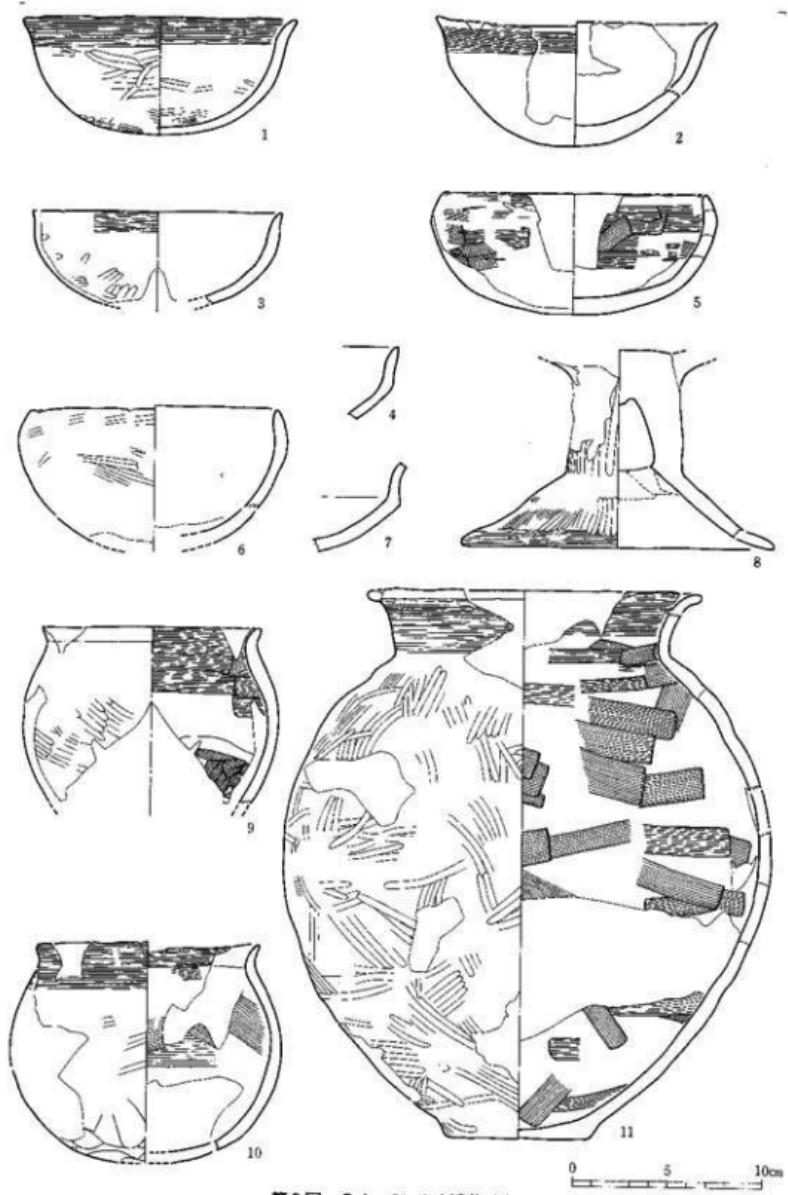
遺物には、土師器壺・高壺・小型短頸壺・甕・瓦石がある。第9図1は球形状の体部で、口縁部が僅かに外反する。口縁部内面には軽い屈曲があり、稜線が形成される。2は、1と類似した器形であるが、内面の稜はみられない。外面は、口縁部横ナデ・体部ヘラ削りであるが、内面の調整は不明である。3は2と同種のものであるが、体部外面にミガキ調整を施す。4は、前述までのものと同様丸底壺と考えられる。口縁部はほぼ直立し、下端に不明瞭な稜線が形成される。口縁部内外面は横ナデ・体部は外面ヘラ削り・内面ミガキ調整を施す。外面稜線はヘラ削りの結果として作出されているよう、やや不規則である。5・6は球形状の丸底壺で、口縁部も内凹する。5はやや偏平ぎみで、6より浅い。調整は、5が内外ナデ調整で、一部にミガキが加えられる。6は外面ミガキであるが、内面は不明である。7は4から発展した器形と考えられ、口縁部を外反させることによって、体部との境の稜線が明瞭に意識させている。内外面の調整は4と同じである。8は高壺である。壺部を欠失しているが、これはカマドの支脚に転用されたためであろう。脚上部と裾部は明瞭に区別でき、裾部は大きく開く。外面は裾端部に横ナデを加えた後、脚上部とともにミガキが施される。裾部内面には、念入りな横ナデ調整が施される。8・9は小型無頸甕と呼称しておきたい。この時期には小型の



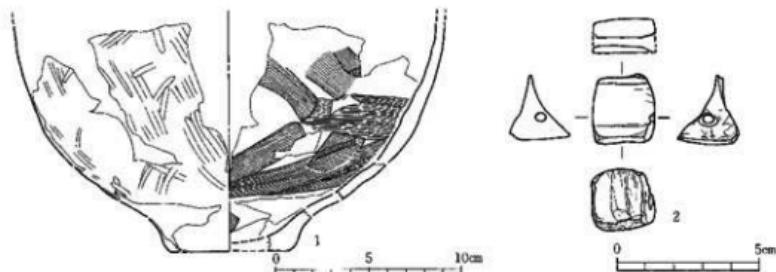
第7図 S I-01 平面図(1)



第8図 S1-01 平面・断面図(2)



第9図 S I - 01 出土遺物 (1)



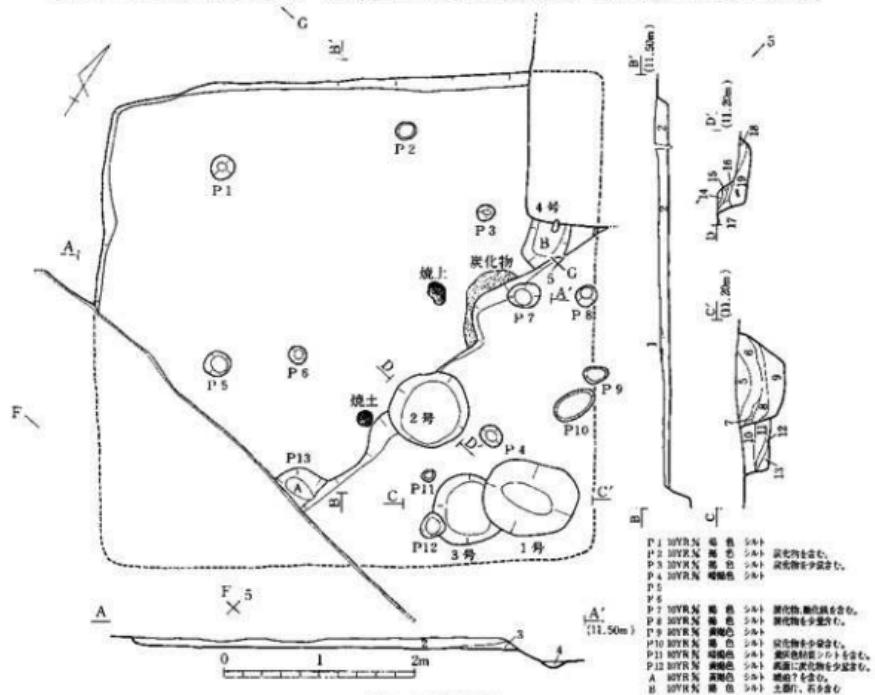
第10図 S I -01 出土遺物 (2)

甕も存在するが、丸底である点で区別される。土器表面の観察から、時には煮沸具（甕）として利用されたことも考えられる。県内ではあまり類例のないものである。球状の体部に、僅かに外反する短かい口縁部が取り付く。口縁部内外面は横ナデ、体部外面ミガキ・内面ナデ調整が施される。11は胴張り甕で、口縁部は外反する。口縁部は内外面ともに横ナデ、体部は外面ミガキ内面ナデをそれぞれ施す。体部のミガキは底部に及ぶ。第10図1も11と同様の特徴をもつ甕であろう。同図2は、小型の有孔砥石であろう。本来定型的な砥石を使用していた結果このような形態になったのか、あるいは、当初よりこの形態だったのか判断できない。小型品を対象とした砥石であろう。第9図1・2・5・6・9、第10図1は、住居廃絶時の廃棄ないし放置と考えられる括資料である。3・4は埋土中のものである。5はカマド支脚に利用されていたものである。第9図7・第10図2は東壁北寄り床面から出土したものである。

#### S I -05 (第11図)

F-4・5区 (丁区) に位置する。S I -01に切られ、SD-13を切る。東側及び南側は削平されている。規模は $5.25m \times 4.5m$ 以上であり、壁高は西側が残こりが良く12cmを測る。形態は、やや不整の方形と予想される。埋土は、ようやく2層分を確認するに留まった。カマドは確認できず、床面中央よりやや東寄りに、僅かに焼土、炭化物の集中範囲を、南寄りにも焼土をそれぞれ検出した。これらは、地床炉があるいはそれに関わるものと考えられる。ピットは、床面を削平された部分のものを含めて13個ある。このうち、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>が上柱穴と考えられる。P<sub>1</sub>は $26cm \times 24cm$ ・深さ20cm、P<sub>2</sub>は $19cm \times 17cm$ ・深さ約28cm、P<sub>4</sub>は $25cm \times 20cm$ ・深さ23cm以上である。南西側の柱穴は確認できない。土壤は、東側に位置する。調査時には、住居跡とは別に遺構名 (SK-03・04・06) を付したが、後述するごとく土器の接合関係が認められたことなどから、住居に付属するものと判断した。従って、土壤は4基存在する。1号土壤は $99cm \times 81cm$ ・深さ50cmであるが、上部を削平されている。埋土は自然堆積を示すが、最下層 (9層) は前述したS I -01の貯蔵穴にみられたものと同質の粘質土である。この上層中より甕の

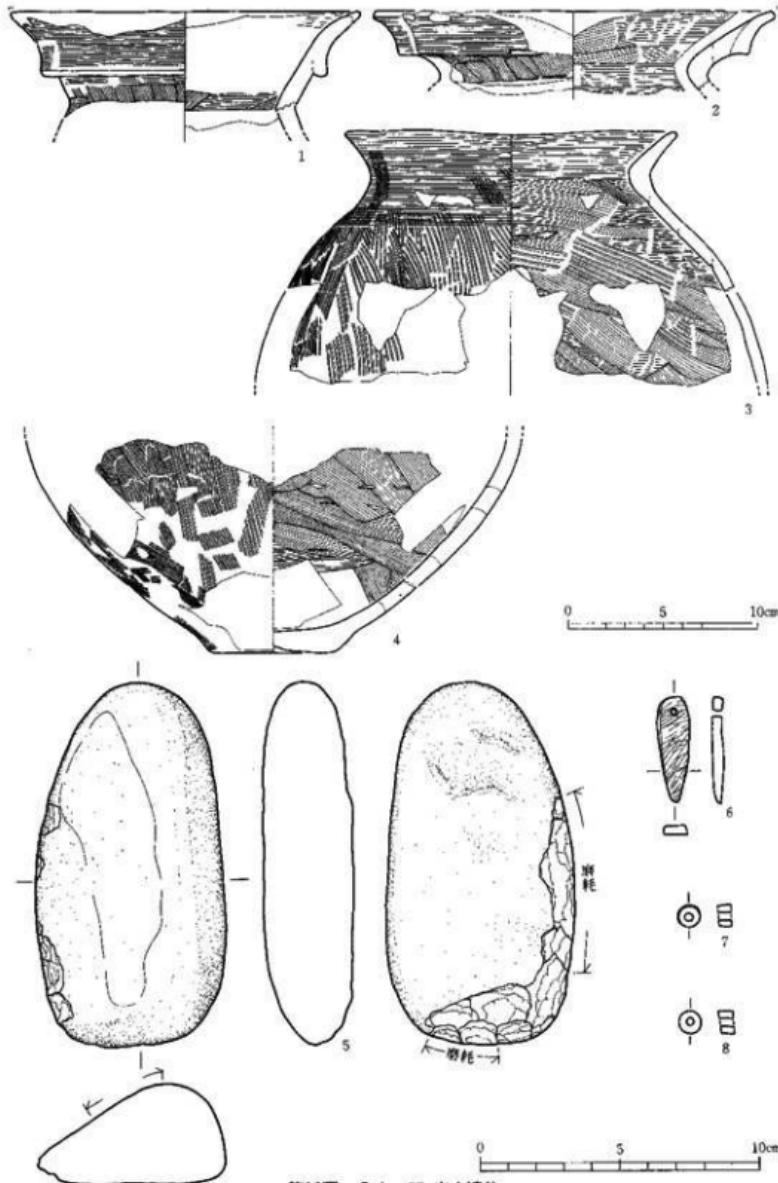
破片が出土している。2号土壌は、83cm×81cm・深さ38cmであるが、上部の大半を削平されている。ほぼ円形を呈し、断面形は鍋底状である。埋土は自然堆積を示す。遺物は19層から発見されている。これと同一個体と思われる破片が床面より出土している。3号土壌は74cm×55cm以上・深さ28cmで、上部を削平されている。埋土は自然堆積を示し、11層以下が前述の粘質土と類似した土である。11層から壺・甕が出土している。4号土壌は東壁中央寄りに位置する。規模は52cm以上×44cm・深さ12.6cmである。平面形は長楕円形を呈するものと予想される。2・4号は判断できないが、1号・3号については、粘質土を貯蔵する貯蔵穴と考えられる。周溝や床下の掘り方は検出できない。遺物は床面上では階無に近く、主に土壌より出土している。



S I - 05 土層記表

層位	土	色	土性	層	土	色	土性	層	土	色	土性	層
1	10YR 4/8	黄褐色	シルト		11	10YR 4/8	に赤い斑点	粘質シルト	12	10YR 4/8	に赤い斑点	粘化物・黄土を多度含む。SK-03
2	10YR 4/8	に赤い斑点	シルト		12	10YR 4/8	に赤い斑点	粘質シルト	13	10YR 4/8	に赤い斑点	SK-03
3	10YR 4/8	赤	シルト		13	10YR 4/8	赤	粘質シルト	14	10YR 4/8	赤	粘質シルト
4	10YR 4/8	赤	シルト		14	10YR 4/8	赤	粘化物を含む。	15	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。SK-03
5	10YR 4/8	赤	シルト		15	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。	16	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。SK-03
6	10YR 4/8	赤	シルト		16	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。	17	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。SK-03
7	10YR 4/8	赤	シルト		17	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。	18	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。SK-03
8	10YR 4/8	赤	シルト		18	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。	19	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。SK-03
9	10YR 4/8	に赤い斑点	シルト		19	10YR 4/8	赤	シルト	20	10YR 4/8	赤	粘化物を少度含む。SK-03
10	10YR 4/8	黄褐色	シルト		20	10YR 4/8	黄褐色	シルト				

第11図 S I - 05 平面・断面図



第12図 S I - 05 出土遺物

#### 出土遺物（第12図）

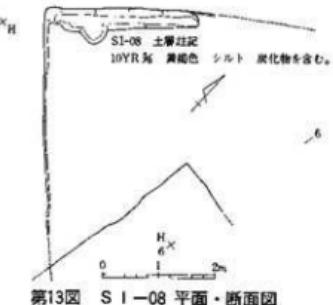
遺物には、壺・甕・石斧様の打製石器・劍型模造品・臼玉が出土している。1は3号土壙11層及び12層上面から出土した有段口縁壺の口縁部である。口縁部は外面横ナデ、内面ミガキ調整であり、頸部付近では外面ともにナデ調整を施す。2も有段口縁壺の口縁部である。調整は1とほぼ同様であるが、口縁部内面がナデ調整である点が異なる。3は甕の上半部である。おそらく、胴部は球状に近いものと思われ、口縁部は「く」字状に外傾する。胴部は、外面刷毛目調整（一部は口縁部に及ぶ）、内面は刷毛目調整後ヘラナデを加え、口縁部内外面に横ナデ調整を施す。4は甕の下半部であろう。外面は刷毛目調整、内面は強いナデ調整がみられる。5は、石斧に類する打製石器である。2側辺に加工を加えて刃部を形成している。基本的には片面加工と考えられる。刃部には1ヶ所に磨耗痕がある。土掘り具としての用途が想定されようか。6は有孔劍型模造品である。7・8は直径4mmの臼玉である。1・6は3号土壙11層、2・7・8は南東部床面直上（7・8はP<sub>1</sub>の北側）、3は北東部床直・1号土壙9層・3号土壙11層そしてS I-08床下の周部掘り方、4は2号土壙19層、5は北東部床面直より出土した。3・4の接合例より、土壙が住居の付属施設と考えられ、さらに3の例から本住居はS I-08と近接する時期でこれよりやや古い時期の所産と予想される。

#### S I-08（第13図）

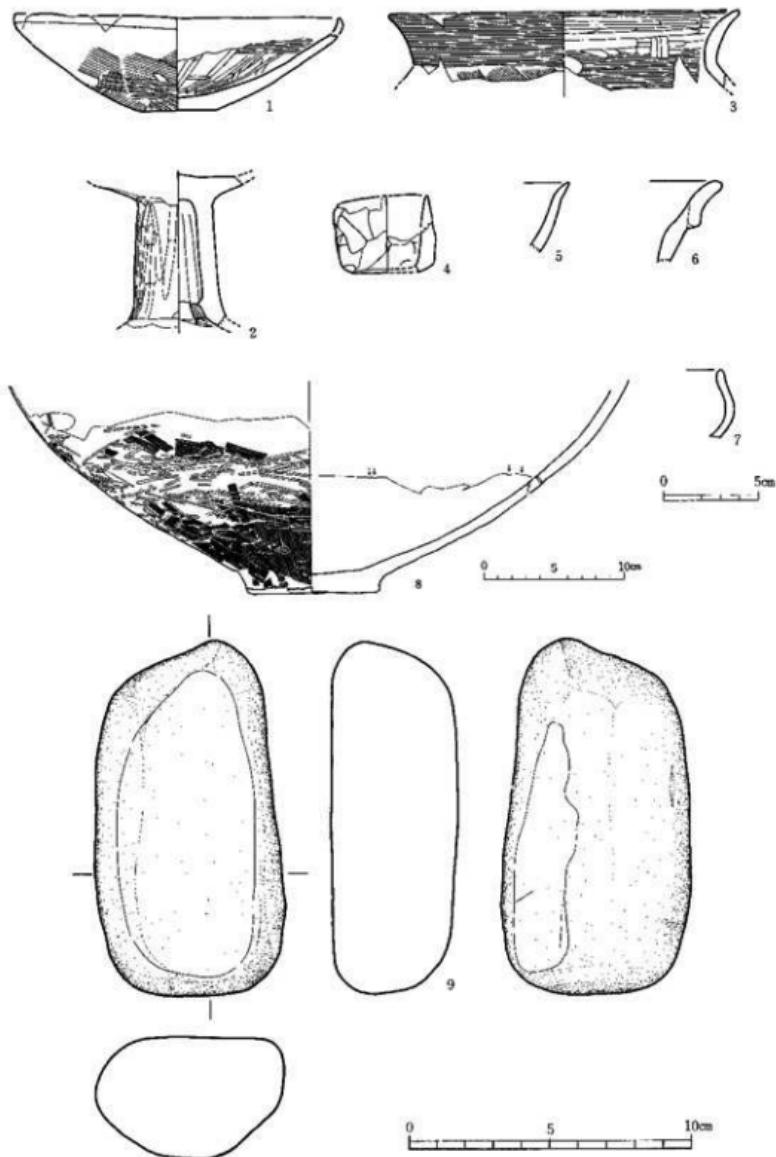
G・H-5（I区）に位置する。S B-06・S D-02に切られる。また、S D-07・18と重複関係が予想されるが、直接判断が下せない。遺物の比較からすれば、S D-07は本住居を切るものと予想される。S D-02の西側ではようやく掘り方を検出し、北西コーナーを確認できた。東側S D-12付近では極めて不明瞭となる。カマドや地床炉の存在は不明で、柱穴も確定できない。規模は一辺が4m以上である。北壁に沿って、周溝の掘り方を検出した。

#### 出土遺物（第14図）

遺物には、壺・高壺・甕・手捏ね土器がある。1は平底壺で、体部は外傾し口縁部が僅かに内窓ぎみに立ち上がる。体部外面はヘラ削り後刷毛目調整を加え、最終調整はナデである。内面は放射状に近いミガキ調整である。口縁部は、内面体部のミガキ調整以前の横ナデが認められることから、外面も横ナデ調整が施されたものと予想される。2は高壺の脚部である。脚上部は円筒状で、裾部は大きく開くものと思われる。壺部は単純に脚部に接合されたものであろう。脚部外面はヘラ削り後ヘラミガキを施す。内面はシボリ目がみられ、裾部にはナデ調整が施される。壺部底



第13図 S I-08 平面・断面図



第14図 S I-08・S I-09 出土遺物 (8は3/4)

面には放射状のヘラミガキがみられる。3は甌の口縁部である。口縁部は外反する。口縁部は内外面横ナデ調整後内面にミガキ調整を施す。これは、甌の調整と共通するものであろう。胴部内外面にはナデ調整が認められる。4は、手捏ねである。内外面に指ナデが認められる。1は北壁寄り(S D-02東)床面、2はプラン確認面、3・4は埋土中より出土したものである。また、5・6は床下から出土したもので、5は内外に屈曲のある壺、6は有段口縁甌である。

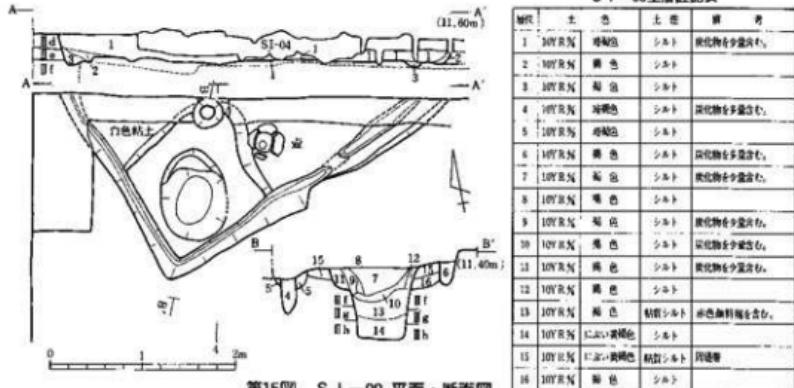
#### S I-09 (第15図)

H-3・4区(I区)に位置する。S I-04に切られる。住居の主体は調査区外にあり、南西コーナー付近の検出に留った。南壁は3.55m以上が確認できる。壁高は20cm前後を測る。コーナー部分より土壙が検出された。規模は1m×0.71m・深さ0.8mで、楕円形を呈する。北側で段差がある。周囲にはS I-01と同様の粘質土の周堤帯が巡ぐる。土壙内の13・14層も粘質土が堆積しており、貯蔵穴と考えられる。周堤帯を切る柱穴があるが、住居のものかどうか不明である。周堤帯の東脇床面より大型甌が出土している。壁に沿って周溝が検出された。

#### 出土遺物(第14図)

遺物には、壺・甌がある。7は体部が内窓する丸底壺と考えられる。口唇部付近でやや直立ぎみに立ち上がる。8は、大型甌の底部付近の破片である。全体の器形は不明である。外面は刷毛目調整後ヘラミガキが施される。内面は不明瞭ながらナデ調整がみられる。また、粘土の接合面で割れた上端に刻目が観察され(矢印)、この部位と外面のミガキ調整の集中部位が対応する。7は貯蔵穴10層より出土した。8は、床面・貯蔵穴7・10層・S I-04埋土から出土したもののが接合した。8はS I-04からも出土した点に注目すれば、同じS I-04(平安時代)から出土した古墳時代の土器片も、本住居に帰属する可能性が高い。この土器片のうちの幾つかは、後述するS R-1の3層のものと接合している。9は2面に磨面をもつ磨石である。

S I-09土層記表



第15図 S I-09 平面・断面図

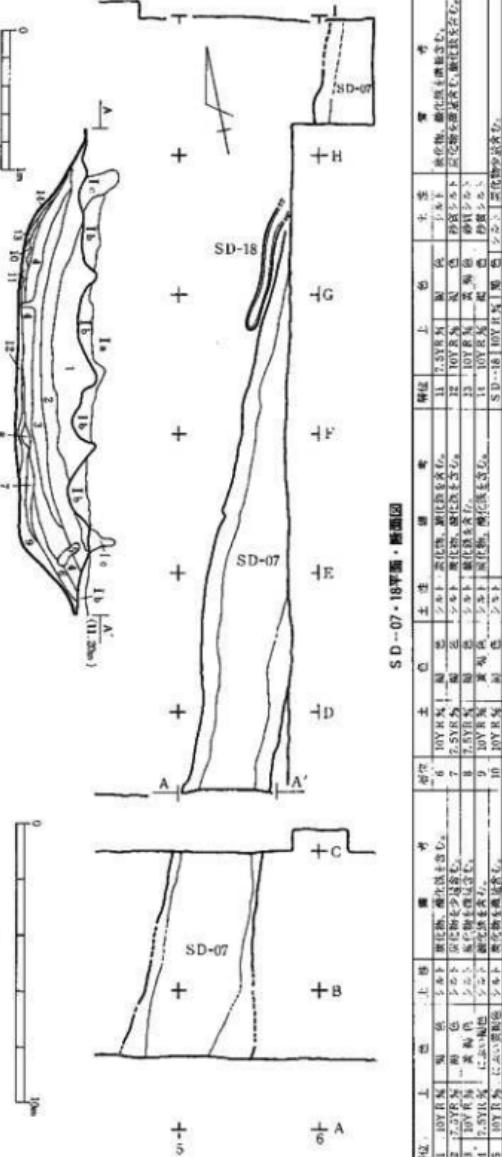
## 溝跡

SD-07 (第16図)

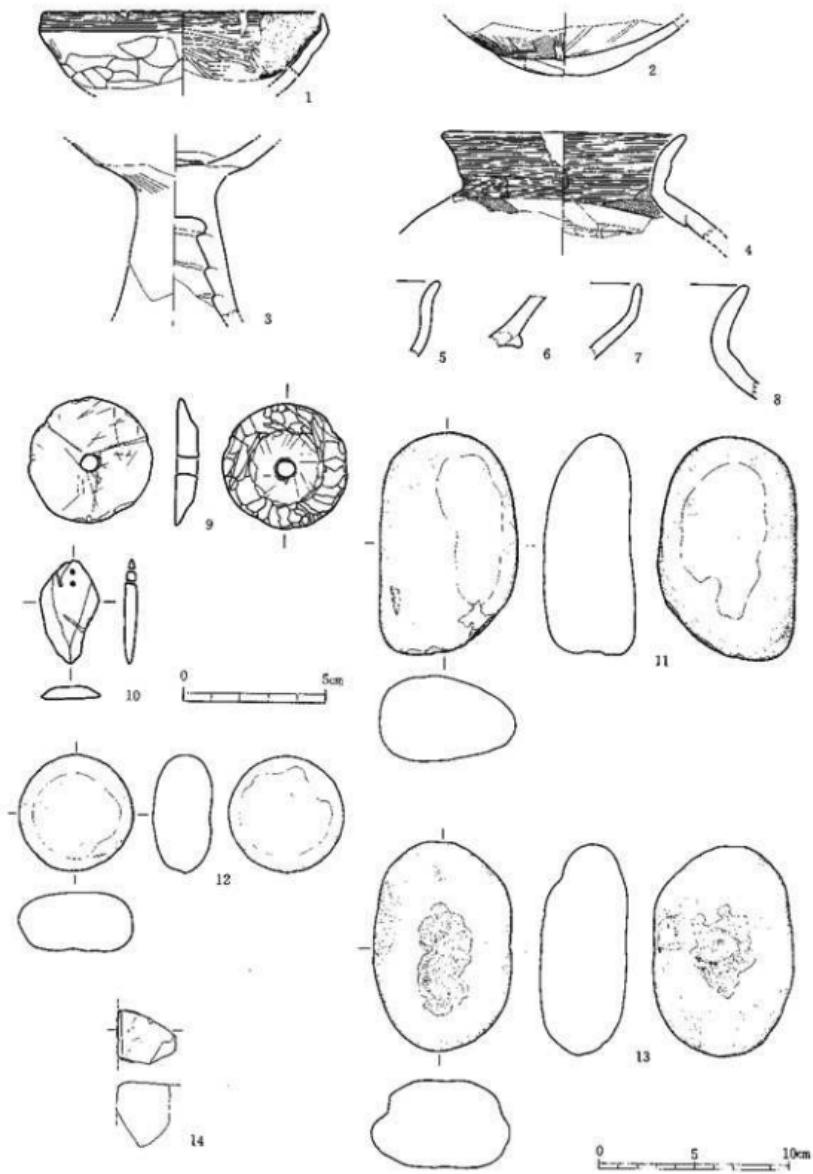
I区東側からII区中央に位置し、さらに調査区外へ伸びる。SB-01～05・SD-01・02・08・09・12に切られ、SK-05・SR-01を切る。SI-08も切っていると予想される。方向はN-8°～9°-W (真北より)である。規模は上端幅3～4.7m、底面幅2～3m、深さ0.45mである。埋土は自然堆積を示す。水路かどうかは判断できない。この溝に類似する溝は、第11次調査地点(都計街路第3次調査)の46号溝がある。方向は一致しないようであるが、規模や時期がおよそ一致する。

出土遺物 (第17図)

遺物は、壺・高壺・壺・甕がある。1は内面黒色処理をした丸底壺であろう。口縁部は内傾ぎみに立ち上がる。外面は、体部下半にヘラ削り、口縁部横ナデを施す。内面は口縁部横ナデ後、体部ミガキ調整が施される。今回の調査では唯一の古墳時代の内丸壺である。2は底面に小規模な平坦面があり(平底と呼べるかは検討を要する)、内窓しながら立ち上がるものと予想される。体部には屈曲が認めら



第16図 SD-07・SD-18



第17図 SD-07 出土遺物 (9・10は1/2)

れる。外面は屈曲より上位ではナデ調整、下位では横位のヘラ削りが施される。屈曲部では横位のナデ調整が認められるようである。3は高坏である。坏部の大半と裾部を欠く。脚部（脚上部）は粘土紐巻き上げ成形である。坏部の調整は、外面がヘラナデ、内面は剥落のため不明である。脚部は外面ヘラ削り調整後にミガキを施しているようであり、内面は無調整で巻き上げ痕が明瞭に残る。4は壺であろう。口縁部は外反し、内外面に横ナデ調整が施されるが、外面の上部が強く圧力を受けたためか、中部は高まりとなって残っている。胴部との境は強いナデツケがなされ、下端では軽い穂（段）が形成されている。胴部は内外面にナデ調整がみられる。5～8は断面資料である。5は、内窓しながら立ち上がり、口縁部が外反する丸底壺であろう。内外面にミガキ調整がみられる。6は高坏の坏部破片である。内外面ミガキ調整である。7は小型壺の口縁部であろう。8は壺の口縁部である。内外面に横ナデが施される。9は石製紡錘車である。直径約4.4cm、重量約20gで、下面にはあたかも三分割を示すような沈線（擦痕）がみられる。10は、剣形模造品である。11・12は磨石、13は敲石である。14は砥石の欠損品である。写真11～10は埋土1層出土の鉄滓で、鐵治滓の可能性がある。古墳時代と考えられる。

#### S D-13 (第6図)

F-4区（I区）に位置する。S I-03・05に切られる。幅22～23cm、深さ12cmである。炭化物を僅かに含む暗褐色シルトである。遺物はない。東側は不明だが、西側は調査区外へ伸びていたようである。

#### S D-14 (第6図)

G-4区（I区）に位置する。S I-01・03に切られる。幅26～36cm、深さ10cmである。埋土は褐色シルトである。遺物はない。

調査時には、SD-13とともに住居の周溝と予想し、S I-07と名称を付したが、溝どおりは平行ではない。また、溝間にピットはみられるものの、積極的に住居とすることはできないと判断した。従って、それぞれ独立した溝として扱った。

#### S D-18 (第16図)

G-5区（I区）中心に位置する。SD-02に切られる。規模は、幅35～45cm・深さ約7cm（上部削平）・長さは3.4cm以上である。SD-07と並行するが、関連は不明である。古墳時代の土師器片が僅かに出土した。

#### 土壤跡

#### S K-05 (第18図)

F-5区（I区）に位置する。SD-07に切られる。規模は1.77m×0.7m以上、深さ3～5cmである。長方形を呈するものである。



第18図 SK-05平面図

う。古墳時代の土師器片が僅かに出土した。なお、上部は削平されている。

この他に、SK-05の南西側に接する土壌（55cm×40cm以上、深さ約10cm）やC-5区（I区南端）に位置する長楕円形土壌（92cm×40cm、深さ約40cm）がある。前者は南半を削平され、後者は上部の大半をSD-07に切られている。いずれも遺物は出土していないが、古墳時代に属するものであろう。

#### 河川跡（SR-1）（第6図）

II区南西部に位置する。SB-02～05・1号畝状遺構・SK-02に切られる。最大幅5.3m、長さ約15mに渡って検出したが、それでも河川の一部を検出したに過ぎない。川幅はおそらく10mを越すものと推定される。深さは約1.6mである。河川の堆積土層の特徴は、II区西壁を基準に述べる。土層は9層で構成される。1層は粘性のあるシルト層で、上面には凹凸がみられ凹部の一部に火山灰のプロックが含まれるものがある。この火山灰は平安時代（10世紀前半）のものと考えられ、このころには河川上端面はすでに削平を受けていたものと考えられる。2・3層は砂層で、特に3層の深部では粗砂が堆積している。4層は黄褐色シルトを基調とするが、さらには3層に細分される。4層の上部（4a層）では、木炭片が比較的多く出土している。5層もさらには3分でき、黄褐色シルトから序々に砂層に変化する。このうち、5a・5c層は局部的である。6層はオリーブ色の細砂である。7層は灰オリーブ色粘質シルトである。8層は黒褐色粘質シルトで、樹木の枝や葉が炭化せずに含まれている。9層は灰オリーブ色粘土であり、下面には鉄分の集積が認められることから、この集積面が河川底面と考えられる。なお、河底面下約40cm（標高約10m）に礫層が存在するようである。A-3区の深掘区では、5層以下に対応する層は、かなり層相が変化している。

さて、河川跡では1～3層から多くの遺物が出土している。また、4層の上端部に食い込むように出土するものもある。これらの遺物は、ほぼ古墳時代中期のものである。1層では、土師器壺・小型壺・複合口縁壺・須恵器甕など、2層では土師器壺・小型甕・甕・須恵器高壺・甕などが出土している。1・2層では高壺はほとんどみられないこと、石製模造品が多く有孔円板・剣形・勾玉の三種が捕っている。須恵器も1・2層に限られ、住居など他の遺構から出土していない。3層では、多量の土師器が出土し、土器層といった感がある。器種には、土師器壺・高壺・小型鉢・壺（小型・有段口縁など）・甕・瓶・手捏ね上器がある。石製模造品は有孔円板に限られる。1・2層の土器群では、接合関係の認められるものがあり、近接した時期の所産であろう。3層の土器群では、上位層との接合関係は認められず、SI-04出土土器（本来はSI-09に帰属）との接合関係が認められる。

#### 出土遺物（第19図～23図）

ここでは層位別に、実測可能となった土器と比較的残りの良い破片資料などについて述べる

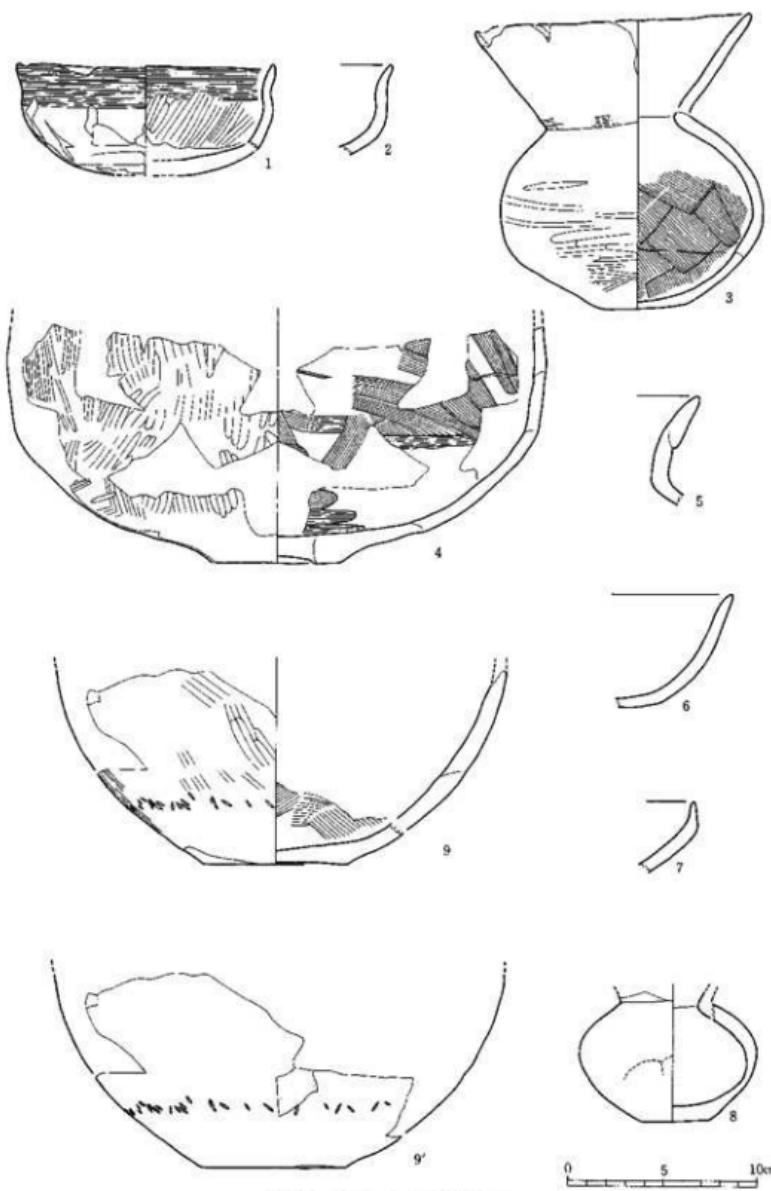
ことにする。なお、SR-1からは平箱で約4箱分が出土したが、さらに調査区外へ続いていることは確実である。

#### 土器

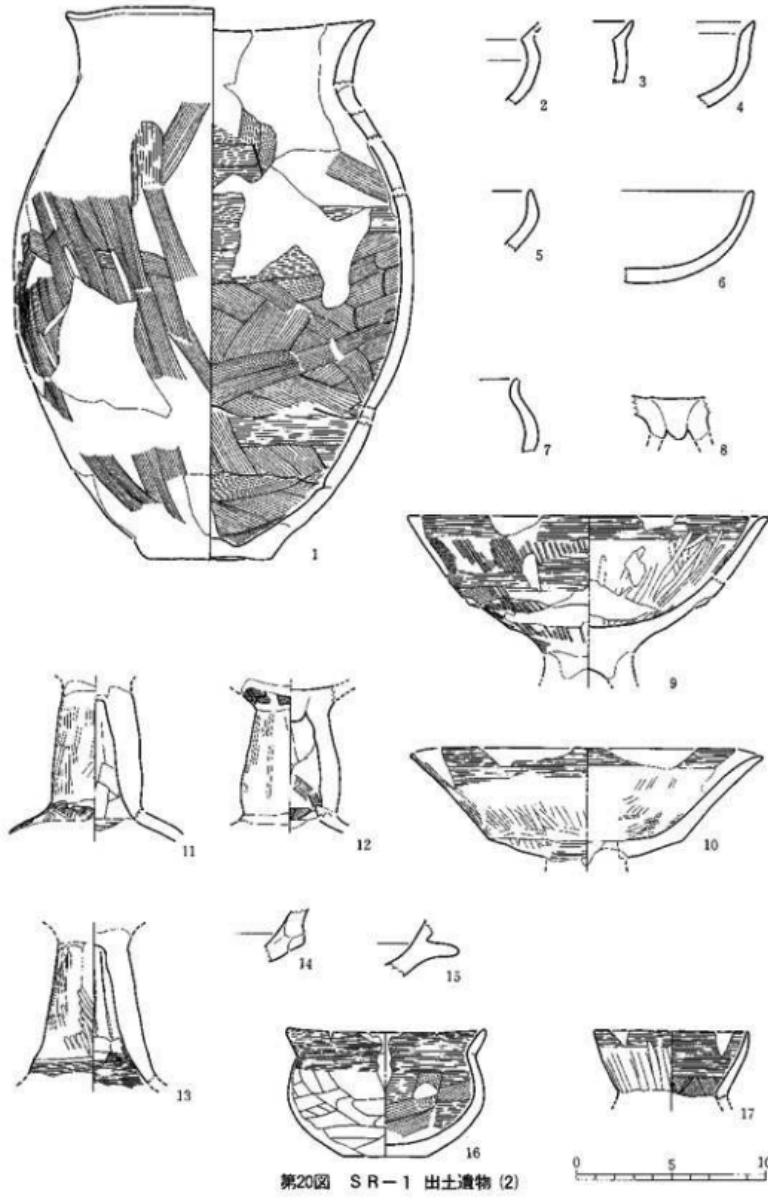
1層出土遺物：第19図1は丸底壺で、体部の立ち上がりは急で、口縁部は直立ぎみである。口縁部と体部の境には、屈曲がみられる。口縁部外面は横ナデ、体部外面はヘラ削りであるが、一部にヘラ磨きらしきものがみられる。同内面は放射状に近いヘラ磨きである。2は丸底壺と思われる。器形は1に近いが、外面の屈曲はみられない。3は小型壺で、底部は平底である。口縁部は内外面ともに横ナデであろう。肩部は外面ヘラ磨き、内面ヘラナデ調整である。底部はヘラ削りである。4は、胴部最大径が下半部にある壺であろう。底部は、中央が凹部を形成し、あたかも高台のごとくである。胴部外面はヘラ磨き、内面はヘラナデである。5は複合口縁の壺の口縁部である。外面は横ナデであるが、内面は磨耗のため不明である。

2層出土遺物：第19図6はやや偏平ぎみの丸底壺である。体部は僅かに内湾しながら立ち上がる。外面は口縁部横ナデ、体部ヘラ削りである。内面は不明。7は短かい口縁部がやや内傾する壺であろう。口縁部外面は横ナデ、外面体部は刷毛目である。これに類似するものは、S I-08出土壺がある。8は小型壺で、底部は平底である。口縁部を欠く。外面ともに磨耗しているが、外面はヘラ削り後磨き調整を加えているようである。内面はナデ調整らしい。9は壺の底部付近であろう。体部はヘラ削り後ヘラ磨きを施す。ヘラ磨きは底部に及ぶ。内面はナデ調整である。ところで、底部より約3cm上に一周すると考えられる圧痕が認められる。焼成前のものと考えられることから、土器製作時のものであろう。おそらく、器面調整か乾燥段階のものではなかろうか。第20図1は、2層上部より出土した長胴壺である。一部は1層から出土している。胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はゆるく外反する。口縁部は剥落が著しいが、外面は横ナデと思われる。胴部は内外面とともにヘラナデであるが、外面の一部にヘラ磨きがみられる。底部は外面ヘラ削り、内面には半球形の凸部がみられる。

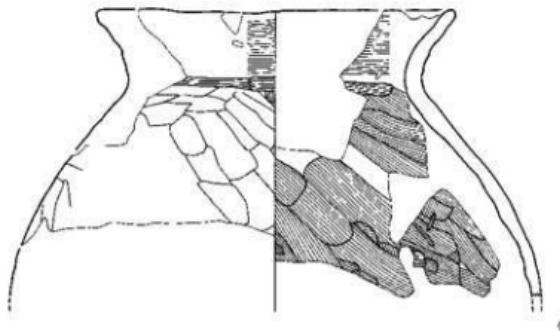
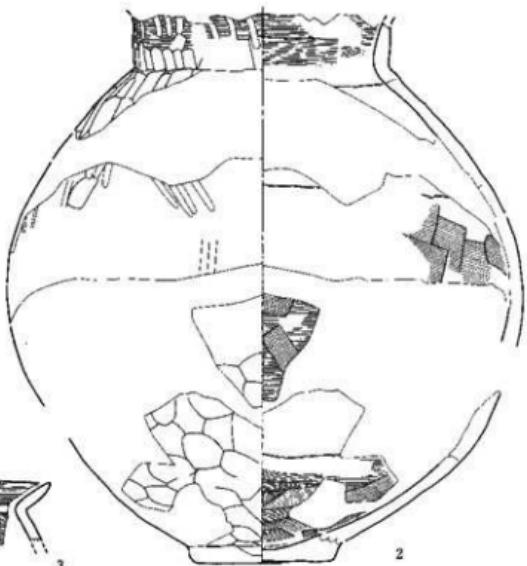
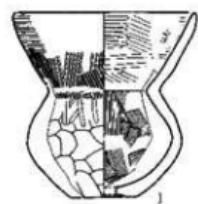
3層出土遺物：第20図2・3は、口縁部は短かく、体部との境には内外ともに明瞭な屈曲がみられる丸底壺と考えられる。3は、口縁部外面が横ナデ、体部ヘラ削りであり、内面はヘラ磨きである。4は丸底壺であろう。4は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は僅かに外反する。口縁部内面には軽い棱線がみられる。体部外面ヘラ削り、内面ヘラ磨きが僅かにみられる。5は、第19図7（2層）と類似するが、体部外面はヘラ磨きのようである。6は内湾しながら立ち上がる半球形に近い丸底壺であろう。口縁部外面は横ナデ、体部外面はヘラ磨きを施す。外面下端ではヘラ削りがみられる。7は内湾しながら立ち上がり、口縁端部が直立ぎみとなる丸底壺であろうか。体部外面はヘラ磨き、内面は軽いヘラ削りである。8は高壺の壺部と脚部の接合部分である。器台のように脚部から壺部まで製作し、後に粘土塊を充填して壺内底面を



第19図 SR-1 出土遺物 (1)

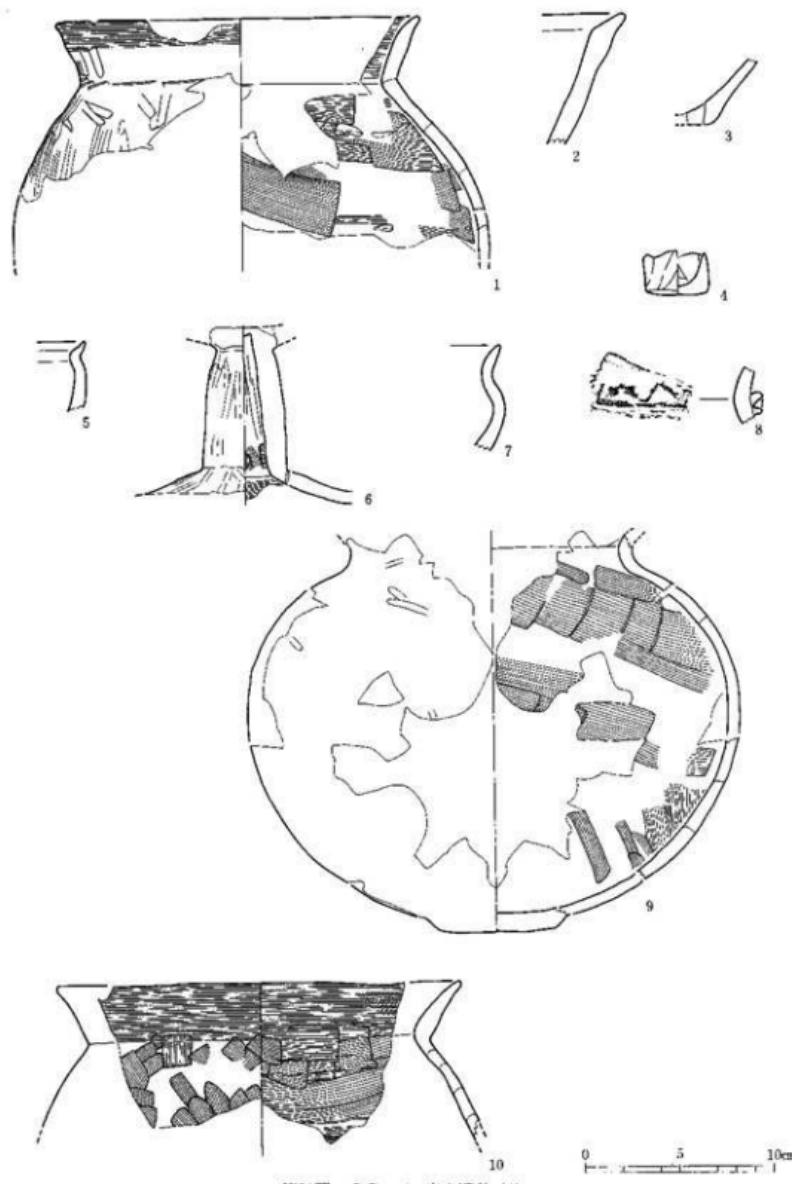


第20図 SR-1 出土遺物 (2)



0 5 10cm

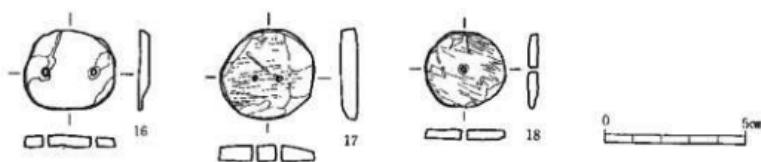
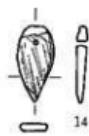
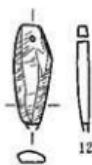
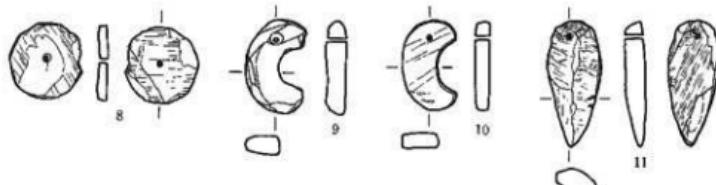
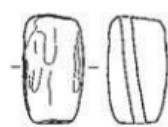
第21図 SR-1 出土遺物 (3)



第22図 SR-1 出土遺物 (4)



0 5 10cm



第23図 S R - 1 出土遺物 (5)

完成させるものである。このような製作手法は、3層で主体的に認められ、上位の層ではみられないようである。9は高坏の坏部である。坏部中位の屈曲は弱く、稜線は不規則である。外面は刷毛目調整後、口縁部横ナデ・体部横位ナデ調整が施される。内面は口縁部横ナデ後、体部に放射状のヘラ磨きを施す。坏部下端に凸部がみられることから、8と同様の接合方法があるいは、当初より凸部を作り出し脚部に接合したのであろう。外面刷毛目調整のみられる高坏は本例以外にほとんどみられず、主体とはならない。10も高坏の坏部である。体部は外傾して立ち上がる。口縁部内外面横ナデ・体部内外面にヘラ磨き調整が施される。坏部底面中央には、逆円錐形の粘土塊の充填が認められる。11~13は高坏脚部である。11は脚上部の脹らみの弱い。脚部外面はヘラ磨きが施されるが、裾部ではその前段階のナデ調整がみられる。内面は脚上部にしづり目がみられ、下部に軽いヘラ削りが施されている。裾部は横ナデあるいはナデ調整が施される。12は脚部の脹らみが11に比べ強い。脚上部外面はヘラ磨き、坏部との接合部ではナデ調整がみられる。内面は上部に弱いしづり目と粘土紐の接合痕らしきものがみられる。下部ではナデ調整が施される。13は下方へゆるやかに聞くものである。外面下部には沈線（？）が一条巡り、これより上部ではヘラ削りののち、ヘラ磨きが施される。下部では横ナデが施される。内面の上部ではしづり目がみられ、その下位では軽いヘラ削り、さらに下位ではヘラナデが施される。14は、有段壺の破片であろう。内外面にヘラ磨きの痕跡を留めている。15は高坏の破片であろうか。外面にナデ調整が施される。16は小型鉢として扱った。平底で、胴部は内湾しながら立ち上がり、口縁部は「く」字状に屈曲する。胴部外面はヘラ削りで底面に及び、内面はナデ調整が施される。後に口縁部内外面に横ナデを施している。本資料の一部はS I-04出土のもの（本来はS I-09に帰属）と接合した。第20図17・第21図1は小型壺（壺）である。第20図17は口縁部破片で、外面は横ナデ後ヘラ磨き（ナデに近い）を施す。内面はナデ調整後横ナデを加えている。第21図1は上げ底風の平底で、体部は算盤玉に近い形状を呈する。外面は、体部ヘラ削り後上部にヘラ磨きを施すようである。口縁部は刷毛目調整後上半部に横ナデを施す。内面は体部にナデ、口縁部にヘラ磨きを施す。2は壺である。胴部は球形に近く、口縁部は直立して立ち上がり、端部は外反するようである。外面胴部は、ヘラ削り後上半部にヘラ磨きが認められる。口縁部は横ナデ調整後下半にヘラ削り、さらに上半にヘラ磨きを施す。内面は、胴部ナデ、口縁部横ナデがそれぞれ施される。本例は3層から主体的に出土したものであるが、さらに4層上面及びS I-04床面（本来はS I-09に帰属する）から出土したものが接合している。3は比較的小型の壺であろう。口縁部は「く」字状に屈曲する。外面は体部刷毛目調整後ヘラ削りを施す。この刷毛目は口縁部に及び、後に横ナデが加えられる。内面は胴部ナデ、口縁部横ナデが施される。4は壺か甌か決めがたいが、ここでは甌としておきたい。胴部は脹らみがあり、口縁部は「く」字状に聞くが、明確な屈曲はない。外面は胴部ヘラ削り、

口縁部横ナデを施す。内面は胴部ナデ調整、口縁部横ナデ調整をそれぞれ施す。また、口縁部の内外面に粗痕が1個ずつみられる。5は壺であろうか。外面ナデ、内面ヘラ削り後ナデ調整が加えられる。底部は低い高台状を呈する。第22図1は壺である。胴部は球形に近いものと思われ、口縁部は「く」字状に屈曲する。外面胴部はヘラ削り後、ヘラ磨きが部分的にみられる。口縁部は下半にナデツケが施され、その後上半に横ナデが施される。内面は胴部ナデ、口縁部横ナデが施される。2は壺あるいは壺の口縁部と思われ、前者の可能性が強い。内外面ヘラ磨きで、内面に屈曲がみられる。3は多孔式の瓶であろう、孔は2個確認できる。内面に刷毛目調査が施される。4は、手捏ね土器である。この手捏ね土器は、SR-1では3層に限られ、住居ではSI-08に限られる。

4層上面出土遺物：3層出土遺物と時期的には同一とみてよい七器群であるが、ここでは分けて示す。第22図5は口縁部内外面に屈曲をもつ丸底壺であろう。口縁部は極めて短い。外面は磨耗して不明瞭であるが、体部はナデ調整らしい。内面は口縁部横ナデ、体部ナデが施される。6は高壺の脚部である。脚上部と裾部の境に明瞭な屈曲をもつ。上端の側面には接合面がみられ、頂上部がそのまま壺部の内底面となる例である。外面は全面ヘラ磨きが施され、内面は柱状部にしばり目と下部にヘラナデが、裾部に横位のナデ調整がそれぞれ施される。7は第20図16のような小型鉢か、あるいは壺であろう。調整は不明瞭であるが、体部は外面ヘラ磨き、内面ナデ調整と思われる。8は壺であろうか。口縁部の破片であるが、その屈曲は弱く、外面に隆帯の貼付がみられる。この隆帯は特異で、横位の細い隆帯の上位に波状の隆帯を貼付けている。波状隆帯と横位隆帯の間には「上」状の刺突が施される。9は胴部が球形を呈する壺である。内外面ともに剝落が著しいが、外面はヘラ磨き、内面ヘラナデが施される。10は比較的小型の壺であろう。口縁部は「く」字状に屈曲する。外面は口縁部横ナデ後、粗雑なナデ調整を施す。内面は口縁部横ナデ、胴部ナデ調整を施す。

#### 須恵器（第23図）

河川跡から出土する須恵器は埋土1・2層に限られ、高壺・壺・甕の器種がみられる。また、須恵器の出土は河川跡に限られ、住居跡等の他の遺構からは出土していない。

1は1層より出土した壺の口縁部破片と考えられる。外面には二条の凸帯が巡り、その間に波状文がみられる。凸帯はやや雑な作りで、貼付によるものであろう。内面にはナデ調整が施される。2は無蓋高壺と思われる。口縁部は外反して立ち上がり、端部内面に一条の沈線が巡る。口唇部は丸みをもつ。外面に端正な凸帯が一条確認できる。環元が充分でなく、灰色を呈する。2層から出土したものである。3は有蓋・無蓋のいずれか不明であるが、小型高壺の脚部である。脚は「ハ」字形に開く。脚部には波状文がみられ、文様の下部に円孔が穿たれている。4は胫体部上半の破片で、2層下部より出土した。器厚は薄く、端正な作りである。体部

の最も張出す部位よりやや上に円孔が穿たれている。この孔の上下には文様帶を持たないようである。他の逸に比べやや大型のようである。5は逸か蓋の口縁部であろう。口縁端部は角形を呈し、また、波状文が施される。その下位には一条の凸帯が巡る。6は逸の体部であろう。体部は4ほど肩は張らないと考えられるが、球体に近いものであろう。外面には2条の沈線が巡り、その下位には細かな波状文がみられる。4・5は河川跡の排水土中より表探したものである。これらの須恵器は、後述する表土中の1点を含め、いずれも古墳時代中期に属するものである。

#### その他（第23図）

その他の遺物には、土鍾・石製模造品がある。土鍾（第23図7）は3層から出土したもので、円筒形を呈するものである。模造品には円板・剣形・勾玉の三種があり、総数11点である。1・2層では三種が揃っており、円板1点・剣形5点・勾玉2点である。3層では円板（鏡形）に限られ、3点が出土している。8は1層上面より出土した有孔円板である。9～15は1・2層より出土したもの（層位の区別は困難であった）で、9・10は勾玉、11～15は剣形であるが、14・15は中央に稜を持たないものである。また、11は2ヶの孔があるが、そのうちの1ヶは未貫通のものである。16～18は3層から出土した円板である。16・17は、孔が2ヶずつある。

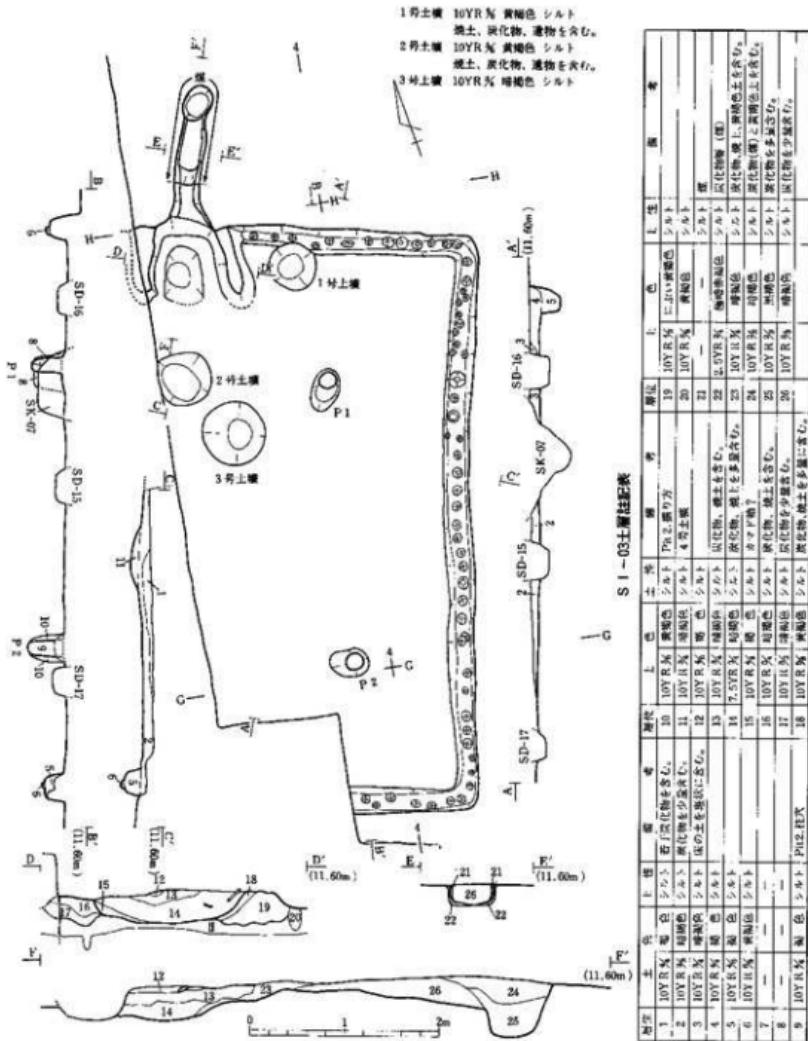
以上が、河川跡から出土した遺物である。河川跡出土ということから、層位別に把握できた遺物にも一定の制約がある。しかし、これまで本遺跡で古墳時代中期の遺物が層位的に分離できる例は階無であった点で成果を上げることが期待できよう。しかも、これらには他地域との比較が可能な須恵器が共伴していることから注目される。

### （2）平安時代の遺構と遺物

平安時代に属する遺構は、住居跡3軒・掘立柱建物跡1棟・土壙跡2基・溝跡1条・畝状遺構3ヶ所がある。

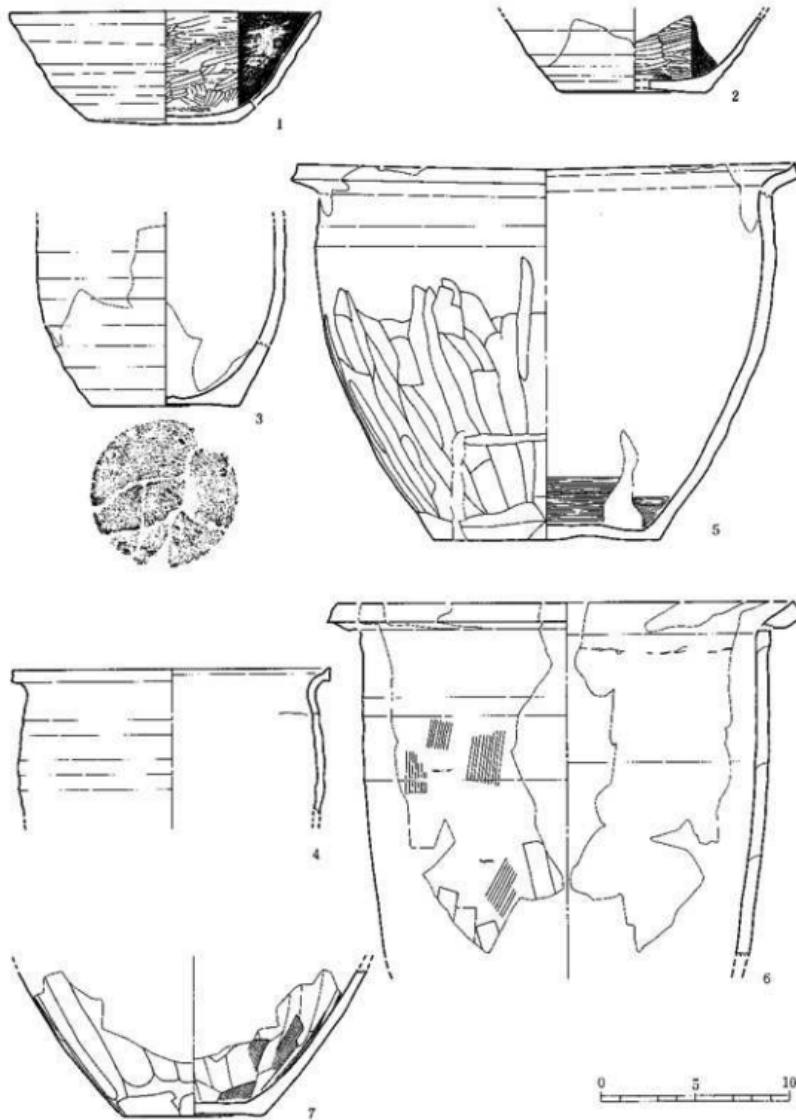
#### 住居跡

S I-03（第24図）：G-3・4区（I区）に位置する。SK-07・畝状遺構（2号・3号）に切られ、SD-13・14を切る。規模は、東壁6.02m×北壁3.55mで、おそらく1辺約6mの略正方形と推定される。西側約5mが調査区外へ伸びる。壁高は北壁で15cm前後確認できたが、南側では表土除去後すでに床面がほぼ露出している状況で、壁は確認できない。また、床面は平坦で、畝状遺構の溝が床面に掘り込まれている状況であった。カマドは、北壁にありその中央に位置するものと予想される。袖間は広く、規模も大きい。煙道は長さ1.43m・幅0.27m、中央付近の底面が最も高く、煙出し部側に下がっていく。先端の煙出し部は、ピット状になってしまおり規模は0.38m×0.28m・深さ0.56mである。煙道底面が煙出し側に下がる部分から煙出し部にかけては、壁面がススの付着によって黒色に変化している。調査範囲内には貯蔵穴は確認できないが、カマド前とカマド東側には円形の浅い土壙が3基検出されている。1号は52cm

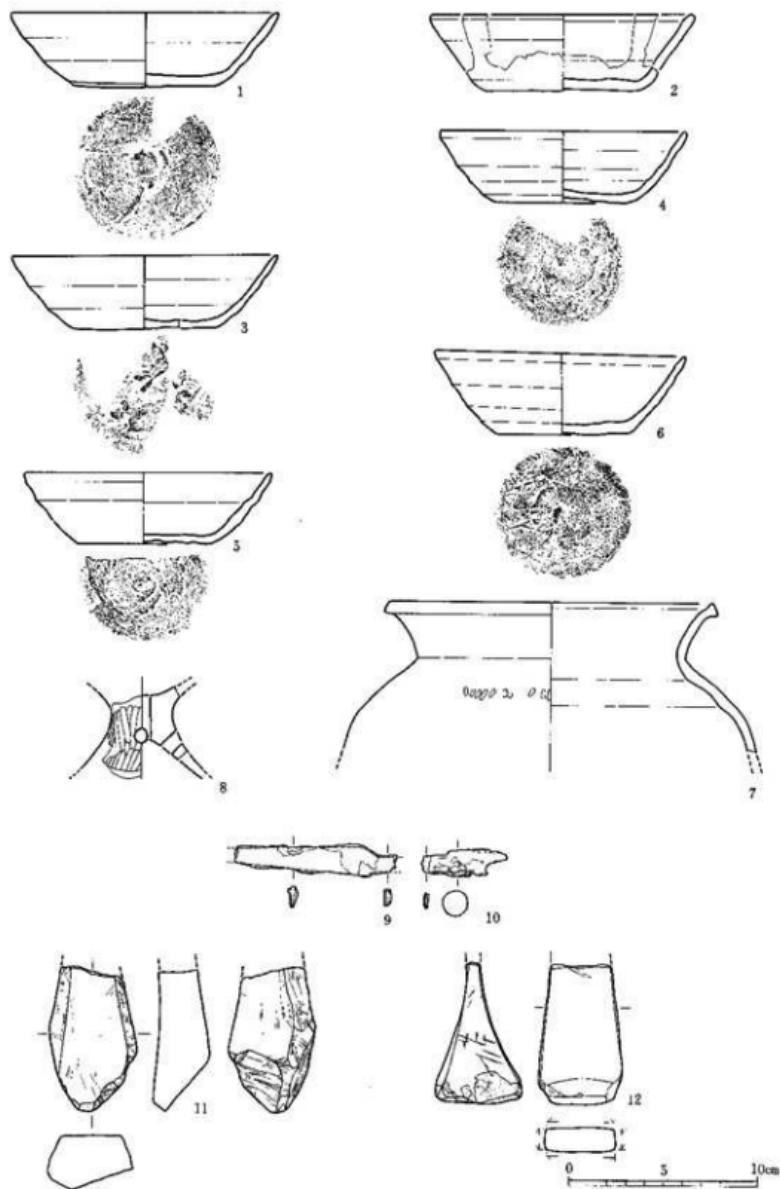


第24図 S I - 03 平面・断面図

×48cm・深さ約22cm、2号は61cm×59cm・深さ約20cm、3号は68cm×65cm・深さ9cmの規模である。柱穴は2基検出できた。埋土は5層確認でき、自然堆積を示す。周溝（號溝）は比較的



第25図 S I - 03 出土遺物 (1)



第26図 S I - 03 出土遺物 (2)

幅広く、底面には多数の小ビットを検出した。これは壁柱穴群と考えられ、壁の土留めや上層と関連するものであろう。遺物はカマド内及びその手前で出土しているが、調査終了直前のため押しでカマド西側床面より須恵器壊など多くの土器が出土した。また、S I-04出土土器と接合するものや同一個体と考えられるものが比較的多く出土している。

#### 出土遺物（第25図・26図）

遺物には土師器・須恵器・鉄器・石製品がある。

土師器には壊・甕がある。壊はロクロ調整・内面黒色処理を施すものが、4個分出土している。1・2はいずれも底部切り離し不明で、手持ちヘラ削り調整を施す。体部には及ばない。甕は図示したものは5点あるが、他に長胴甕（5個体）・小型甕（1個体分）がある。3はロクロ調整の小型甕で、底部は回転糸切り無調整である。埋土2層より出土した。4も小型甕で、器厚は薄い。ロクロ調整である。カマド内5層と底面から出土した。5は口縁部に最大径があり器高の低い広口の甕である。外面はロクロ調整後、体部下半にヘラ削りを施す。内面底部付近には横位の強いナデを施す。6は長胴甕の上半部の破片で、叩き成形後、ロクロ調整・ヘラ削りを施す。7も長胴甕の底部付近である。他の長胴甕には格子状叩き目をもつものがあり、S I-04のものと接合した。

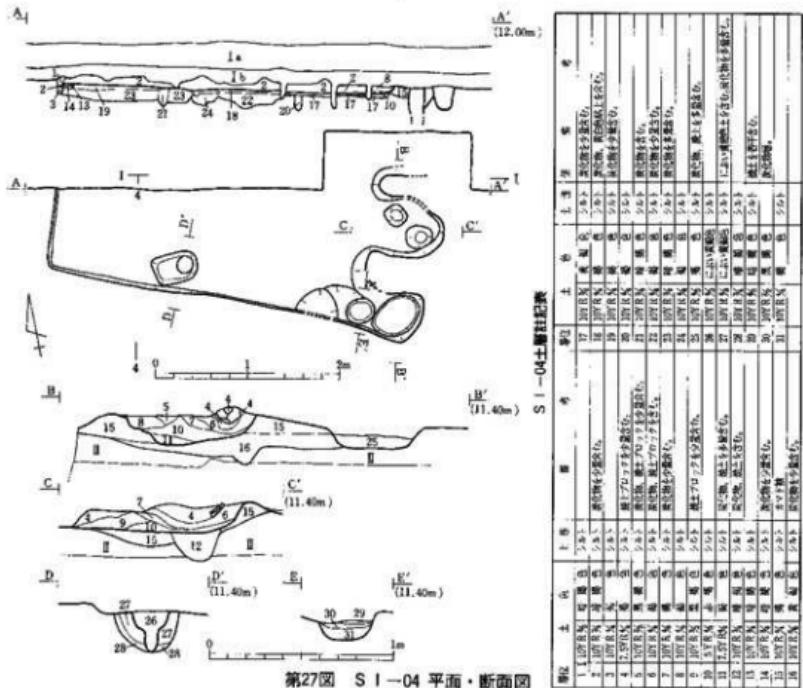
須恵器には壊・甕がある。第26図1～6は、いずれも口径に対して底径が大きく器高の低い壊である。底部切り離しは、回転ヘラ切り無調整である。他にも図化できない壊が約5個体分あり特徴は共通するが、1点だけ底部の回転糸切り無調整のものがある。これらの壊は、法量や底部切り離し手法に規格性・統一性が看取される。甕は3個分あり、いずれも比較的小型のものと考えられる。図化できたのは1点である。7は器厚の薄い小型甕である。頸部下に平行叩き目の痕跡を留め、内面はロクロナデが施されるがて具痕は認められない。

住居跡は完掘できなかったが、土器組成は揃っているものと予想され、須恵器が卓越する特徴を示している。また、後述するS I-04との接合関係が認められる。

その他には、柄の一部が残る刀子（9・10）と砥石（仕上げ砥？）2点（11・12）がある。また、古墳時代前期の器台（18）がある。

S I-04（第27図）：H-3・4（I区）に位置する。東壁付近では近世（？）の柱穴に切られ、S I-09を切る。北部は道路に、上部は耕作によって削平されている。規模は、南壁3.88m、東壁2m以上を測る。南側約1mを調査したことになる。壁高は5～10cm確認できたに過ぎない。床面は平坦であるが、東側へやや傾斜している。カマドは東壁にあり、焼き口と袖の基底部が確認できた。南東コーナーには浅い土壤とビットがある。主柱穴や周溝は確認できない。埋土も局部的なものを除けば1層である。床下には掘り方が確認できた。

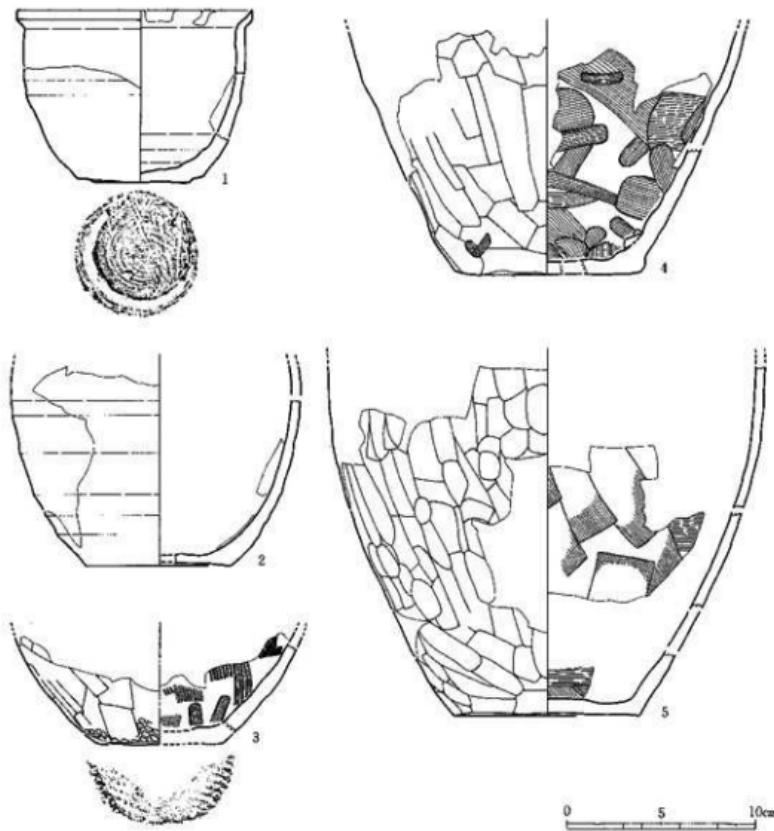
#### 出土遺物（第28図）



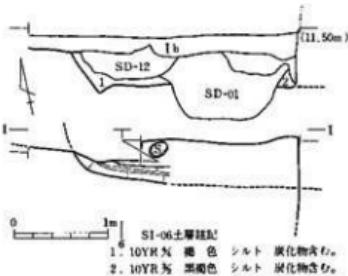
第27図 S I - 04 平面・断面図

遺物には土師器壺・須恵器壺がある。土師器壺や須恵器壺は確認できない。須恵器壺はS I - 03の壺（第26図3）と接合した。土師器壺は5個体分出土している。1は極小の壺で、内外ロクロ調整で、底部は回転糸切り無調整である。底部は切り直したために段差を生じている。この壺の一部は、S I - 03から出土したものが接合した。2は小型壺で、内外ロクロ調整で底部は回転糸切り無調整である。3～5は、調整段階にロクロを使用した長胴壺であろう。いずれも、外面へラ削り内面ナデ調整（3は一部刷毛目）が施される。ただ、3は成形段階の格子状叩き目がみられ、底面に及ぶ。接合できなかった胴部破片の多くは、S I - 03から出土している。また本住居からは古墳時代中期頃の土器片が多く出土している。おそらく、床下にあるS I - 09起源のものが多いと考えられ、その一部はS R - 01埋3層のものと接合関係が認められた。

S I - 06（第29図）：H - 6区（I区）に位置する。中世のS D - 01・06に切られ、直接重複関係は確認できないがS D - 07を切るものと予想される。また、S B - 06との重複関係は不明である。南壁の一部と南西コーナーを検出したに過ぎず、規模・特徴は不明である。周溝の存在が確認できた。遺物は、内黒の土師器壺片（ロクロ使用）が僅かに出土した。



第28図 S I - 04 出土遺物



第29図 S I - 06 平面・断面図

### 掘立柱建物跡

平安時代と考えられる建物跡は1棟のみである。

#### S B-06 (第30図)

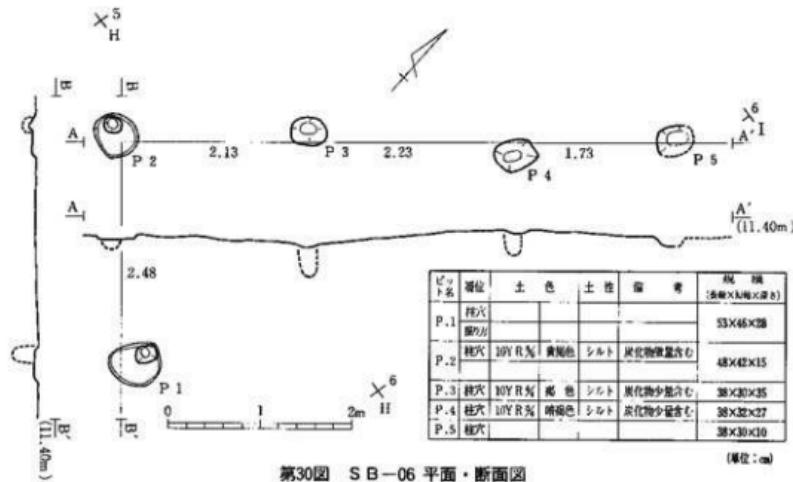
G-5区・H-6区(I区)に位置する。SD-12に切られ、SI-08を切る。西辺は3間かそれ以上(柱間寸法2.13+2.23+1.73)、南辺で1間以上(柱間寸法2.48m)で、規模を確定できない。西辺の方向はN-48°-Eである。柱穴は40~50cm×30~40cm・深さ10~37cmで、明確な掘え方を確認できないものが多い。埋土は黒褐色シルトである。遺物は古墳時代中期頃の土師器片が出土しているが、時期決定資料にはならない。遺構の重複から、古墳時代中期以後中世(SD-12以前)に納まるものである。このうち、調査区内の遺物などから奈良時代以前とは考えにくい。平安時代に属する可能性が最も高いが、堅穴住居跡とは方向が異なる点から同時期のものか不明である。

### 欽状造構跡・溝跡

欽状造構跡及びその可能性のあるものは3ヶ所あり、それに付属する溝跡1条がある。欽状造構は視覚的には、規格性のある溝群によって一定の空間を占有するものと扱う。

#### 1号欽状造構跡 (第31図)

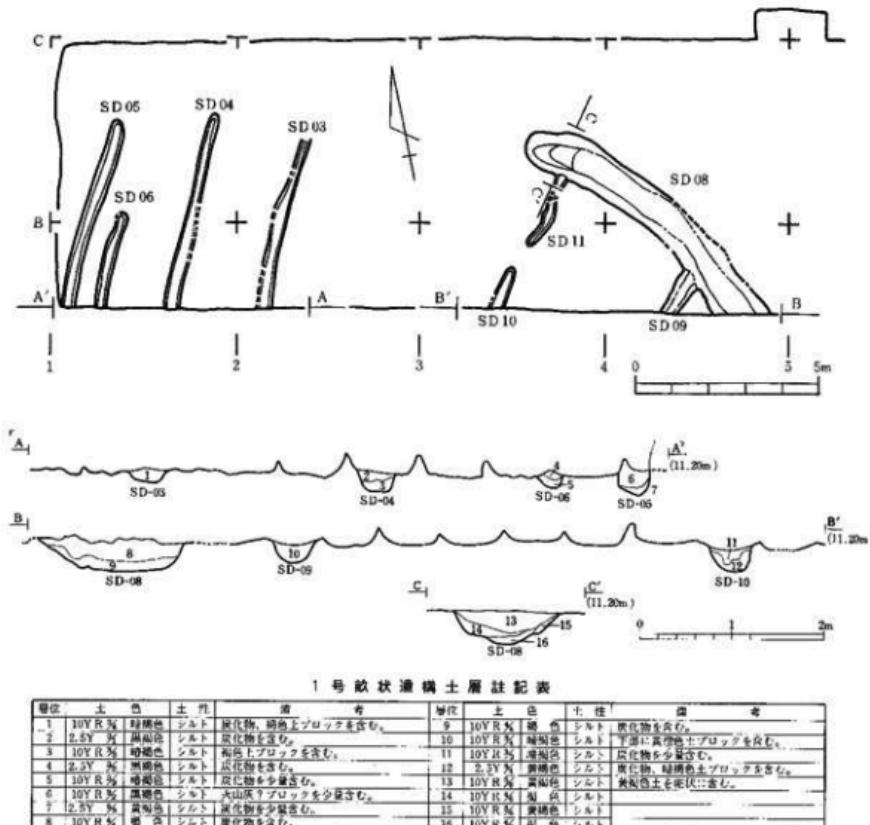
II区西部に位置する。近世初頭の建物跡(SB-02~05)・柱穴群に切られ、SD-07・SR-01を切る。SD-03~SD-11の欽溝が確認できるが、さらに西側調査外へ伸びるものと考えられる。東側はSD-08が検出され(幅1.2m前後、深さ0.35m前後)、これによって区画されている。なお、SD-09・SD-11とは切り合いが認められず、同時期と考えられる。欽部



第30図 SB-06 平面・断面図

に相当する部分は、SD-03～05間では2～2.2mであり、SD-03とSD-10やSD-10とSD-09の間隔はそれぞれ約6m、約4mで、3倍・2倍の幅がある。この間に2m間隔の溝が存在したかどうかは不明である。溝は、幅30～50cm、深さ約20～30cmでほぼ揃っている。長さは、SD-04付近で約5.5m確認できる。溝の方向は、N-5°40'WからN-12°20'Eのふれ幅に納まり、規格性が認められる。埋土にも共通性が認められ、黒色～黒褐色シルトで構成される。また、SD-05・06埋土及びⅡ区西壁Ⅱ層上の凹部に、ブロック状の灰白色火山灰が認められた。従って、火山灰降下時期頃を下限とするものであろう。

遺物は、古墳時代中期頃の破片が多いが、僅かにロクロ使用土器器環（内窓）が出土して



第31図 1号収状造構平面・断面図

いる。

#### 2号鉢状遺構（第32図）

G-4区（I区）に位置する。SI-03・3号鉢状遺構を切る。SD-15～17の3条の鉢溝が検出されたが、さらに南側に展開する可能性がある。溝間（鉢部）は約1.6m等間隔で、溝は幅約35cm前後、深さ10～20cmではほぼ一定である。長さは最大3.1m以上である。方向はN-80°～E前後である。埋土は暗褐色シルトである。遺物は比較的多いが、これはSI-03を切っているためと考えられる。SI-03の土師器甕（第25図5・7）、須恵器壺（第26図2）の一部はSD-15・16から出土したものである。本遺構に伴うと考えられるものに須恵器壺（第33図1）がある。体部は外傾して立ち上がり、ロクロ目は明瞭である。底部は回転糸切り無調整である。

#### 3号鉢状遺構（第32図）

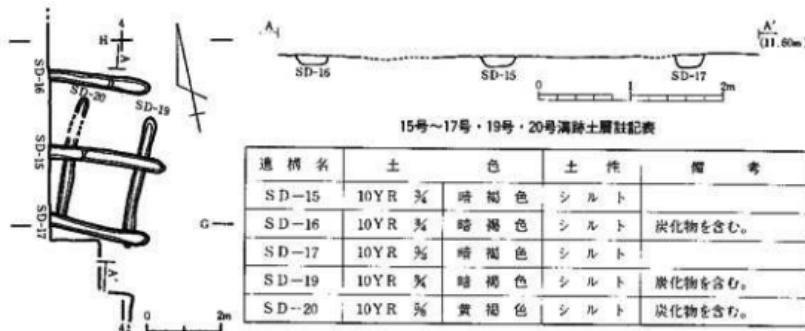
G-4区（I区）に位置する。2号鉢状遺構に切られ、SI-03を切る。SD-19・20の2条が確認されたが、さらに西側へ展開するものと考えられる。溝間（鉢部）は約1.6mを測り、溝は幅30cm・深さ12cm前後である。方向は約N-8°～Wで、2号鉢状遺構とほぼ直交する。遺物はロクロ土師器片が僅かに出土している。

### 土 壤 跡

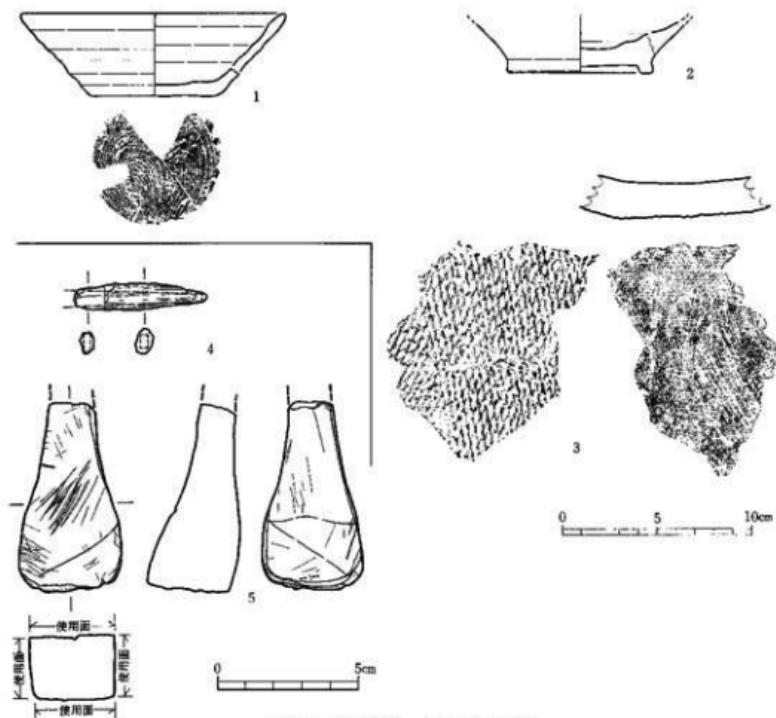
土壤跡は3基検出されている。いずれも、鉢状遺構に隣接する特徴がある。同じ特徴は仙台市南部の六反田遺跡においても認められた。

#### SK-01（第34図）

B-3区（II区）に位置する。SB-02・03に切られ、SK-02を切る。規模は1.48m×1.3m・深さ0.42mで、不整楕円形を呈する。底面は平坦であるが、南東側では階段状の段差がある。埋土は7層で構成され、自然堆積を示す。遺物は出土していない。遺構の重複関係などから平安時代のものと考えられる。



第32図 2号・3号鉢状遺構 平面・断面図



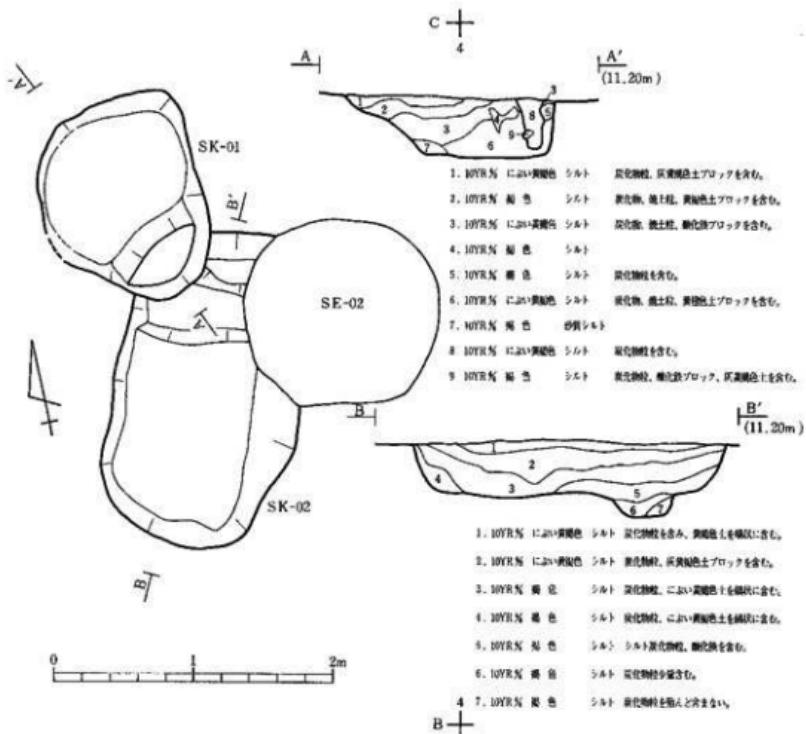
第33図 故状遺構・土壤跡出土遺物

S K-02 (第34図・第33図)

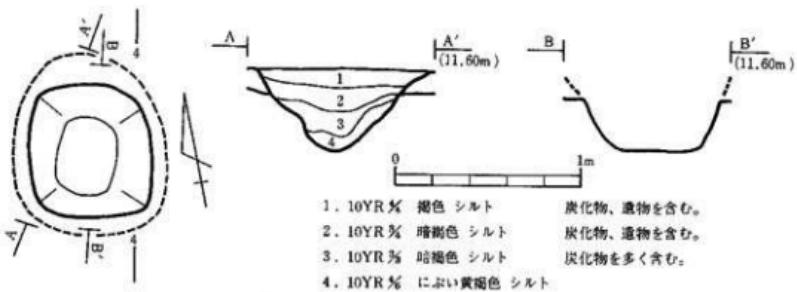
B-3区(II区)に位置する。SK-01・SE-02・SB-04に切られ、SR-01を切る。規模は2.3m×1.36m・深さ0.4m(最深部0.52m)で、長楕円形あるいは限丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦であるが、北部には溝状の段差がある。埋土は7層で構成され、自然堆積を示す。遺物は、須恵器・鉄器・瓦がある。2は須恵器長頸壺の底部片である。内底面には自然釉がみられる。胎土は白色・黒色の粒子を含む特徴的なもので、灰白色を呈する。おそらく在地のものではないであろう。3は平瓦で、凸面には繩目、凹面には布目痕があり、これをナデ消している。4は刀子の茎部分と考えられる。前述の須恵器の胎土特徴に共通するものは、T層(耕作土)から比較的多く出土している。須恵器・瓦の出土から平安時代のものである。

S K-07 (第35図・第33図)

G-3区(I区)に位置する。SI-03を切る。掘り込みはSI-03の埋土中にあったため、



第34図 SK-01・02 平面・断面図



第35図 SK-07 平面・断面図

規模を確定できない。推定では、 $1.0\text{m} \times 0.81\text{m}$ ・深さ $0.45\text{m}$ と予想され、楕円形を呈する。断面形は鍋底状を呈する。埋土は4層で構成される。遺物はクロロ土師器や須恵器の細片が出土

し、一部は S I - 03 のものに接合した。2 号・3 号竪状造構と関連するものではないかと予想される。埋土中より、須恵器・土師器の破片と砾石（第33図5）が出土している。

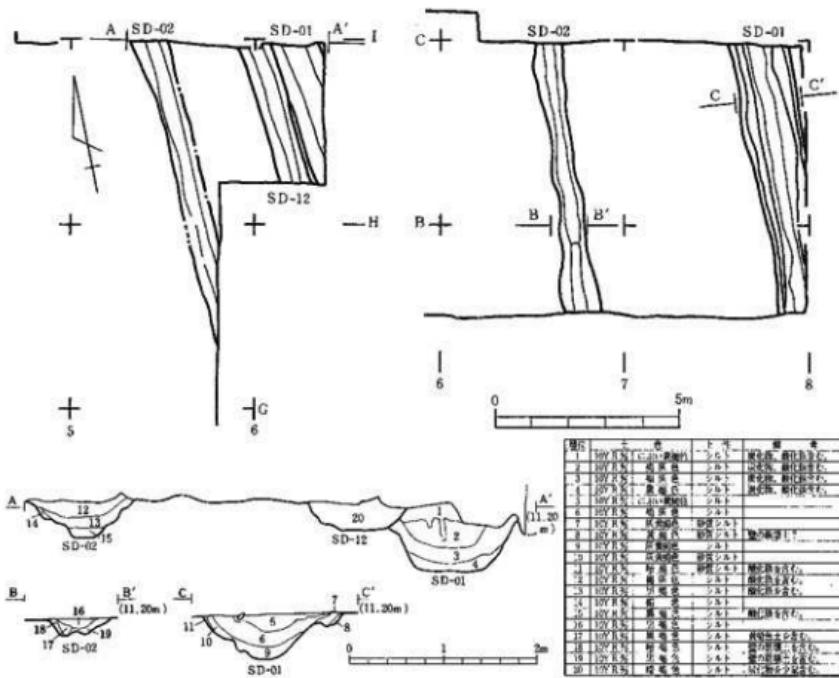
### （3）中世の造構と遺物

中世に属する造構は、溝跡3条がある。

#### 溝 跡

##### S D - 01 (第36図)

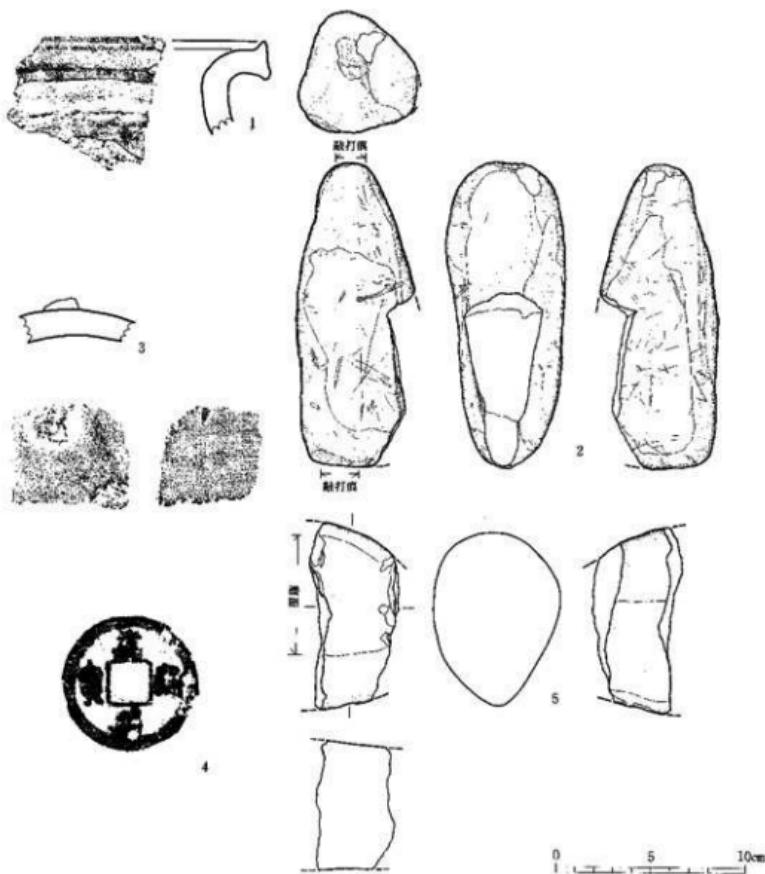
I 区東部 (H-6 区) と II 区東端で検出した。I 区では S I - 06・S D - 07 を切り、S D - 12 に切られる。規模は I 区では上端幅 1.31m 以上、底面幅 0.7m、深さ 0.74m 以上で、断面は鍋底状を呈する。II 区では上端幅約 1.5m 以上、底面幅 0.25~0.3m、深さ 0.5m 以上である。方向は I 区で N-39°40' - W、II 区で N-28°40' - W で差を生じている。埋土は自然堆積を示し、各調査区ともグライ化しており、水路と考えられる。遺物は古墳時代や平安時代の土師器・須恵器・布目瓦が出土したが、最も新しい遺物には瀬戸窯と考えられる鉄袖・灰釉陶器が 1 点ずつ埋土より出土している。おそらく碗であろう。



第36図 S D - 01・12溝跡 平面・断面図

S D-02 (第36図・第37図)

I区北東部とII区東部で検出した。I区ではS I-08・S D-07・S D-18を切り、また、S B-06も切るものであろう。柱穴を、切るものと切られるものがある。II区では重複は認められない。規模はI区では上端幅1.14m以上、深さ0.4m以上、II区で上端幅0.62m以上、深さ0.19m以上である。方向はI区でN-33°40'W、II区でN-25°40'Wである。埋土は自然堆積で、黒色～黒褐色シルトである。遺物は古墳時代の土師器が僅かに出土したほか、II区(B-6区)満底より中国産の青磁碗片が1点出土している。内面には片切彫りの文様がみられる。



第37図 S D-02・12 出土遺物

13~14世紀の龍泉窯系のものであろう。また、常滑窯の口縁部（第37図1）と磨石1点（同図2）が埋土より出土した。

#### S D-12 (第36図・第37図)

H-6区（I区）で検出したが、II区はない。おそらく東側へ屈曲するのである。S D-06・S D-01・S D-07を切る。規模は上端幅1.05m以上、深さ0.35m以上で、断面は「U」字状に近い形態である。方向はN-35°10'~Wである。埋土は単層で、ややグライ化している。遺物は古墳時代の土師器片と中国銭・磨石が出土している。第37図3は丸瓦片で、内面に布目がみられる。4は中国銭の嘉祐通宝（1056年初鑄）であろう。5は磨石である。

中世の遺構は以上であるが、S D-01とS D-02は同時に機能した可能性があり、何らかの施設を区画する目的があったのである。ただ、溝間隔は北側に行くにしたがって狭くなる点が気になる。S D-01が水路と考えられる一方で、S D-02は水が流れた形跡がないことから、溝間に土塁の存在あるいは道路だったことも予想される。いずれにしろ、江戸初期の若林城下町の形成までには、これら中世の遺構は埋没ないし削平されたものと考えられる。現状では正確な時期は不明であるが、S D-02出土遺物より鎌倉~南北朝時代の時間と考えられ、S D-12はS D-01より下るものである。

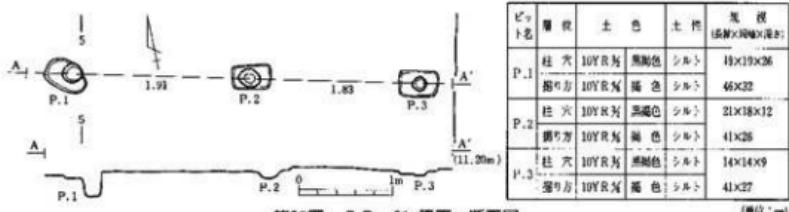
#### (4) 近世初頭の遺構と遺物

近世初頭の遺構には可能性のあるものも含めて、掘立柱建物跡4棟・井戸跡2基・墓壙1基がある。建物跡は直接年代を示す資料は得られなかったが、後述する理由からここで扱う。またSB-01についてもここで扱う。

##### 建物跡

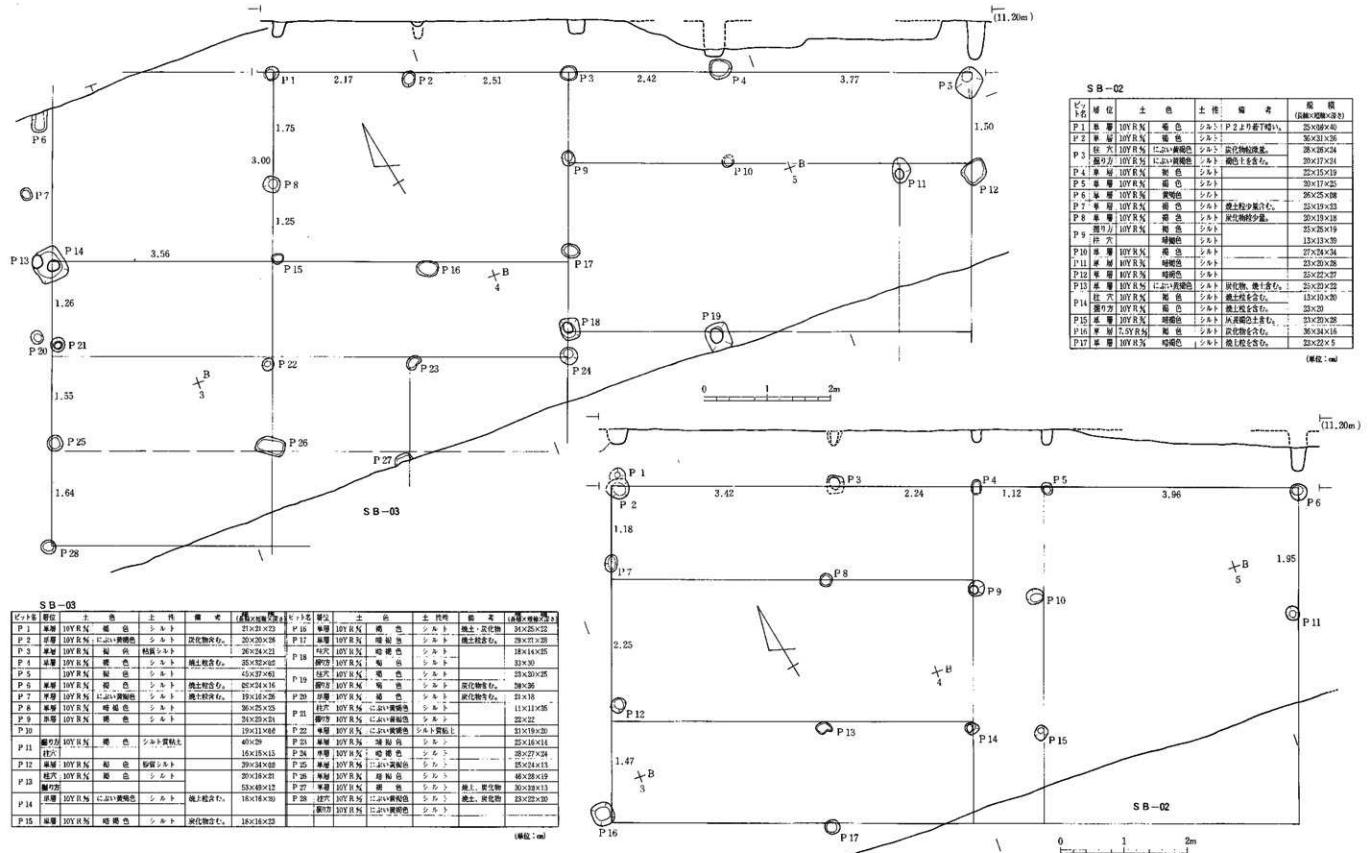
###### S B-01 (第38図)

D-4・5区（I区）に位置する。S D-07を切る。また、S D-02とも重複関係があるものと予想される。西側は、現代の耕作によって削平されている。従って、規模が確定できない。東西2間分（長さ3.75m）を検出した。柱間寸法は1.8~1.9mで揃っている。柱穴には掘り方方が確認され、42~47cm×27~31cm、柱痕は15~20cmである。周囲にこれと組む柱穴を検出できなかったことから、むしろ柱列跡（堀）と考えた方がよいとも思われる。堀との見方がよいな



第38図 S B-01 平面・断面図

（単位：m）



第39図 SB-02・03 建物跡

らば、その方向が約N-76°-Wであることから、後述するSB-04・05とほぼ一致する。従って、これらの建物跡と同時期のものと予想することも可能である。遺物はない。

#### SB-02 (第39図)

II区西部に位置する1号畝状造構・SD-08・SK-02・SR-01を切り、SE-02に切られる。規模は桁行5間半(総長10.74m)、棟間3間(総長4.90m)の東西棟である。方向はN-58°-Wである。柱穴は直径20cm前後であるが、隅柱は30~40cmと大きいものがある。上部を削平されているため掘り方の有無は明確ではないが、柱穴よりやや大きい掘り方を認め得るもののが散見される。間取りは、西側3間×3間に東側に庇が付く建物と当初予想したが、建物としてのまとまりがないようで、さらに東側2間×3間の間仕切りを想定した。すなわち、西側に座敷部分(3×3間)があり、半間隔てて東側に土間(?)部分が予想される。遺物は、古墳時代中期以前の土師器が僅かに出土したが、建物に見合う遺物はない。

#### SB-03 (第39図)

II区西部に位置する。1号畝状造構・SK-01・SD-07・SD-08・SR-01を切る。他の建物跡と直接重複する柱穴はない。規模は桁行7間(総長14.43m)、棟間5間?(総長7.55m)の東西棟と予想される。方向はN-59°-Wで、SB-02とほぼ一致する。柱穴は直径約20cm前後のものが多いが、東部の柱穴は直径30~40cmと大型のものがみられる。間取りは、BS-02と同様西側4間×5間は座敷部分に相当するものと考えられ、東側(3間×5間?)は柱筋の通りが明確ではなく、土間ではないかと予想される。遺物は、古墳時代中期以前の土師器が僅かに出土するが、建物に見合う遺物はない。

#### SB-04 (第40図)

II区西部に位置する。1号畝状造構・SK-02・SD-07・SR-01を切る。他の建物と直接重複する柱穴はない。規模は北辺4間(総長10.4m)、西辺2間以上(4.4m以上)で、東西棟か南北棟か不明である。四面庇あるいは北庇の建物としてよいかは、現状では決め難い。方向は北辺N-77°-Wである。柱穴には一辺ないしは直径が30cm前後の掘り方を伴うものが多くみられる。柱痕は直径約20cm前後である。遺物は古墳時代中期以前の土師器が僅かに出土しているが、建物に見合う時期のものはない。SB-04は後述するSB-05と共に、部屋の間仕切りなどの構造上の特徴が、前述したSB-02・03と異なっている。これは、時期差だけなく、系譜を継ぐものと予想され興味深い。この点については、考察で述べてみたい。

#### SB-05 (第40図)

II区西部に位置する。1号畝状造構・SD-08・SD-07・SR-01を切る。他の建物の柱穴と直接重複する柱穴はない。規模は北辺4間半(総長12.4m)、西辺2間以上(3.6m以上)で、棟方向は不明である。ただ、東側半間が庇としてよいならば、南北棟の可能性もある。

方向は、北辺ではN-75°-Wである。柱穴掘り方は、直径30cm前後である。柱穴底面に根固め石をもつものもある。柱痕が確認できるものは、直径約20cm前後のものが多い。遺物は古墳時代中期以前の土師器が出土しているが、建物に見合うものはない。

### 井戸跡

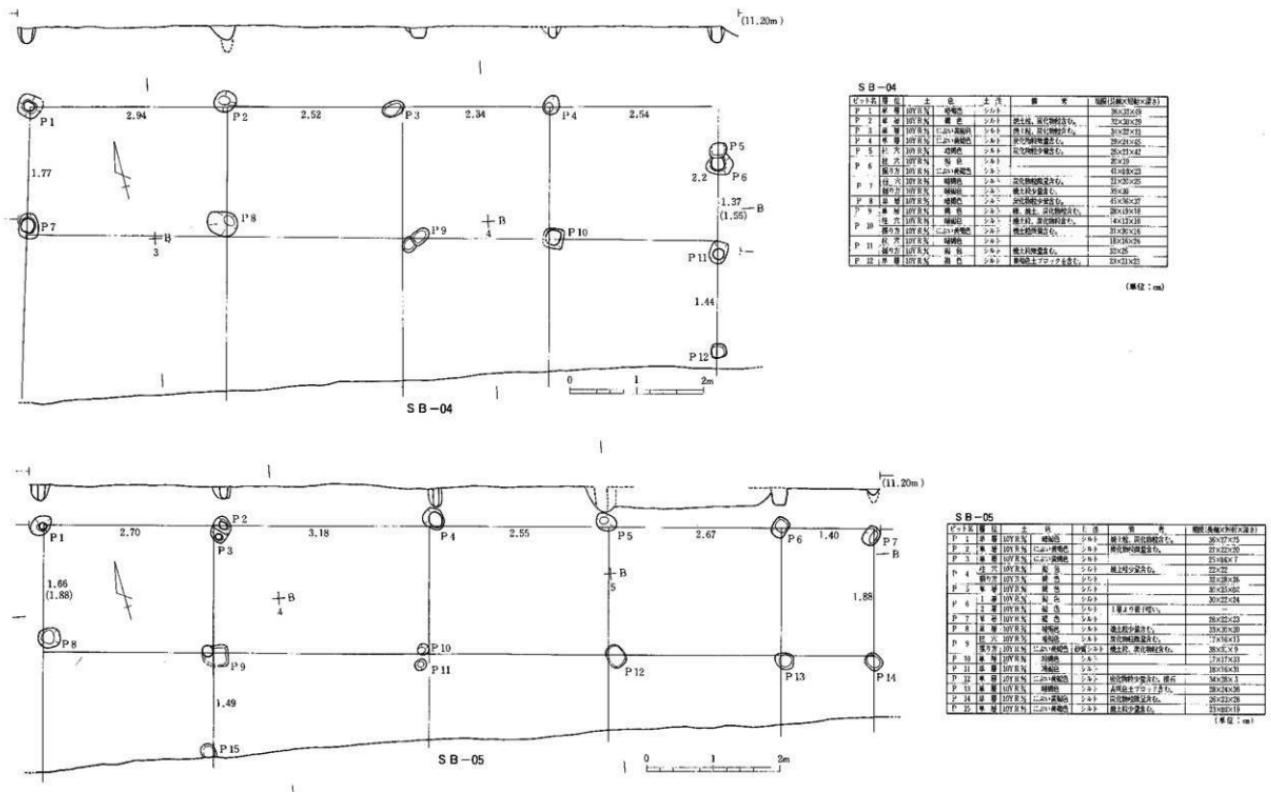
井戸跡は、II区において2基検出されている。

#### S E-01 (第41図)

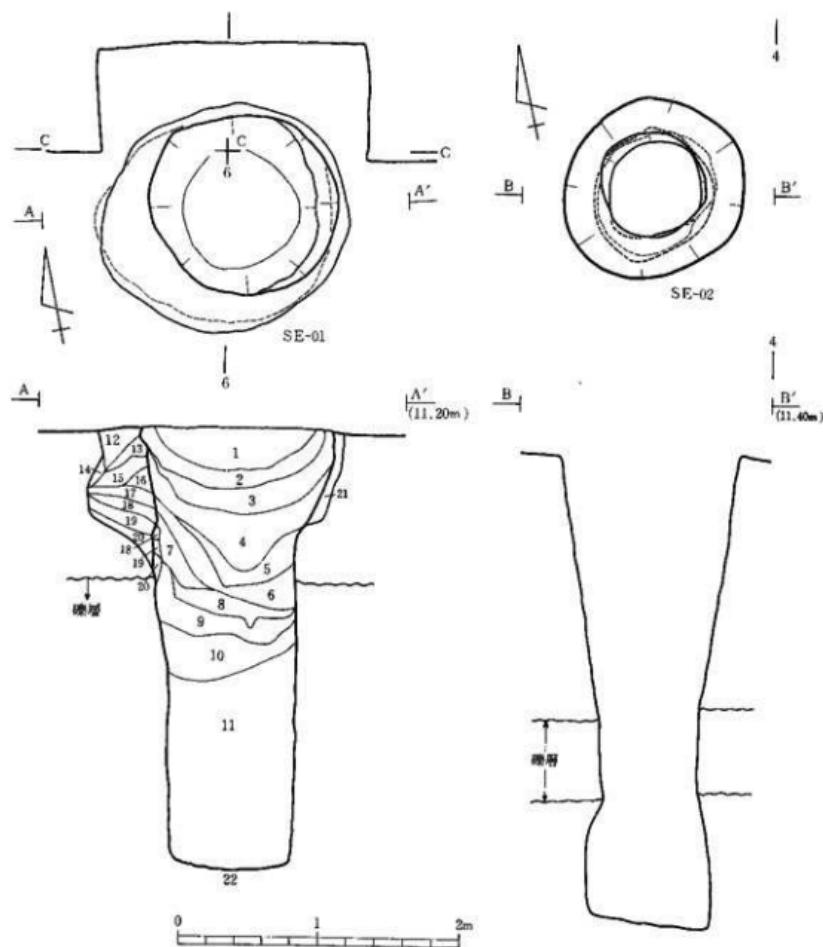
C-6ポイント (II区) 付近に位置する。他の遺構との重複関係はない。規模は本体が1.38m×1.30m、深さ3.17mで、不整円形を呈する。掘り方は、1.81m×1.59m、深さ約1mで不整円形を呈する。本体の底径は約0.8mで、砂礫底である。井桁や井戸側(枠)の材は検出できないことから、素掘り井戸としてよいであろう。壁面の観察では、確認面下約1.1m(標高10.1m)に拳大の礫層(厚さ約0.6m)がみられ、それ以下では砂礫層となる。埋土は、本体部分でグライ化した土壤が堆積し、このうち1~4層・6~10層では薙灰状の黒色の炭化物が含まれている。11層は小礫が混在する砂層であるが、上面に粘土の薄層をのせる。遺物は、主にこの粘土層より上位の層で出土し、特に10層で多い。また、底面及び底面付近の砂礫層中より2点の丸瓦片が出土している。遺物には、美濃灰釉丸皿・長珪石釉(志野)皿・唐津鉄釉鋲鉢・軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・釘(7本以上)・砥石2点・石臼片・漆器碗?(被膜のみ)・骨片が出土している。このうち、底部から出土した丸瓦と埋土中の軒平瓦・唐津鋲鉢の各破片は、SM-01のものと接合した。

#### 出土遺物 (第42図)

1は志野皿で、高台を削り出していない。釉は底面にも認められることから、全面施釉と考えられる。また、見込にピン跡が1ヶみられる。これらの特徴から美濃灰窯末期(V期末)頃のものであろう。2・3は丸瓦片で焼瓦である。表面は銀化しており、2が著しい。凸面は、長軸方向のナデ調整が施され、端部はこれに直交するナデ調整が施される。凹面は布(袋)日と横筋がみられる。胎土中には砂粒が目立ち、黒青色や青灰色を呈する。2は10層と11層(底面付近)のものが接合し、3は底面や11層とSM-01薙底面出土のものが接合した。4は、軒丸瓦であろうか。焼瓦であるが銀化していない。瓦当面は剥落したのか、意識的に削離したのか不明だが、面が失われている。丸瓦部の凸面はナデ調整が施されるが、凹面では一部粗雑なナデが認められるだけで、布日や横筋は認められない。瓦当裏面に開口部を設け、丸瓦部を差し込んでいる。また、丸瓦部は前後の部位を接合しているため、途中から器厚が異なる。また、瓦当と丸瓦部のなす角度が約58°であり、通常の軒丸瓦より銳角である。従って、本隅瓦が想定されよう。胎土は砂粒が少なく、淡黄灰色を呈する。5~11は釘である。頭部が潰れ変形したものが多く、使用済のものである。埋土1層・10層・11層上の粘土層より出土した。他に



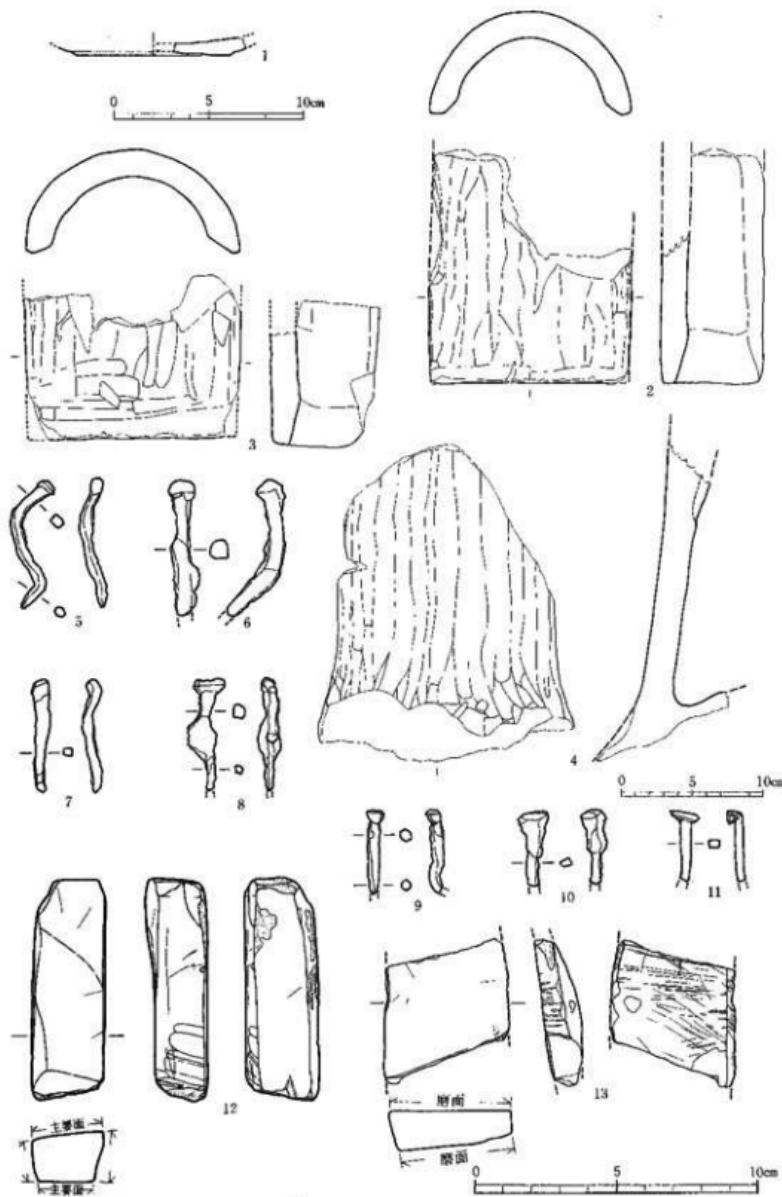
第40図 SB-04・05 平面・断面図



SE-01 土層記述表

番号	土名	土性	備考	番号	土名	土性	備考
1	10Y R 5%	黑褐色		12	10Y R 5%	深褐色	シルト
2	10Y R 5%	紅褐色	有機物を含む。	13	10Y R 5%	褐色	シルト
3	10Y R 5%	褐	有機物を含む。	14	10Y R 5%	褐色	シルト
4	10Y R 5%	黑褐色	有機物を含む。	15	10Y R 5%	褐色	シルト
5	10Y R 5%	黑褐色	有機物を含む。	16	10Y R 5%	褐色	シルト
6	10Y R 5%	黑褐色	有機物を含む。	17	10Y R 5%	褐色	シルト
7	10Y R 5%	红褐色	有機物を含む。	18	10Y R 5%	褐色	シルト
8	10Y R 5%	灰褐色	有機物を含む。	19	10Y R 5%	褐色	シルト
9	10Y R 5%	暗褐色	有機物を含む。	20	10Y R 5%	褐色	シルト
10	10Y R 5%	灰褐色	有機物を含む。	21	10Y R 5%	褐色	シルト
11	10Y R 5%	灰褐色	有機物を含む。	22	-	-	砂 - (砂)

第41図 S E-01・02 平面・断面図

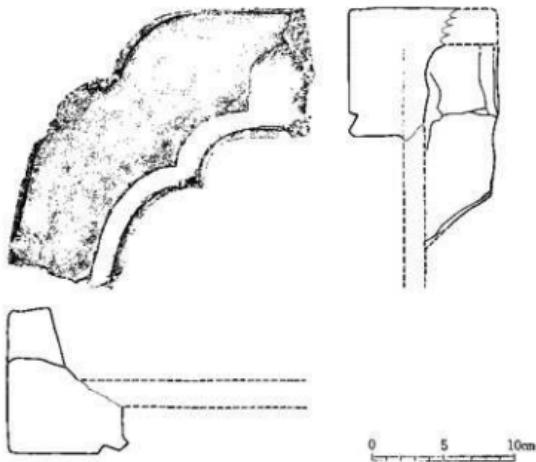


第42図 SE-01 出土遺物

も図示しなかった破片がある。12・13は砾石である。12は小型の完形品で四面を使用している。仕上げ砥と考えられる。主要面には条線がほとんどみられず、側面には条線や溝状の磨面がみられる。13は欠損品で、2面に研ぎ面がみられる。片面と狭少の側に条線がみられる。

#### S E-02 (第41図)

B-3区(II区)に位置する。S B-02・SK-02を切る。規模は直径約1.3m前後、深さ3.39mで、円筒形である。礫層部分ですばまり、下位では再び径を増す。底径は約0.8~0.9mである。埋土は、砂礫層の単層である。砾は拳大のものであるが、中位では人頭大のものが含まれる。遺物は人頭大の砾が出土する直上で、鬼瓦1点が出土している。掘り方が検出されないこと、埋土が単層であることから、湧水がなく短期間に埋め戻されたのではないかと考えられる。これと関連して、鬼瓦が意識的・儀礼的に埋められた可能性があるかもしれない。また、掘り方が認められない点は、井戸掘りの手順を考える際に示唆を与えるものかもしれない。



第43図 S E-02 出土遺物

鬼瓦(第43図1)は破損品で、頂上部から側辺部にかけての部位で、軒丸瓦の外区に相当する部分の破片である。

#### 墓壙

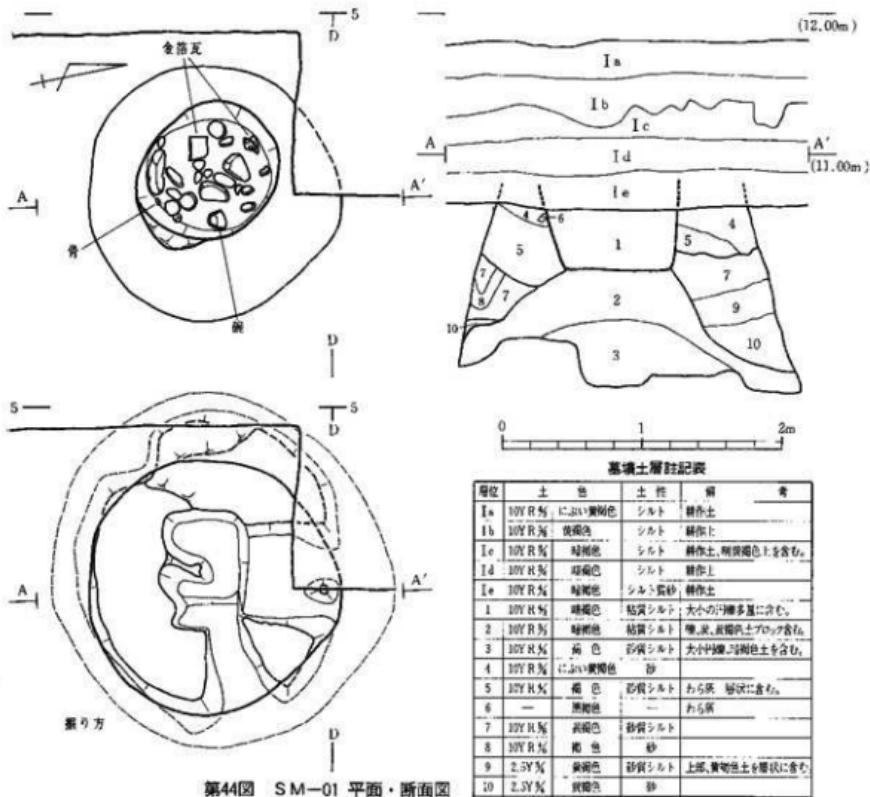
墓壙は1基である。

#### S M-01 (第44図)

C-3・4区(I区)に位置する。遺構の重複は認められないが、上部を約40cm前後削平さ

れている。墓壇本体の規模は $1.14m \times 0.9m$ 深さ $0.43m$ の不整円形である。断面形は逆台形に近い。埋土は、上下で色調などに若干差があったが単層と理解した。壁面付近には、藻状の炭化物が巡り、一部で炭化米が出土した。墓壇内には、埋土下部から壇底にかけて川原石が多く出土し、副葬品は美濃灰釉碗・右巻三巴文軒丸瓦（金箔瓦）・漆器椀（被膜のみ）あり、埋葬時の混入と考えられるものに丸瓦片（2点）がある（1点はS E-01と接合）。前述の川原石は埋葬時に入れられたものであろうか。また、銅製金具1点・釘（3本分）があり、前者は副葬品あるいは棺の一部、後者は棺に関連するものであろう。骨片は、やや南側に偏在し、埋土（中位）より出土している。

墓壇には大型の掘り方が伴う。この掘り方は円形で、壁がオーバーハングするフラスコ状を呈する。規模は上端径が $1.82m$ 前後、底部径が約 $2.5m$ 前後、深さ（北側最深部） $1.33m$ である。

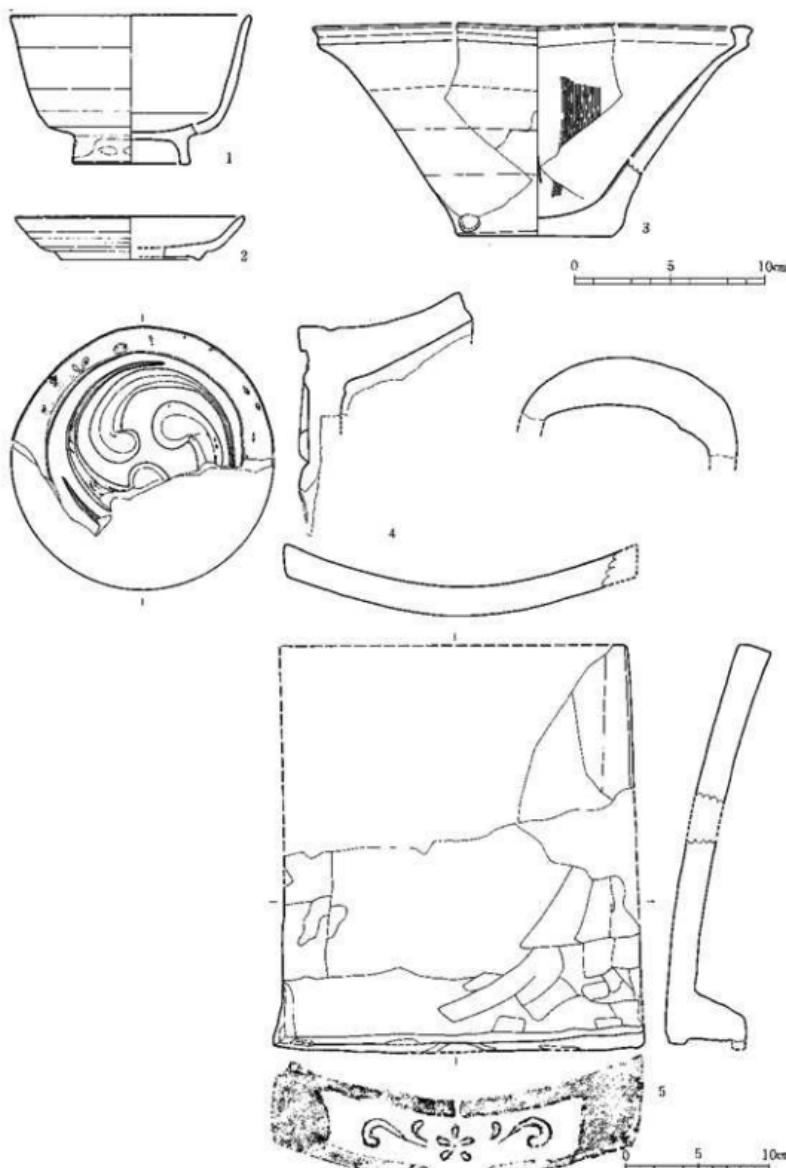


第44図 SM-01 平面・断面図

底面は周辺部が下がり、中央部に向かって高まる。また、東側から西側に向かって溝状の落ち込みがみられ、その先端部（中央）では「コ」字状の一段低い落ち込みがみられる。これに取り付くように、北側にも凹部がある。「コ」字状の落ち込み底面付近から炭化した木片・釘（2～3本分）が出土した。範囲のものが埋納されていたものかもしれない。埋土は9層に細分したが、このうち、6層を除き4～10層は基本層Ⅱ層の細分層が、そのままで落ちたものとも思え、遺物は全く出土しない。2・3層は円礫や炭化物を含むもので、2層の最も下がった壁付近では、軒半瓦（SE-01のものと接合）美濃灰釉皿・唐津大鉢・同鉄釉鉢（SE-01と接合）・釘（5～6本分）が出土している。この掘り方の埋土の堆積状況には不自然を感じ、当初より墓壙の掘り方として掘られたものかどうか疑問である。一方、埋葬方法については、竹の出土位置が南に偏在し、しかも副葬品（墓壙底面）とは対象的に埋土中位にであることや、墓壙が円形で釘が出土することから、円筒形の棺桶内南側に北向き座葬ではないかと予想される。しかし、副葬品と考えられる遺物に完形のものが多く、後に改葬された可能性もあり、また、他に同時期頃の比較資料も答見ではないよう、現状では葬法の判断は難かしい。

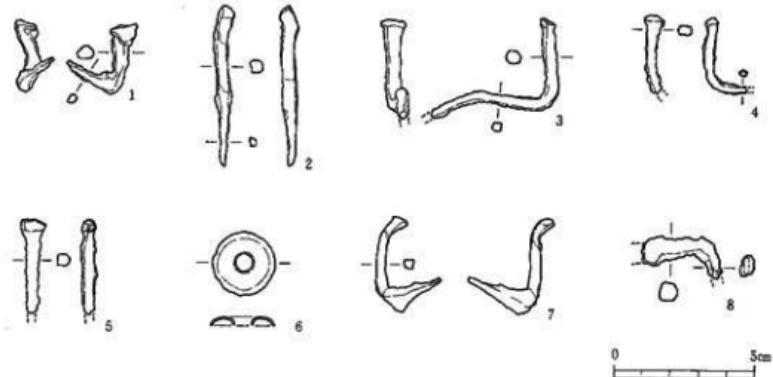
#### 出土遺物（第45図・第46図）

1は美濃灰釉碗である。口縁部はやや端反り（外反）、身は深い。施釉範囲は高台に釉切れがみられるが、疊付以外は全面に及ぶ。貢入が顯著にみられる。美濃の初期の登窯製品と考えられる。これと極似するものは、仙台城三ノ丸跡6号土壙から出土し「元和」銘の木札と共に伴っている。さらに、量産されたものではなく、特注品と考えられている。従って、本例も元和年間かその前後のもので、しかも仙台城や伊達家との関連も予想できる。2は美濃灰釉丸皿である。疊付を除き、全面施釉されている。高台は削り出しで、断面形は逆台形を呈している。見込にはビン跡が、高台内にはトチン跡がそれぞれみられる。初期の登窯の製品とみられ、1と同様の時期のものである。3は唐津鉄釉鉢である。鉄釉は内面全面に施釉されていたと予想され、外面は上半部に施釉されている。口唇部は肥厚し、その直下に肩曲をもつ。筋目は11本単位で、体下部や底面では磨耗して観察できない。外面の底部付近には、重ね焼きの目跡（胎土目）や指頭状の凹部が3ヶ所ずつ認められる。底部は糸切り底である。目跡の特徴から慶長年間以前に製作されたものと考えられるが、内面の磨耗度からかなり長期間使用されたものであろう。4は右巻き巴文軒丸瓦である。煙瓦であるが銀化していない。丸瓦部の凸面はナデ調整がみられ、凹面には横筋らしきものが僅かに認められるが、布目はない。接合時の櫛目が残る。瓦当との接合は、瓦当裏面の凹部に差し込んだものと思われる。瓦当面の外区と内区の巴文の凸部には金箔が押されている。その接着には黒漆が使用されている。巴文は断面カマボコ状を呈し、頭部と尾部は明確に区別される。頭部～尾部の長さは、全円の $\frac{1}{3}$ に達する。瓦当下半部が欠損している。瓦当凹部には型の木目跡がみられる。胎土は砂粒が比較的少なく、淡黄



第45図 SM-01 出土遺物 (1)

灰色を呈する。丸瓦部は極めて短かく、瓦当とのなす角度が119°の鈍角を示すことから、特別な部位に葺かれたものであろう（本隅瓦か）。これと胎土や技術的に類似するものに、S E-01出土の本隅瓦（第42図4）がある。この2点の瓦は、胎土や製作技術において、他の瓦や仙台城三ノ丸出土の瓦と異なっており搬入品の可能性がある。また、検出した建物跡に葺かれたものとも思えない。5は軒平瓦である。燃しはみられない。法量は長さ28cm（推定）幅25.2cm・厚さ平均2cmであり瓦当幅は5.4cmである。瓦当文様は二反転の唐草文を左右に、中央に五弁の網枯梗文を配する。凸面・凹面にナデ調整が施されるが、とりわけ瓦当裏面と凹面の縁辺部には



第46図 SM-01 出土遺物(2)

ていねいなナデ調整が施される。瓦当文様は、仙台城三ノ丸跡出土の軒平瓦A-3類に対応する。1・4は墓壙底面より出土した副葬品である。2は掘り方2層と3層のものが接合した。3は掘り方2層とS E-01の10層と11層上の粘土層のものが接合した。5は掘り方2層とS E-01、10層のものが接合している。第46図1～5・7は鉄釘である。8は鎧の可能性がある。7は墓壙底面、4・5は掘り方中央凹部底面より出土したものである。6は銅製の環状金具で、底部付近の埋土中より出土した。

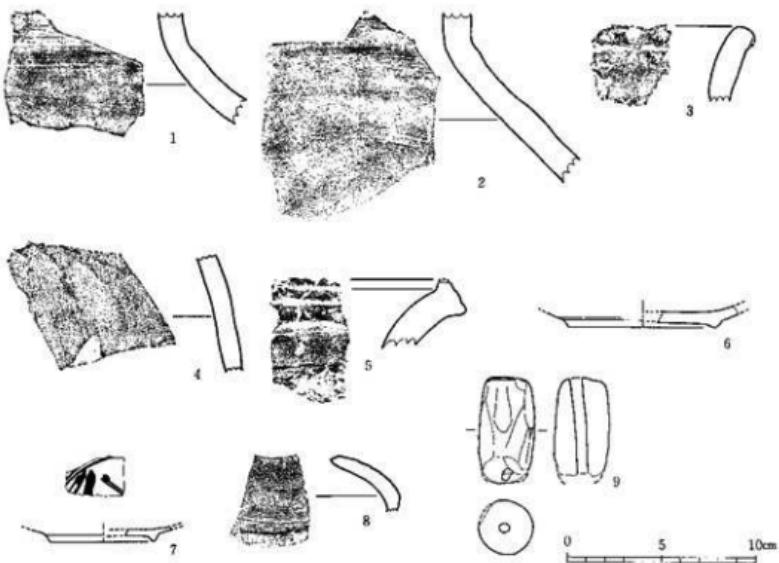
その他に、図示しないが磨津長石釉系の大鉢片が掘り方3層より、瓦質鉢片が同2層より出土している。

#### その他の造構

I区のS D-07に沿うように分布する柱穴やS I-04を切る柱穴、II区で建物として組まなかった柱穴群がある。これらの柱穴には、柱痕をもつものや平面が四角形を呈するものがあり、中世～近世のものと予想され、特に近世以後のものが多く含まれるものと考えられる。調査範囲が狭く擾乱を受けていることから、その詳細は不明である。

### 表土出土遺物（第47図）

表土（I層）出土遺物には、弥生土器、古墳時代前～中期や平安時代の土師器・須恵器、中世陶器、近世陶磁器、瓦、鉄製品・石製品などがある。このうち最も多いものは古墳時代の土師器である。また、18世紀以後の陶磁器も少なくない。しかし、いずれも細片ばかりで充分に



第47図 表土出土遺物

特徴を挙めない。ここでは、主に中世～近世初期のものについて指摘したい。

1・2は環元炎焼成の甕で、叩き目をナデ消している。産地不明である。3は在地産の小型臺の口縁部であろう。白石窯系のものと考えられる。4は勧らしきものが表面に認められ、胎土は灰白色の砂目の特徴をもつ。瀬戸系のものであろうか。5は、環元焼成のもので、口縁部の断面形は独特のものである。産地は不明である。6は志野皿である。高台は削り出しである。高台内では一部に釉がかかるが、中央は露胎となり古朴を呈する。7は、中国産の染付皿である。見込に文様がみられるが、詳細は不明である。明末期頃のものであろう。1～5は鎌倉～南北朝時代のものと考えられる。6・7は江戸時代初期頃のものと考えられる。8は、須恵器残片であろう。波状沈線とカキ目がみられ、下位にヘラ削りが施される。9は円筒形に近い土錐であり、S R-1の例から古墳時代のものであろう。

表1. 土器類調査表

区分番号	遺物番号	遺物名	層位	基盤	上部 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	外因調査	内面調査	分類	備考
9 - 1	273	S I - 01 陶 瓦	地	14.5	-	6.25	口付端：横ナギ、体部：ヘラナギ 底部：横ナギ、ヘラ削り	口付部：横ナギ、体部：ヘラナギ 底部：横ナギ	a類	底部に工具痕	
9 - 2	274a	S I - 01 陶 瓦	地	15.0	-	6.6	口付端：横ナギ、体部：シガキ	口付部：横ナギ	a類		
9 - 3	256	S I - 01 陶 瓦	地	13.2	-	(5.5)	口付端：横ナギ、 体部～底部：ミガキ	ミガキ	a類		
9 - 4	173	S I - 01 陶 瓦	地	-	-	-	口付端：横ナギ、体部：削り	口付部：横ナギ、 体部：ミガキ	a類		
9 - 5	268	S I - 01 陶 瓦	地	14.0	-	6.4	口付端：横ナギ、一部ミガキ 底部：ヘラ削り～ヘラナギ	口付部：横ナギ 底部：ミガキ	c類	粘土の積み上げ痕	
9 - 6	276	S I - 01 陶 瓦	地	13.1	-	(7.2)	口付端：ミガキ、体部：ミガキ	ミガキ	a類	底部：削り～ミガキ	
9 - 7	317	S I - 01 陶 瓦	地	-	-	-	口付端：横ナギ、体部：削り	口付部：横ナギ、 体部：ミガキ	b類		
9 - 8	271	S I - 01 カマツチ 高 瓦	地	-	16.6	(30.5)	瓦面：ミガキ 側面：横ナギ	側面：ヘラナギ～横ナギ	c手法	支脚に利用	
9 - 9	278	S I - 01 陶 瓦	小形 過渡期	11.8	-	(5.3)	口付端：横ナギ、 体部：ヘラガキ	口付部：横ナギ、 体部：ミガキ			
9 - 10	269a	S I - 01 陶 家 瓦	小形 過渡期	11.8	-	(31.2)	口付端：横ナギ、体部：ミガキ 底部：ヘラナギ	口付部：横ナギ、体部：ヘリナ 底部：ヘラナギ	底部：ヘリ削り～ミガキ		
9 - 11	272	S I - 01 陶 家 瓦	地	19.4	7.2	(29.1)	口付端：横ナギ、 底部：削り～ミガキ	口付部：横ナギ、 体部：ミガキ	底部：削り～ミガキ		
10 - 1	222a	S I - 01 陶 家 瓦	地	-	6.8	12.3	ミガキ	ミガキ			
12 - 1	475	S I - 05 3号土器	地	18.4	-	(6.0)	カジ～横ナギ	ミガキ、ヘラナギ	青段	壁	
12 - 2	369	S I - 05 3号 土 器	地	21.2	-	(4.4)	ヘラナギ、横ナギ	ヘラナギ	青段	縁	
12 - 3	475	S I - 05 3号 土 器	地	17.6	-	(33.6)	前毛口～側部：横ナギ	前毛口～ヘラナギ～横ナギ	1号、3号土器、5号 青段合		
12 - 4	469	S I - 05 3号 土 器	地	-	6.6	(11.3)	前毛口	前毛口	内面に断土の跡み上げ痕		
14 - 1	446	S I - 06 4号 土 器	地	17.4	4.0	8.8	口付端：横ナギ、体部：ヘタ 底部：横ナギ～ヘラナギ	口付端：横ナギ～ヘタ 底部：横ナギ	b類	底部：横ナギ	
14 - 2	9	S I - 08 瓦 土 器	地	-	-	(5.1)	口付端：ミガキ削り～ヘラミガキ	口付端：ミガキ削り	c手法		
14 - 3	403	S I - 08 瓦 土 器	地	-	-	(4.2)	口付端：横ナギ、 体部：ヘラナギ	口付端：横ナギ～ヘラミガキ 体部：ミガキ			
14 - 4	403	S I - 08 瓦 土 器	地	-	5.0	4.3	横ナギ	横ナギ	c類		
14 - 5	472	S I - 08 瓦 地	下	-	-	-	口付端：横ナギ、各部：ミガキ	口付部：横ナギ、体部：ミガキ	a類		
14 - 6	471	S I - 08 底溝配合	地	-	-	-	口付端：横ナギ、各部：ミガキ	口付部：横ナギ、体部：ミガキ	青段	縁	
14 - 7	492	S I - 09 土 壤 内 壁	地	-	-	-	口付端：横ナギ、 底部：削り	口付部：横ナギ、 体部：ミガキ	c類		
14 - 8	496	S I - 09 土 壤 内 壁	地	-	10.6	(15.1)	ヘラ削り～前毛口～ヘラミ ガキ	ヘラナギ	底部：ヘラナギ S I - 04と接合		
17 - 1	458	SD - 07 西壁灰瓦	地	14.8	-	(4.5)	口付端：横ナギ、体部：ミガキ	口付部：横ナギ、体部：ミガキ 底部：横ナギ	a類		
17 - 2	314	SD - 07 墓 1 瓦	地	-	-	3.6	横ナギ～ヘラナギ	ヘラミガキ	b類	底部：ヘラ削り、丸底	
17 - 3	25	SD - 07 墓 1 瓦	地	-	-	(9.0)	口付端：横ナギ～ヘラ 底部：ミガキ削り～ヘラミガキ	口付端：ミガキ	脚上部内面に軸上部の巻き上げ痕		
17 - 4	309	SD - 07 墓 1 瓦	地	-	12.8	-	口付端：横ナギ、 体部：ヘラナギ	口付部：横ナギ、 体部：ミガキ			
17 - 5	32	SD - 07 墓 1 瓦	地	-	-	-	ミガキ	ミガキ	a類		
17 - 6	360	SD - 07 墓 1 瓦	高砂瓦	-	-	-	ミガキ	ミガキ			
17 - 7	346	SD - 07 墓 1 瓦	小砂瓦	-	-	-	口付端：横ナギ、 体部：ミガキ	ミガキ			
17 - 8	338	SD - 07 墓 1 瓦	地	-	-	-	口付端：横ナギ、 体部：ミガキ	ミガキ			
19 - 1	156	SR - 01 1 瓦	地	-	3.6	(5.5)	口付端：横ナギ、 体部：ヘラ削り	口付部：横ナギ	c類		
19 - 2	256	SR - 01 1 瓦	地	-	-	-	-	口付部：横ナギ	a類		
19 - 3	141	SR - 01 1 瓦	小砂瓦	14.6	4.5	15.2	口付端：横ナギ、 体部：ミガキ	口付部：横ナギ、 体部：ミガキ	底部：手筋もヘラ削り		
19 - 4	226	SR - 01 1 瓦	地	-	6.6	(12.6)	体部：ミガキ	ヘラナギ			
19 - 5	233	SR - 01 1 瓦	地	-	-	-	ミガキ				
19 - 6	264	SR - 01 2 瓦	地	-	-	-	口付端：横ナギ、 体部：ミガキ	口付部：横ナギ	a類		
19 - 7	229	SR - 01 2 瓦	地	-	-	-	口付端：横ナギ、 体部：ミガキ	口付部：横ナギ	b類		
19 - 8	233	SR - 01 2 瓦	小砂瓦	-	3.8	(6.9)	ヘラ削り～ミガキ	底部付近：ミガキ	底部：手筋もヘラ削り		

表2. 土器器観察表

器物番号	遺構名	層位	器種	口径(cm)	近径(cm)	深度(cm)	外面調査	内面調査	分類	備考
19-9	267	SR-01	2層 立 か	-	7.6	(10.3)	側部: ヘラナギ 底部: ヘラ割り	ヘラナギ		底部: 敷物なし 底板上に3cmの堆積土 あり
20-1	264	SR-01	2層 上部 條	16.3	6.7	29.4	体部: ヘラナギ 底部: ヘラナギ	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ		底部: 内面に手縫状の凸溝 底部: ヘラ割り
20-2	265	SR-01	3層 極	-	-	-		口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	a. 鋸	
20-3	263	SR-01	3層 極	-	-	-		ナギ	b. 鋸	
20-4	262	SR-01	3層 極	-	-	-	割り	ミガキ	c. 鋸	
20-5	263	SR-01	3層 極	-	-	-	ミガキ		d. 鋸	
20-6	261	SR-01	3層 極	-	-	-	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	e. 鋸	S I-01と結合
20-7	263	SR-01	3層 極	-	-	-	ミガキ	割り	f. 鋸	
20-8	223	SR-01	3層 基 準	-	-	-			g. 手法	
20-9	222	SR-01	3層 山 脊	19.2	-	(8.6)	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	h. 手法	口沿部: ヘラナギ 底部: ヘラナギ
20-10	260	SR-01	3層 基 準	18.6	-	(6.2)	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	i. 手法	
20-11	258	SR-01	3層 基 準	-	-	(8.6)	壁上部: 剥り→ミガキ 底部: テラ→ミガキ	壁上部: 剥り→ミガキ 底部: テラ→ミガキ	j. 手法	
20-12	259	SR-01	3層 基 準	-	-	(8.1)	口部: ナギ 底部: ナギ→ミガキ	口部: ナギ 底部: ナギ→ミガキ	k. 手法	壁上部: 剥り→ミガキ 底部: ナギ→ミガキ
20-13	258	SR-01	3層 基 準	-	-	(8.6)	壁上部: ヘラ割り→ミガキ 底部: ヘラナギ	ヘラ割り→ミガキ 底部: ヘラナギ	l. 手法	
20-14	258	SR-01	3層 右斜面	-	-	-	ミガキ	ミガキ	m. 手法	
20-15	262	SR-01	3層 高い部分	-	-	-	ナギ	ミガキ	n. 手法	
20-16	243	SR-01	3層 小型壺	10.6	4.6	6.8	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラ割り	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	o. 手法	底部: ヘラナギ 底部内面に押し痕 S I-04と結合
20-17	241	SR-01	3層 小型壺	8.2	-	(3.7)	横ナギ→ヘラナギ (ナギに近い)	ヘラナギ→ミガキ	p. 手法	
21-1	226	SR-01	3層 小型壺	9.4	3.5	9.8	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	口沿部: ナギ→ヘラナギ 底部: ナギ→ミガキ	q. 手法	
21-2	246	SR-01	3層 直	-	7.7	(29.3)	口沿部: 横ナギ→ヘラナギ 底部: ヘラナギ	ヘラナギ	r. S I-04と結合	
21-3	265	SR-01	3層 小型壺	15.2	-	(3.2)	口沿部: 剥毛目→横ナギ 底部: 剥毛目→剥り	口沿部: 横ナギ、 底部: ナギ	s. 手法	
21-4	522	SR-01	3層 條	16.8	-	(3.2)	口沿部: 横ナギ、 底部: 剥り	口沿部: 横ナギ、 底部: ナギ	t. 手法	
21-5	242	SR-01	3層 條 多	-	8.8	(3.6)	ヘラナギ	ヘラナギ	u. 手法	
22-1	243	SR-01	3層 條	19.3	-	(23.5)	口沿部: ナツケ→横ナギ 底部: ヘラ割り→ミガキ	口沿部: 横ナギ、 底部: ナギ→ミガキ	v. S I-04と結合	
22-2	238	SR-01	3層 直	-	-	-	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	口沿部: 横ナギ、 底部: ヘラナギ	w. 手法	
22-3	222	SR-01	3層 條	-	-	-		剥毛目	x. 多孔式(2+21)	
22-4	498	SR-01	3層 扁担形	5.4	3.2	2.3	ナギ	ナギ	y. 手法	
22-5	443	SR-01	4層 上面	16	-	-	ナギ		z. 手法	
22-6	300	SR-01	4層 上面	高	-	-	(9.6) 脊部: 剥り→ミガキ	壁上部: 剥り→ミガキ 底部: 横ナギ		
22-7	299	SR-01	4層 上面	小形壺	-	-	ミガキ	ナギ		
22-8	300	SR-01	4層 上面	直	-	-			外面に剥落付 (上部剥離あり)	
22-9	231	SR-01	4層 上面	直	-	6.2	(21.1) ミガキ	ヘラナギ		
22-10	300	SR-01	4層 上面	直	-	(8.5)	口沿部: 横ナギ、 底部: ナギ	口沿部: 横ナギ、 底部: ナギ		

表3. 須恵器観察表

器物番号	遺構名	層位	器種	山幅(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	外面調査	内面調査	備考
23-1	233	SR-01	1層 條	-	-	-	底部付近 底部付近		
23-2	228	SR-01	2層 高 準	-	-	-		底部付近 底部付近	
23-3	226	SR-01	2層 高 準	10.4	(2.1)	-	底部付近 底部付近		底部付近に孔 小型

表4. 須恵器観察表

回収番号	遺物番号	遺物名	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面調整	内面調整	備考
23-4	295	SK-01	2層下部	瓶	-	-	-			孔あり
23-5	525	SR-01	3層	土器	-	-	-	液状沈殿		蓋の可逆性あり
23-6	520	SR-01	3層	土器	-	-	-	液状沈殿・沈殿		

表5. 土器観察表

回収番号	遺物番号	遺物名	層位	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	外面調整	備考
23-7	245	SR-01	3層	土器	5.72	3.15	0.61	58.00	開口リーフ	

表6. 土器観察表

回収番号	遺物番号	遺物名	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面調整	内面調整	備考
25-1	504	SI-03	カマド内	瓶	16.4	7.8	6.0	ロクロ調整	褐色化処理・口縁部: ヘラミガキ 体部: 面付: 面付: ヘラミガキ	底部: 下持ちヘラ削り (切り落し不規)
25-2	500	SI-03	カマド内	瓶	-	7.5	4.0	ロクロ調整	褐色化処理 体部: 下部: ヘラミガキ	底部: 下持ちヘラ削り (切り落し不規)
25-3	507	SI-03	3層	小容器	-	7.7	9.0	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口永切
25-4	376	SI-03	カマド内	小型瓶	16.8	-	7.0	ロクロ調整+ナダ	ロクロ調整+ナダ	
25-5	375	SI-03	カマド内	底付瓶	26.4	11.7	20.0	ロクロ調整+ヘラ削り	体部: ロクロナダ 底付下部: ナダ	SD-16と接着
25-6	375	SI-03	カマド内	片側脚	24.2	-	18.0	体部: 口付3層: ロクロナダ 片側下部: ロクロナダ	ロクロナダ	
25-7	51-03	51-03	1層	瓶	-	7.5	6.7	ヘラ削り	体部: 強引海ナダ→ヘラナダ 底付: ヘラナダ	SD-15と接着

表7. 須恵器観察表

回収番号	遺物番号	遺物名	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面調整	内面調整	備考
26-1	59	SI-03	1層	瓶	14.1	7.6	3.95	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口ヘラ削り
26-2	59	SI-03	1層	瓶	13.6	8.2	4.1	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口ヘラ削り
26-3	423	SI-03	1層	瓶	14.0	7.4	3.9	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口ヘラ削り
26-4	500	SI-03	カマド内	瓶	13.1	6.8	3.8	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口ヘラ削り
26-5	384	SI-03	1層	瓶	13.1	6.8	3.8	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口ヘラ削り
26-6	529	SI-03	カマド内	瓶	13.5	6.9	4.3	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口ヘラ削り 内外面: 大擦
26-7	59	SI-03	1層	小容器	17.2	-	7.8	開口: ロクロナダ	ロクロナダ	

表8. 土器観察表

回収番号	遺物番号	遺物名	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面調整	内面調整	備考
26-8	194	SI-03	1層	蓋	6	-	4.9	ヘラミガキ	ヘラミガキ	縁に丸み、右に孔1 下まで通る
26-9	406	SI-04	カマド内	小型瓶	12.4	5.2	9.1	ロクロ調整	ロクロ調整、ナダ	底部: 開口永切
26-10	404	SI-04	カマド内	小型瓶	-	7.8	10.6	ロクロ調整	ロクロナダ	底部: 開口永切
26-11	298	SI-04	1層	小容器	-	7.2	5.9	底付: 刃付: 株子剥印3日	ナダ、縁毛円	底部: 株子剥印3日
26-12	405	SI-04	カマド内	瓶	-	9.6	12.9	削り	ナダ、底付: 削り: 削り	底部: 削子痕
26-13	532	SI-04	1層	瓶	-	9.8	18.5	ヘラ削り	底ナダ→ヘラナダ	底部: ヘラナダ

表9. 須恵器観察表

回収番号	遺物番号	遺物名	層位	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面調整	内面調整	備考
33-1	99	SK-01	1層	瓶	14.0	7.0	4.4	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口永切 底付が付く
33-2	161	SK-02	1層	蓋	-	-	7.6	ロクロ調整	ロクロ調整	底部: 開口ヘラナダ 底付: 水差付 白色粒と黒色粒を含む

表10. 陶器観察表

出所番号	遺物番号	遺物名	層位	種類	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	特徴	用途	年代	備考
37-1	152	SD-02 墓上土	深	-	-	-	-	-	茶	平安時代前半	
42-1	67	SE-01 墓 2 線	底	-	(4.0)	-	-	追野、見込にビン跡	茶	16世紀(大正V頃)	
45-1	322	SM-01 泥付灰	新	筒	12.8	6.1	7.9	灰釉、側面の赤色	茶	17世紀(元禄~寛永)	副葬品
45-2	455	SM-01 墓 2・3号	底	筒	12.1	7.7	9.3	灰釉、見込に墨色斑	茶	16世紀~17世紀 大正V~昭和初期	
45-3	456	SM-01 墓 2 線	底	筒	23.3	8.2	11.3	鐵鉢、底部に墨色斑、底面は粗面の切引	茶	16世紀~17世紀	SE-01と接合

表11. 表土出土遺物観察表

出所番号	遺物番号	出土 区	層位	種類	口径	底径	高さ	特徴	産地	年代	備考
47-1	11	I	区 I	層 深	-	-	-	内側縁ナカ、底色(澤光朱)	-	-	
47-2	11	I	区 I	層 深	-	-	-	形を保たず消し、底色(澤光朱)	-	-	
47-3	11	I	区 I	層 深	-	-	-	底色(澤光朱)	-	-	
47-4	11	I	区 I	層 深	-	-	-	灰色、外側縁ナカ	瀬戸	-	
47-5	147	I	区 I	層 深	-	-	-	灰色	-	中世	
47-6	8	I	区 I	層 深	紅	-	(3.9)	-	志野	茶	16世紀~17世紀
47-7	13	I	区 I	層 深	底	3.4	0.8	透明白、見込に墨色斑	半	近畿地方	昭和(40)
47-8	8	I	区 I	層 深	-	-	-	内面にヘラ削り	-	-	濃黄色

表12. 土錐観察表

出所番号	遺物番号	出土 区	層位	種類	全高(cm)	口径(cm)	底径(cm)	厚さ(cm)	外側調整	備考
47-9	8	I	区 I	層 七 級	5.7	3.9	0.65	47.70	削り→ナカ	

表13. 瓦觀察表

出所番号	遺物番号	層位	種類	全高(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	片	片	片	備考
33-3	157	SK-02 墓 2 線 平	瓦	(8.2)	-	(0.7)	-	1.9	縫合	茶石	平安時代以前
37-3	150	SD-12 墓土下	瓦	(6.2)	-	(5.1)	-	1.4	ナ ナ	茶石	平安時代か
42-2	420	SE-01 墓 11 番	瓦	15.8	--	14.4	6.7	1.6	ナ ナ	茶石、ナツリ→	焼化
42-3	390	SE-01 戸戸丸 瓦	瓦	10.5	-	15.0	7.0	1.7	ナ ナ	茶石、ナツリ→	焼化、SM-01底付近、11番ノ接合
出所番号	遺物番号	層位	種類	全高(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	片	片	片	備考
43-1	16	SE-02 墓土下	瓦	(26.3)	5.1	3.4	10.5	-	-	-	
出所番号	遺物番号	層位	種類	全高(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	片	片	片	備考
42-4	65	SE-01 墓 11 番 木製瓦丸	瓦	(22.0)	(18.5)	(15.9)	(8.8)	2.5	-	-	瓦出荷後
43-4	393	SM-01 底付付近	木製瓦丸	11.6	10.3	(15.1)	(7.1)	2.9	15.6	13.8	茶石(2つ文)
出所番号	遺物番号	層位	種類	全高(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	厚さ(cm)	片	片	片	備考
45-5	455	SM-01 墓 2 番 軒 丸 瓦	瓦	(28.1)	25.2	(24.6)	3.2	5.4	9.1	17.7	(3.5) 1.2 1.1 4.1 1.6 0.5

表14. 金属製品観察表

出所番号	遺物番号	出土 区・准 構・層 位	種 別	材 質	材質	各 3 (cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	備 考
秀真II	038	II区B-3、SD-07、1号	鍔	銅	銅	6.15	3.85	2.60	74.15	鍔治鑄か
26-9	383	I区、S-1-03、須佐御神社付近	刀子	銅	銅	(8.0)	1.55	0.30	11.45	
26-10	383	I区、S-1-03、須佐御神社付近	刀子の本茎	--	銅	4.50	1.45	4.10	蓋の一部残存、No.2と同一体か	
33-4	157	II区B-3、SD-07、1号・2号	刀子の茎	銅	銅	(4.45)	0.65	0.25	3.15	本茎の一部残存
出所番号	遺物番号	出土 区・准 構・層 位	種 別	材 質	材質	各 3 (cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	備 考
37-4	151	I区H-6、SD-12、1号	鎌頭	銅	銅	10.67	1.00	0.60	2.8	

表15. 金属製品観察表

固有番号	遺物番号	出土区・地 点・層 位	種 別	材 質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考
42-8	000	II区B-5-6, SE-01, 標1層	釘	鉄	約 4.00	0.55	0.50	2.70	
42-9	070	II区B-5-6, SE-01, 標1層	釘	鉄	3.00	0.40	0.45	0.90	
42-7	425	II区B-5-6, SE-01, 粘土層	釘	鉄	4.00	0.55	0.40	1.85	(標1層立上)
42-10	254	II区B-5-6, SE-01, 壁2層	釘	鉄	2.70	0.35	0.30	1.25	
42-11	254	II区B-5-6, SE-01, 壁2層	釘	鉄	2.50	0.40	0.35	1.40	
42-5	254	II区B-5-6, SE-01, 壁2層	釘	鉄	5.92	0.45	0.35	1.60	
42-6	420	II区B-5-6, SE-01, 壁2層	釘	鉄	5.90	0.60	0.70	4.80	
46-1	425	I区C-3-4, SM-01, 壁2層	釘	鉄	4.30	0.60	0.55	1.95	
46-2	425	I区C-3-4, SM-01, 壁2層	釘	鉄	7.10	0.35	0.50	3.25	
46-3	425	I区C-3-4, SM-01, 壁2層	釘	鉄	5.70	0.35	0.45	1.60	
46-4	425	I区C-3-4, SM-01, 空腹方柱	釘	鉄	3.90	0.30	0.30	0.95	
46-5	425	I区C-3-4, SM-01, 空腹方柱	釘	鉄	3.35	0.35	0.50	1.65	
46-6	325	I区C-3-4, SM-01, 壁2層付近	肉厚環状金具	銅	2.00	内径 0.70	外径 0.35	1.55	肉厚0.05mm
46-7	326	I区C-3-4, SM-01, 壁2層付近	釘	鉄	5.00	0.35	0.30	2.00	
46-8	326	I区C-3-4, SM-01, 壁2層付近	釘 or 釘	鉄	3.00	0.70	0.65	2.70	

表16. 紡錘車・石製模様品観察表

固有番号	遺物番号	出土区・地 点・層 位	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
17-9	329	I区D-5, SD-07, 壁2層	輪 車	高周波 44.50	—	7.00	19.85	
17-10	348	I区C-5, SD-07, 壁2層	有 孔 车	37.25	21.00	4.25	4.20	貫通孔 2 +
17-6	474	I区, S-1-05, 3号車, 壁1層	有 孔 车	41.50	11.30	3.80	2.75	貫通孔 1 +
12-7	413	I区, S-1-05, 3号車	白 土	4.00	1.50	2.50	0.05	内厚1.25mm
12-8	411	I区, S-1-05, 壁2層	白 土	4.00	1.50	3.00	0.05	内厚1.25mm
23-8	62	II区B-2, SE-01, 壁2層上面	有 孔 円 板	27.00	—	3.50	3.35	貫通孔 1 +
22-5	244	II区A-3, SR-01, 壁1・2層	空 工	33.35	11.30	7.25	7.15	貫通孔 1 +
23-10	244	II区A-3, SR-01, 壁1・2層	空 工	32.00	13.00	5.55	5.50	貫通孔 1 +
23-11	165	II区A-3, SR-01, 壁1・2層	有 孔 鋼 扇	44.50	38.30	6.50	6.00	貫通孔 1 +, 半貫通孔 1 +
23-12	344	II区A-3, SR-01, 壁1・2層	有 孔 鋼 扇	35.00	11.00	4.00	3.15	貫通孔 1 +
23-13	344	II区A-3, SR-01, 壁1・2層	有 孔 鋼 扇	34.50	13.50	4.00	2.25	貫通孔 1 +
23-14	244	II区A-3, SR-01, 壁1・2層	有 孔 鋼 扇	27.50	13.00	3.50	1.80	貫通孔 1 +
23-15	244	II区A-3, SR-01, 壁1・2層	有 孔 鋼 扇	34.00	11.30	5.50	1.75	貫通孔 1 +
23-16	238	II区A-2, SR-01, 壁3層	有 孔 円 板	32.30	—	4.00	5.20	貫通孔 1 +
23-17	238	II区A-2, SR-01, 壁3層	有 孔 円 板	32.50	—	5.50	10.15	貫通孔 1 +
23-18	238	II区A-2, SR-01, 壁3層	有 孔 円 板	30.50	—	3.35	5.00	貫通孔 1 +

表17. 石製品観察表

固有番号	遺物番号	出土区・地 点・層 位	種 別	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備 考	
17-11	322	I区D-5, SD-07, 壁1層	板	石	11.30	7.30	4.60	69.55	
17-12	314	I区D-5, SD-07, 壁1層	磨 石	石	6.30	6.10	3.20	190.80	
17-13	336	I区E-3, SD-07, 壁1層	板	石	11.20	7.30	4.65	566.05	薄刃石
17-14	445	I区, SD-07, 粘土層	板	石	(2.85)	(2.85)	(3.40)	(38.85)	
16-2	290	I区G-4・5, S-1-01, 壁2層上面	板	石	2.40	2.15	2.05	8.65	貫通孔 1 +
12-5	368	I区F-5, S-1-05北壁, 粘土層	子製石器	石	12.95	6.70	3.45	414.85	兩側刃加工
14-9	486	I区, S-1-09, 壁2層	板	石	12.75	6.30	4.50	662.00	
26-11	285	I区, S-1-05北壁, 床付近	板	石	7.35	4.40	4.40	135.65	
26-13	329	I区, S-1-05北壁, 壁2層	板	石	(7.65)	4.00	2.90	(92.55)	(中藏-社11780)
33-5	285	I区, SK-07, 壁上	板	石	15.70	3.40	3.20	(80.00)	
37-2	80	II区B-6, SD-01, 壁2層(ペルト)	板	石	16.10	6.30	6.30	(783.55)	
37-5	150	II区H-6, SD-12, 壁2層(ペルト)	板	石	(16.00)	(4.60)	(6.70)	(411.35)	
42-12	47	II区B-5-6, SE-01, 壁2・3層	板	石	8.00	2.60	2.20	67.90	
42-13	81	II区B-5-6, SE-01, 壁2・3層	板	石	(8.45)	(4.30)	1.35	(41.03)	

## V. 分析と考察

今回の調査において出土した遺物は、弥生～近代のものがある。特に、古墳時代の遺物を主体とし、平安時代や江戸時代初期のものにまとまりがある。以下、時代別にその特徴について述べてみたい。弥生時代や中世の僅かな遺物については、ここでは触れない。

### 古墳時代

古墳時代の土器は、中期のものを中心比較的多量に出土している。SR-1の層位的変遷や住居跡の重複、遺構間の接合状況から土器変遷が理解できる。

#### 土器の分類（第48図）

ここでは、破片であっても比較的形態の理解が容易で数量も多い环について分類を行う。

a 類 体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が外傾する丸底环。

破片が多いが、平底と判断できるものはないようである。本類は、今回の調査では最も多い類型であり、2種類に細分される。

a<sub>1</sub>：口縁部は短かく外傾し、内外面に明瞭な屈曲（稜）がみられるもの。

a<sub>2</sub>：口縁部は短かく外傾し、内面に限り屈曲（稜）がみられるもの。

b 類 体部は外傾して大きく開き、口縁部が短かく直立あるいは僅かに内傾して立ち上がる平底环。丸底のものが存在するかどうかは判断できない。

c 類 体部から口縁部にかけて、内弯しながら立ち上がる丸底环。

この類型は、さらに2種類に細分される。

c<sub>1</sub>：深いもの。（高口比およそ0.5以上）

c<sub>2</sub>：浅いもの。浅くなるためか、内弯度が強くなる。（高口比およそ0.5以下）

d 類 体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部では一端内弯し、端部では直立気味となる环。全体を知るものがないが、丸底になるものと予想される（鉢の可能性もある）。

e 類 体部は内弯気味に開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外反する丸底环。

f 類 体部に屈曲が現われ、これより上位が口縁部となる丸底环。

屈曲部に段はみられず、口縁部は直立あるいは僅かに外反する。

g 類 体部は内弯しながら立ち上がり、頭部外面には不明瞭ながら段が形成され、口縁部は外傾気味に立ち上がる丸底环。

h 類 体部は内弯気味に立ち上がり、頭部外面に明瞭な段（屈曲）が形成され、口縁部が外反する丸底环。

i 類 体部は僅かに内弯して立ち上がり、口縁部は短かく屈曲・内傾して立ち上がる丸底环。

本類は唯一内面黒色処理を施す。

他にも、分類できそうな坏が存在するが、特徴を充分把握できないために割合する。調整は、外面口縁部横ナデ・体部ヘラ削り→ヘラ磨き、内面ヘラ磨き(放射状のものが多い)のものが多いが、g~i類のように外面ヘラ磨きを加えないものがある。

一方、b類には外面体部に刷毛目調整のものがみられ、また、d類の内面は軽いヘラ削りが施されている。

古墳時代中期の土器、特に坏においてはバラエティに富み、形態的変化や消長も様々で、類型毎の変遷も一様ではない。研究者にとっては、-型式内の段階的变化や次型式への変換点をどこに求めるか困難な面がある。同時に、研究者によって理解の仕方が様々に変容することも避けがたい。

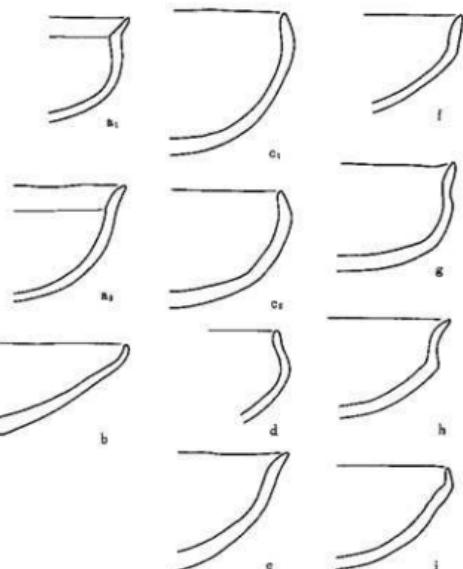
それでは、各類型に分類された坏類がどのように変遷するかを検討することにする。

表18は、遺構別に坏類の組成を示したものである。これをみると、坏類の組成に明瞭な差が現われる。すなわち、a~d類とe~i類の大きく2つのグループに分類することができよう。これは、遺構の重複や河川の堆積層を良く反映しており、前者をA群、後者をB群とすれば、A群からB群へ変遷したことが明確である。ただ、問題となるのは、SI-01の坏類の組成である。この住居ではA群・B群の両者の坏類を含んでいるためである。しかし、各坏類には消長の差があると考えられることから、a<sub>1</sub>・c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>の各類をこれに該当するものと理解すれば矛盾は生じない。従って、SI-01は古い要素を残しながらも、B群土器の段階のものとすることができ、A群土器の段階のSI-05を切ることからも妥当なものである。A群土器の段階をA期、B群土器の段階をB期とすると、以下のように遺構区分が可能である。

〈A期〉 SI-05・SI-08・SI-09・SR-1 (4層上面・3層)

〈B期〉 SI-01・SD-07・SR-1 (2層・1層)

A期では遺構同志の重複は認められないが、次のような特徴がある。SI-05出土土器が、



第48図 坏分類図

表18 進構別坏組成表

分類	a <sub>1</sub>	a <sub>2</sub>	b	c <sub>1</sub>	c <sub>2</sub>	d	e	f	g	h	i	備考
S I - 05		○										有段口縁壺、白毛 刷毛目調査
S I - 08	○		○	○								青銅口縁壺、丹波土器 手造り土器
S I - 09				○								大型壺 SR-01 3層と関連
S I - 01	○		○	○		○	○	○				小型桶頭型（厚） 鉢石
S D - 07					○							桶形模造品 桶頭型、鉢石
SR - 01 1層					○		○					桶形壺 石製模造品 桶頭型 漆見物
SR - 01 2層			○?				○					
SR - 01 3層	○	○		○	○	○						多孔式壺、有孔円筒 漆見物、漆土器
SR - 01 4層上	○											漆器文様

SI-08の床下出土のものと接合したことから、多少の時間が予想される。平安時代のSI-04出土の古墳時代の土器が本来SI-09に帰属するものと考えられ、これらの土器がSR-01（3層）の土器と接合した。A群土器は、ほぼ南小泉式の範囲内に属するものであるが、SI-05とSI-08には時期差が予想される。

SI-05の土器は、有段口縁壺・刷毛目調整の壺など塩釜式土器に近い特徴を持っている。しかし、器台はみられず、粗製石製模造品を作っている。県内ではこれまで、塩釜式に伴った石製模造品の例は管見ではないようであり、区別して理解しておきたい。一方、SI-08出土のb類とした壺は、多賀城市山王遺跡第3号遺構に類似がある（高倉敏明：1981）。南小泉式土器の変遷は、亘理町宮前遺跡において3段階の変遷が提示されている（丹羽茂：1983）。山王遺跡第3号遺構出土土器は、先の3段階の変遷の中で最も古いA群土器の指標の一つと考えられている。従って、SI-08出土土器は宮前遺跡における丹羽氏編年の中でも古いA群土器の段階に位置付けたい。また、SI-05出土土器はこれに先行するものと思われる。ただ、器台がみられないものの、器種組成に本来器台が存在するのかどうか保証が得られないことから、ここでは、塩釜式終末から南小泉式初期と考えたい。なお、仙台市六反田遺跡の4号住居跡出土土器（佐藤洋：1987）が知られ、ほぼ塩釜式後～中期のものと予想されたが、器種組成に相違がみられ、この例より新しいものと予想される。SI-09では大型壺と壺d類が判明するだけで判然としないが、SR-01・3層と接合関係があり、同時期のものと考えられる。SR-01・3層や4層上面の土器群は、塩釜式的な古相を呈する土器も存在するが、大局的には南小泉式土器と理解される。塩釜式と区別する指標の一つに器台の有無があるが、SR-01では明確に器台と判断されるものはみられない。先に、SI-05とSI-08の時期を述べたが、SR-01では分離するのは難しい。SI-05出土土器をAⅠ期、SI-08出土土器をAⅡ期とすると、以下のようないくつかの関係が考えられる。

$$\left. \begin{array}{l} \text{A I 期 SI-05出土土器} \\ \text{A II 期 SI-08出土土器} \end{array} \right\} \text{SR-01} \left( \begin{array}{l} \text{4層上面出土土器} \\ \text{3層出土土器 (SI-09)} \end{array} \right)$$

次に、B群土器壺について検討する。

B群土器に特徴的な壺は、e～i類であるが、SI-01出土壺類にみられるようにa<sub>1</sub>・c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>各類型が、A群（南小泉式）の系譜を引くB群土器の段階のものと理解できよう。e類は、例

えば、大河原町台ノ山遺跡第5号住居跡出土土器（阿部・千葉：1980）に類似するものがある。f類は、南小泉遺跡第4次調査16号住居跡、同第11次調査第46号溝跡などに類例がある。g類は、いわゆる須恵器模倣壺と呼ばれるものに類似する。これは、丹羽氏編年のC群土器に属し、仙台市富沢埴輪窯跡（渡辺泰伸・他：1974）に類例がある。福島県板倉前B遺跡5号住居跡出土例（高木・大越：1979）も類似する。h類は、從来住社式の特徴と理解されている壺である。住社式の標式となった住社遺跡（志間泰治：1958）では、h類が壺の主体となっているが、h類を出土したSI-01では主體とならず、住社遺跡例より前出のものであろう。i類は、器形が南小泉式の系譜と理解することが可能であるが、内面黒色処理（内黒）する点が異なる。從来の編年では、内黒壺の出現は住社式以後と理解するのが一般的であったが、最近では名生館遺跡SK-430出土土器（白鳥・後藤：1986）例などのごとく、それ以前にすでに出現しているようである。福島県でも佐平林式の段階（佐平林遺跡4号住居跡）に内黒壺がみられる（目黒・他：1978）。i類の壺は県内には例がないようで、福島県薬師堂遺跡壺B類（2号・3号住居跡）に類例がある（大越・他：1983）。この遺跡は、佐平林式と舞台式の中間に位置づけられている。i類を出土したSD-07は細片が多く、器種組成を充分明らかにできないが、從来の住社式よりは前出のものであろう。

B群土器は類型別に若干検討を加えたが、この段階では明確な重複関係がある。SR-01をSD-07が切っているのである。SR-01の1・2層出土土器は、丹羽氏編年のC群土器にほぼ併行するものと考えられる。ただし、C群土器でも、台ノ山遺跡第5号住居跡出土土器群と富沢埴輪跡出土土器は、いわゆる須恵器模倣壺の出現をもって区別すべきかも知れない。区別が可能なならば、SR-01の1層出土の壺g類を含む土器群は、同2層出土土器と分離し得るのである。しかし、器種組成が充分揃っておらず、この点は今後さらに検討が必要である。SR-01の1・2層からは、陶邑I期に併行すると考えられる須恵器が出土している。2層下部（第23図4）では、田辺昭三氏の陶邑編年（田辺昭三：1981）のTK-208頃、1層ではTK-23～47頃に併行する各須恵器が出土している。いずれも、地方窯のものと予想される。従って、土師器と時期的な差があったとしても、1層出土土器は5世紀末頃を下らないものであろう。なお、この年代観は、壺g類の下限を規定するものではない。

次に、SD-07とSI-01について検討する。

SD-07では土器組成が充分ではないが、壺ではe・i類が出土している。c類はSR-01の1層やSI-01でも出土していることから、近接した時期が想定される。しかし、SR-01とは重複関係から明らかに後出のものである。第17図2の段の付く壺は上半部を欠失しているため、類型区分を行わなかったが、他の造構にはみられない。高壺は内面の粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に残るものだが、これも他の造構にはない。特に注目したいのは、壺i類である。1点だけである

ので不安定であるが、前述したように薬師堂遺跡環B類に類例がある。この遺跡の環B類を含む土器群は、佐平林式と舞台式の中間に位置づけられている。したがって、SD-07の土器群は福島県の編年をそのまま充当させてよいのかは検討が必要であるが、これに近いか前出のものと予想される。氏家和典氏の編年（氏家和典：1957）の引田式末期から住社式の初期に相当するものと思われる。住社式土器の年代は、宮城県清水遺跡（丹羽・小野寺・阿部：1981）では、陶邑古窯跡群のTK-10窯に類似する須恵器が出土したことから、6世紀中頃を中心とした時期を想定している。この年代観が正しければ、SD-07は6世紀前葉以前になろう。

SI-01は、今回の調査では最もよい土器組成を示している。环では、a<sub>1</sub>・c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>・e・f・hの各類がみられ、高环・小型壺（あるいは甕）・球胴壺などが加わる。环のうち、a<sub>1</sub>・c<sub>1</sub>・c<sub>2</sub>・e類は氏家氏編年では引田式としてよい。f類はやや後出のものであろうか。ここで問題となるのはh類である。h類は埋土中からも出土している。この類型の环が内面黒色処理を伴って主体となるのは、住社式の段階からである。SI-01では、黒色処理を行っておらず、主体ともならない。したがって、住社式よりも前出のものと考えられ、氏家氏編年の引田式の範囲として扱えるものであろうか。SD-07との比較では、近接した時期のものであろうが、SI-01の土器群がより古相を呈しているようである。

このようにみると、B群土器はSR-01の1・2層出土土器群とSI-01・SD-07出土土器群の大きく2つのグループに分かれるものと考えられる。ここでは、前者をB<sub>1</sub>期・後者をB<sub>2</sub>期とする。B<sub>1</sub>期は丹羽氏編年の南小泉式C群土器にほぼ相当し、B<sub>2</sub>期は同C群土器の段階より新しく、住社式直前頃の時期のものであろう。ここで問題となるのは、丹羽氏編年のC群土器が、氏家氏編年の引田式のすべてを包括するものかどうかである。いずれも、概念規定が不明瞭である。引田式の様式となった引田遺跡出土資料は、該型式の中でも、南小泉式に近い特徴を有する古い段階のものであることから、南小泉式として一括して考えられるようになった。B<sub>2</sub>期を南小泉式に含め、B<sub>2</sub>期を引田式と呼ぶのがよいのか、従来どおり両期を引田式と呼ぶのがよいのであろうか。あるいは、B<sub>1</sub>期を住社式の範囲に含めるべきであろうか。この場合、南小泉式～住社式の各土器群の明確な区別・基準が必要になってくる。しかし、この問題の鍵となるSR-01の1・2層SD-07出土土器は組成が充分でなく、どのような土器群で、各型式の開始とすべきかその解答が得られない。資料の蓄積を待って、充分な検討が今後必要である。

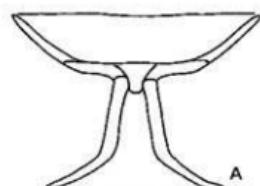
最後に、B群土器の特徴を要約すると、A群土器にみられた环a<sub>1</sub>～d類に変って环e～i類が加わる。一方、a<sub>1</sub>・b・d類はほぼ消滅するようである。また、B群土器中でもh・i類は新しい要素・時期のものと考えられる。高环は、A群土器では盛行するが、B群土器では減少する。小型丸底壺もA群土器では盛行していたが、B群土器では減少し、特に、B<sub>2</sub>期とした段階では確認できない。甕は、B群土器では球胴甕と長胴甕が一層明確となってくるようである。

## 高坏について

ここでは、今回調査で出土した高坏について若干検討してみたい。高坏の坏部と脚部の接合方法に主眼をおいてみると、第49図のような大略3種類の手法がみられる。

A手法：坏部と脚部の接合部分に粘土塊を充填するもの。

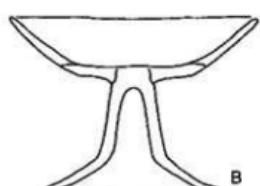
B手法：脚部の最上部に坏部を取り付けるもの。



C手法：脚部と坏部を独立して作り、のちに接合するもの。

坏部底面に予め凸部を設けて脚部に嵌込むものも予想されるが、これはA手法に含めて考えておきたい。また、A手法とB手法の折衷方法のものも若干みられる。

A手法は、前期の鼓形器台の成形技法の系統をひくものと予想され、これより発展してきたものではなかろうか。B手法のものは、脚部の頂上面がそのまま坏部の底面となる例がある。



さて、これらの接合方法と脚部の形態などとは、特に相關関係はみられないようである。SR-01の3層では、これら3手法がみられるが、A手法が最も多く、C手法は極めて少ない。A・B手法は塩釜式期に出現しているが、C手法の出現は明確ではない。しかし、SR-01の3層やSI-08にみられることから、少なくとも南小泉式期に存在するのは明らかであり、さらに遡り得よう。一方、B群土器段階の高坏には、A・B手法の確実な例がみられないようである。

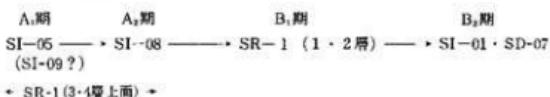


その他の特徴は、SR-01の3層・4層上面では、脚上部が円筒形のものと脹らむものがみられ、内面にしづら目を

第49図 高坏の接合方法  
もつものが主体を占める。僅かに、脚部内面にヘラ削り調整のものがある。A群土器に比べ、B群土器の高坏は脚上部の径を増し、より安定感が出てくるように思われる。

## 遺構について

土器の検討の結果、遺構の変遷は以下のようになろう。



A<sub>2</sub>期とB<sub>1</sub>期の間に、もう一時期設定できるかどうかは今回検討できない。A期ではSI-05にみられるように、地床炉であり、カマドの存在は確認できない。B期では、少なくとも後半

のB<sub>2</sub>期ではカマドの存在が確認できる(SI-01)。また、SR-1からは多量の土器と共に、須恵器・石製模造品が出土し、特異なあり方を示している。これが、直ちに河川(水辺)祭祀と結びつくかどうかは、さらに類例を待って検討したい。ただ、単なる廃棄以上のものがあり、それを扱った人々の一部が、おそらくSI-09の居住者であろう。

また、SD-07では鉄滓が出土し、県内で現在最古であり、古墳時代後期前葉以前には在地の鉄器生産が開始されたことが予想される。

### 平安時代

この時代には、住居跡・畝状遺構・溝・土壙がある。住居跡では、SI-03の出土土器群が最も良好な土器群である。SI-03は完掘できなかったが、土器組成は充分に備わっているものと考えられる。环は土師器・須恵器があり、前者はロクロ使用の内黒环で、底部はいずれも切り離し不明で、手持ちヘラ削り調整を加えるものである。後者はいずれも、底部が回転ヘラ切り無調整のものに限られる。したがって、环類は極めて統一のとれた組成を示す。甕では小型甕・器高の低い広口(鉢状)の甕・胴部に叩き目の有無による2種の長胴甕がある。これに、比較的小型の須恵器甕が加わる。このような土器組成・特徴を有する土器群は平安時代表杉ノ入式に属することは明らかである。环の特徴から、表杉ノ入式期の中でも古い段階に位置づけられる。おそらく、9世紀前葉とみて大過ないであろう。一方、SI-04は不均衡な上器組成を示しており、甕が有勢である。この住居跡の土器は、複数個体がSI-03と接合することから、SI-03とはほぼ同時期のものとみられる。さらには、付属屋や別棟などのような密接な関係があったとも想像される。SB-06については、重複関係から平安時代に属するものと考えられるが、住居跡との関係は不明である。棟方向が住居跡とは異っており、時期差があるものと考えられる。

畝状遺構は1~3号が検出された。1・2号はSI-03を切っており、これより新しいが、遺物が僅かであり、時期を特定できない。3号では、一部に灰白色火山灰がブロック状にみられたことから、火山灰降下後そう時を経ていない時期を下限とするものであろう。SD-08・SK-01・02は、3号畝状遺構と関連するものと考えられる。

なお、表土中及びSK-02(第33図2)から出土した須恵器には、自然釉が多くかかるものや灰白色で胎土中に白色粒子や黒色粒子を含み、表面に光沢をもつものがある。これらは、おそらく在地のものではないのである。これらの資料を名古屋大学の齊藤孝正氏に見ていただいたところ、猿投窯の可能性のあるものも一部にあるが、大部分は福島県大戸窯跡群の製品の可能性を検討されてはいかがであろうかとの御教示をいただいた。筆者は大戸窯跡の資料を福島県立博物館の展示品で実見したが、その限りでは類似点を見い出せる。

### 江戸時代

ここでは、まず建物跡について検討する。建物跡は4棟検出され、棟方向や間取りの特徴か

ら、SB-02・SB-03とSB-04・SB-05の二つのグループに分けられる。各グループの建物跡は、それぞれほぼ同じ特徴をもっている。前者をA群、後者をB群とすると、間取りの仕方が全く異なることから、異なった系譜に属する建物群と考えられる。各建物跡は、柱穴どおり直接重複を示す例がないが、SB-02の柱穴はSE-02に切られている。SE-02は建物跡との位置関係からB群の建物跡に伴ったものとみられる。したがって、A群からB群へ変遷したものと考えられる。また、SB-01もB群建物跡と方向が一致することから、同時期のものであろう。B群建物跡は、伊達政宗が寛永4年に建設させた若林城および城下町の町割り方向と良く一致している。つまり、若林城の築城時期を境にして、建物方向に差がある見通しが得られた。

次に、SM-01とSE-01について検討する。前述したように、SM-01とSE-01の陶器や瓦には接合するものが多くみられることから、ほぼ同時期に機能したものと考えられる。両者の陶器は、筆者らが調査した仙台城三ノ丸跡出土品との比較（結城・佐藤：1985）から、17世紀の前半を下限とするものである。特に、SM-01に副葬されていた美濃産の灰釉碗は、三ノ丸跡の6号土塙跡出土碗と極似し、同一窯の製品の可能性もある。6号土塙では、「元和」銘の木札が出土していることから、SM-01の灰釉碗を含む副葬品や掘り方出土品も元和年間以後と予想され、降っても寛永年間頃のものと考えられる。ただ、志野の皿や唐津の捕鉢はその特徴から、慶長年間以前に生産されたものを使用しているようである。以上の検討から、SM-01やSE-01は、B群建物跡に伴った可能性が強い。

B群建物跡には2時期の建替があり、これにSE-01・SE-02・SM-01がセットを成すものと考えられ、北側のSB-01は敷地の内・外を区画する壁が想定されようか。これらは、若林城時代のものと考えられる。一方、A群の建物跡は、B群より古いと考えられることから、おそらく国分氏に関わる時代のものと予想される。また、この時代の陶磁器の保有が明らかでないことから、農民か下級武士の居宅であったのかもしれない。ところで、A群の建物跡も2時期の建替がみられ、いずれも類似した間取りである。この間取りは、線引きの仕方によって変移するが、藩制時代のヒロマ型三間取りや田字型四間取りの民家に類似している。県内の藩制時代の民家事例を広く収集し、分析された小倉強氏によれば（小倉強：1972）、前述の民家型式に属するものであろう。さらに、本遺跡の周辺は七郷地区に含まれていたが、この地区的藩制時代の民家にはこの型式の民家が多いと指摘している。この七郷地区は、藩制時代には国分氏系統の武士が土着したことが知られ、この系統の民家には特に、ヒロマ型三間取りが多いと、興味深い指摘がなされている。今後さらに多くの事例が必要であるが、A群建物跡はこれらの民家型式の祖形をなすものではなかろうか。

本遺跡では、A群建物跡と同時期と考えられている例は他にないが、B群建物跡の時期の可能性のある建物跡は、今回の調査地点の道路を隔てて北側に建物の一部が検出されている（著

田芳宏：1987)。

### 若林城時代の居住者について

ここでは、家臣の身分と陶磁器の関係を検討し、居住者（被葬者）の見通しを得ておきたい。仙台藩の家臣団の構成は、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士によって構成される。のちには、平士の下に大番士・組士・卒（足軽）が加わる。このうち、一門から太刀上までは門闇といわれ、上級武士と考えられる。平士以下が中級・下級武士となろう。なお、着座以下が初代政宗以後に成立した身分制度である。家臣を記録した『伊達世臣家譜』には、知行高百石取の平士・医師までが記録されており、これが仙台藩における中級と下級武士を区別する目安となろう。したがって、召出を一応上級武士として扱い、以下のように理解しておきたい。上級武士（一門～召出）1万石以上～約1000石、中級武士（平士）約1000石～100石、下級武士（平士～卒）100石以下である。

ただ、知行高と家格（身分）は必ずしもストレートに対応せず、また、知行高が変動する例も多いことから、陶磁器の保有傾向も変遷を増すものと考えられる。

さて、表19は『伊達世臣家譜』より、17世紀代の家格と陶磁器の保有関係を表したものである。『伊達世臣家譜』では拝領品や献上品のみが記載され、しかも茶器類にはほぼ限られることから、家臣が保有する陶磁器全体を知ることは不可能である。ただ、茶器類に限って比較

表19 家格別陶磁器保有一覧表

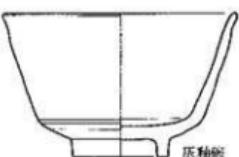
（『伊達世臣家譜』より）

家格	氏姓	知行高	年代	拝 領 品	獻 上 品
一門	伊達(夷)	20,000石	(貞山公)	磁器(華物之茶器)、岩城瓊林茶器	
一門	伊達(夷)	20,000石	元禄10(1697)	磁器茶入(1)	
準一家	藤西	1,000石	寛永11(1634)	香爐花瓶	青磁花瓶「幾収多」
一族	大町	2,400石	寛文4(1664)	島物磁器花瓶	
貴座	吉内	7,342石	貞享元(1684)		茶入「男山」
*	*		(義山公)	香炉高麗茶碗	
貴座	佐々木	3,036石	延宝5(1677)	茶入「夏山春慶」(小田原船橋家より)	
召出	平賀	1,000石	(義山公)		高麗茶碗「出雲高麗」瀬戸茶入
元禄14年	武田	1,300石?	元禄6(1693)		南京高麗皿80枚
*	*		元禄9(1696)		茶入(黄垂流小文)
元禄15年	田辺	?	元禄7(1694)	破風茶入「十六夜」	
平士	佐藤	500石?	元禄5(1692)	獅子谷伊、老子兼牛形香炉	
平士	真山	元利5(1619)			洞南茶入「堪忍」
*	*	200石	元和～寛永		洞南名器(茶人カ)
平士	望月	500石	元禄9(1696)	茶入	
平士	武市	?	延宝～元禄	茶碗(1)	
平士	田中	?		唐津燒茶碗	
平士	白梅	10口40両	(貞山公)		煙当形水指
平士	大越	100石	寛永11(1634)	土器山酒盃(所持品)	
平士	御代田	200石	明暦4(1658)	青磁(1)	
平士	上田	70石	寛永8(1631)	茶器若干	
平士	小平	(7,000石?)	1600年頃?	轉曲若干	
医師	勝田	324石	元禄6(1693)	吹墨之手茶碗	古瀬前水指(1)
医師	福井	200石	元禄11(1698)		青磁香炉
*	*		元禄12(1699)	破風手茶入、祝茶碗、茶碗	茶入

(知行高は陶磁器記載時のもの)

した場合、およその傾向を知ることは可能であろう。事例が少ないため、この表では18世紀代のを含めてみた場合、上級武士では皿・茶入・碗が多いが、中級武士でも器種差はほとんどなく、むしろ質的な差が大きいようである。上級武士では、朝鮮（高麗）や中国製の可能性のあるものが多く、中級武士ではまれである。また、中級武士でも400～500石を境にその前後では、器種差（茶入・花生など）や質的差が看取される。

今回の調査地点では、若林城時代（17世紀前半）の屋敷跡の一部が検出されたわけであるが、ここで保有されていた陶磁器は、美濃灰釉碗・灰釉丸皿・志野丸皿・唐津長石釉系大鉢・鉄釉擂鉢、在地瓦質鉢があり、表土中には中国染付皿などがある。このうち、茶器と考えられるものは、美濃灰釉碗である。この碗だけで判断するのは難しいが、先の検討結果から中級武士に相当するものと予想される。しかし、この碗と極似する碗は、前述したように仙台城の屋敷跡（三ノ丸造営以前）から出土している。しかも、この碗は単品生産の特注品と予想されたことから、SM-01の碗も同様のものと考えられる。中級武士が生産地へ特注するとは考えにくいことから、城主などの有力者からの拝領品とみることも可能となる。したがって、この碗の保有者（屋敷の居住者）は、中級武士（平士）でも上位者の可能性があり、SM-01への副葬時期はおよそ元



第50図 仙台城三ノ丸跡出土碗

表20 若林城間連・伊達政宗殉死者

（「伊達世臣家譜」より）

卷数	页数	姓	家格	知行高	記	事	
4	92	茂	庶	一族	寛永16年暮、若林城門を良元に賜う。		
4	99	佐	藤	一族	寛永13年、清信若林城池を穿つ際、足輕350人を以て5日開拓ける。		
9	40	(平賀)	召出	1000石余	佐藤基十郎吉信、政宗死去の際、殉死する。(若林私宅)		
9	47	青	木	召出	1000石余	細谷友重、政宗死去の際、殉死する。(若林私宅)	
9	49	南	召出	600石余	次郎吉吉吉、政宗死去の際、殉死する。(若林私宅)		
9	52	大	和田	召出	300石	佐藤重清、政宗死去の際、殉死する。	
10	106	(後川)	(平士)		矢口伊兵衛常重、政宗死去の際、殉死する。(185石 平七か)		
12	24・25	斎	藤	平士	500石	外記永門、政宗に従い若林に移る。寛永12年若林にて死去する。	
13	161	小	原	平士	(200石 50石)	細谷元創、小奉行に任ぜられ、若林城の造営にも関わる。	
13	173	大	坂	平士	240石	喜右衛門定安、政宗死去の際、殉死する。	
13	15	人生	平士	100石余	二六衛門元暉、政宗死去の際、殉死する。		
14	67	菅	井	平士	4111両	藤兵衛知國、寛永元年若林城奥方役になる。	
14	139	桑	原	平士	500石	寛兵衛成久、寛永3年若林城造営の際、材木奉行となる。	
15	32	渡	辺	平士	100石余 (120石)	橋之丞重成、政宗より野谷地を若林に賜わり、政宗死去の際、殉死する。	
15	95	小	平	平士	33石	太郎左衛門元成、政宗死去の際、殉死する。	
15	96	虎	岩	平士	6115両	寛永13年頃、若林の宅で木を賜う。(意味不明)	
15	136	大	津	平士		右馬助某、藤枝の剣を若林金庫に藏するも、若林金庫焼失する。	
16	40	石	田	一家	1000石	将監與純、政宗死去の際、殉死する。(若林私宅)	
		茂	藤		1000石	采女重綱、政宗死去の際、殉死する。	
		加	藤	平士?	300石	十三郎安次、政宗死去の際、殉死する。	
		曾	野	平士	300石余	藤左衛門重成、政宗死去の際、殉死する。	
		岡	崎			喜翁(絵師)、政宗死去の際、殉死する。	「伊達治家記録」 「東藩史稿」より
		桑	折			豊後綱長、政宗死去の際、殉死する。	

和年間以後、若林城下から家臣の屋敷が撤去された寛永13年以前と考えられる。さらに、城下町の形成が寛永4年であることから、これ以後のことと言えよう。

次に、上記の検討結果に基づいて、SM-01の被葬者（屋敷の居住者）がどのような人物かについて検討してみたい。前述の『伊達世臣家譜』は寛政4（1792）年に完成したものであり、藩士789家・藩医師110家の計899家分の記録が記載されている。これらの家臣の中に、SM-01の被葬者の有無が確認できるかどうかが問題となる。その際、以下の三つの条件を満たす人物が最も可能性が高いと言えよう。

1. 若林城下町の存続期間（寛永4年～同13年）に、この地に居住していること。
2. 1の期間内に、死亡者があった家臣であること。
3. 金箔瓦を所有できる立場・状況にある中級武士であること。

この条件を満たす家臣として、寛永13年に政宗の殉死者にその可能性を述べたことがある（佐藤：1987）。第20表は『伊達世臣家譜』及び『伊達治家記録』等から、若林・小泉（南小泉）の居住者・政宗の殉死者・若林城に関わる人物・事項を抜き出したものである。確かに、殉死者の中、表にみると4名が若林に居住していたことが知られるが、殉死者の墓は政宗の墓所にあり、両幕別のような墓制がないかぎり考えがたい。さらに、この4名は召出以上の上級武士である点でも否定的である。状況的にも、殉死者を埋葬する時点までに、城下町が撤去されることが知られていたとしたならば、この地に埋葬するのも考えにくいことである。したがって、政宗死去以前とみるのが妥当であろう。このように難しい条件下で、先の三条件をも満たす人物が『伊達世臣家譜』の中に唯一1人だけ存在する。それは、「斎藤外記永門」という人物である。この斎藤家は、政宗の米沢時代（山形県）からの譜代の家臣で、初め「信夫郡（福島県）小手邑御世田」に居住していたが、慶長・元和の大坂の役に従軍後、桃生郡深谷（宮城県）に移住した。その後、寛永5年に政宗に従って江戸へ上っている。また、寛永5年以後に、若林城下に移住している。この頃、斎藤家（永門）は知行高五百石で、「武頭」の役職であった。『伊達世臣家譜』卷之十二によれば、

公在少林日、移居其地、以十二年三月十三日、終少林。

とある。十二年は寛永十二年であり、「少林」は若林のことである。これにより、寛永12年に若林城下の屋敷で死亡している。また、「永門」の子に「勝永」という人物があり、大坂の役の後、江戸にて鍛冶奉行・塗師奉行に付き、寛永5年に仙台に戻り若林城の警護に当っている。このような状況から、先の条件をすべて満たす屋敷の居住者は斎藤家と予想され、墓の被葬者は「斎藤外記永門」である可能性が考えられる。また、城下撤去時に改葬することも可能となってくる。「永門」でない場合でも、この家格の人物という見方でよいであろう。屋敷の位置が確認できる絵図などが発見されれば、明確となろう。

### 金箔瓦について

SM-01（募）に副葬されていた金箔瓦は、瓦当面の凸部に黒漆を接着剤として、これに金箔を押した巴文軒丸瓦（本隅丸瓦か）である。現状は、金箔の大半が剥落している。この瓦は、大阪城天守閣学芸員の中村博氏の御教示では、大阪城を中心として畿内及びその周辺に多く分布し、西は熊本県の農國神社跡、東は東京都までが知られている。しかし、本遺跡から出土したことによって、分布範囲が宮城県まで広がったと言えよう。

ここで問題となるのは、当時仙台に金箔瓦を葺く建物が存在したかどうかである。今回検出した建物跡は否定的であり、瓦の性格から、権力者（大名など）と関わりのある建物に限定しても良いであろう。しかし、仙台城においては、この種の瓦を葺いたという記録はなく、また、最近調査した仙台城三ノ丸跡及びそれ以前の屋敷跡では確認できない。また、瓦自身の胎土や製作技術の側面の検討でも、在地の瓦とは異質な特徴がみられたことから、搬入品と予想される。金箔瓦の米歴の候補地はいくつか考えられるが、以下の4ヶ所が有力である。

1. 大坂城、2. 京都伏見屋敷、3. 江戸仙台藩上屋敷、4. 若林城

1は大坂の役の戦勝記念として持ち帰ったことが予想される。中村氏の分類（中村博：1982）では、大坂城の金箔瓦には本例のような珠文のない右巻巴文軒丸瓦は含まれていない点など相違がみられることから、さらに検討の余地がある。2・4は、記録や調査例がなく実体は不明である。3は、国立歴史民俗博物館蔵の『江戸団屏風』に描かれた「松平陸奥守」とする屋敷（上屋敷であろう）がある。これを詳細に見ると、正門とこれに続く間に金色の瓦が見えることから、金箔瓦が葺かれたものと思われる。この屏風が17世紀中頃に製作されたとみられることから、年代的にも矛盾しない。この見方が正しければ、仙台藩に隣接する金箔瓦を葺く建物が確かめられることになる。しかし、本遺跡の瓦が3から搬入されたかどうかは即断できない。それは、他の候補地を否定しきれないことと、江戸の屋敷の瓦の比較検討が必要だからである。さらには、4ヶ所の候補地以外にも、例えば仙台城本丸など他の候補地も今後検討すべき点が多い。

ところで、これらの候補地のいずれでも、先に検討した「斎藤外記永門」あるいは「勝永」であれば、おそらく入手が可能であろう。

以上、各時代毎に若干の分析・考察を行った。なお、古墳時代の土器の分析は、門外漢の著者が得た論点を示したか恐れるものである。

## 引用文献

- 阿部・千葉 1980 「台ノ川遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅱ』宮城県教育委員会
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯
- 大越・橋本・松本 1983 「薬師堂遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告13』福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 小倉 強 1972 「増補 東北の民家」相模書房
- 兼田芳宏 1987 「宮城県仙台市南小泉遺跡—第二次調査—」南小泉遺跡調査団・埋蔵文化財発掘調査研究所
- 佐藤 洋 1987(a) 「出土した疑い金箔瓦」『歴史読本』1月号
- 1987(b) 「六反田遺跡Ⅲ」仙台市教育委員会
- 志間泰治 1958 「宮城県角田町住社発見の堅穴住居跡とその考察」考古学雑誌 第43巻第4号
- 高木・大越 1978 「板倉前B遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅲ』福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 高倉敏明 1981 「山王・高崎遺跡発掘調査概報」多賀城市教育委員会
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」角川書店
- 中村 博 1982 「大坂城金箔瓦に関する基礎的考察」『大坂城の諸研究』日本城郭史研究叢書第八卷 名著出版抜刷
- 丹羽・小野寺・阿部 1981 「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書V』宮城県教育委員会
- 丹羽 茂 1983 「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』宮城県教育委員会
- 白鳥・後藤 1986 「名生館遺跡Ⅵ」宮城県多賀城跡調査研究所
- 目黒・佐藤・大越 1978 「佐平林遺跡I~IV区」『母畑地区遺跡発掘調査報告書Ⅱ』福島県教育委員会・財福島県文化センター
- 結城・佐藤 1984 「南小泉遺跡 都市計画街路建設工事関係第3次調査報告」仙台市教育委員会(通算第11次調査)
- 結城・佐藤 1985 「仙台城三ノ丸跡」仙台市教育委員会

## 参考文献

- 高橋信一 1983 「阿武隈川流域における古墳時代中期の土師器とその問題」しのぶ考古8
- 森田克行 1984 「高槻高櫻城本丸跡発掘調査報告書」高槻市教育委員会
- 中村 博 1978 「金箔瓦試論」『大坂城大守閣紀要』第6号

写 真 図 版



1



3



4



5



7



6

1 : 調査前近景  
2・4 : I区  
3・5～7 : II区(7はSR-01)

写真1 調査前・調査区分別全景、基本層序

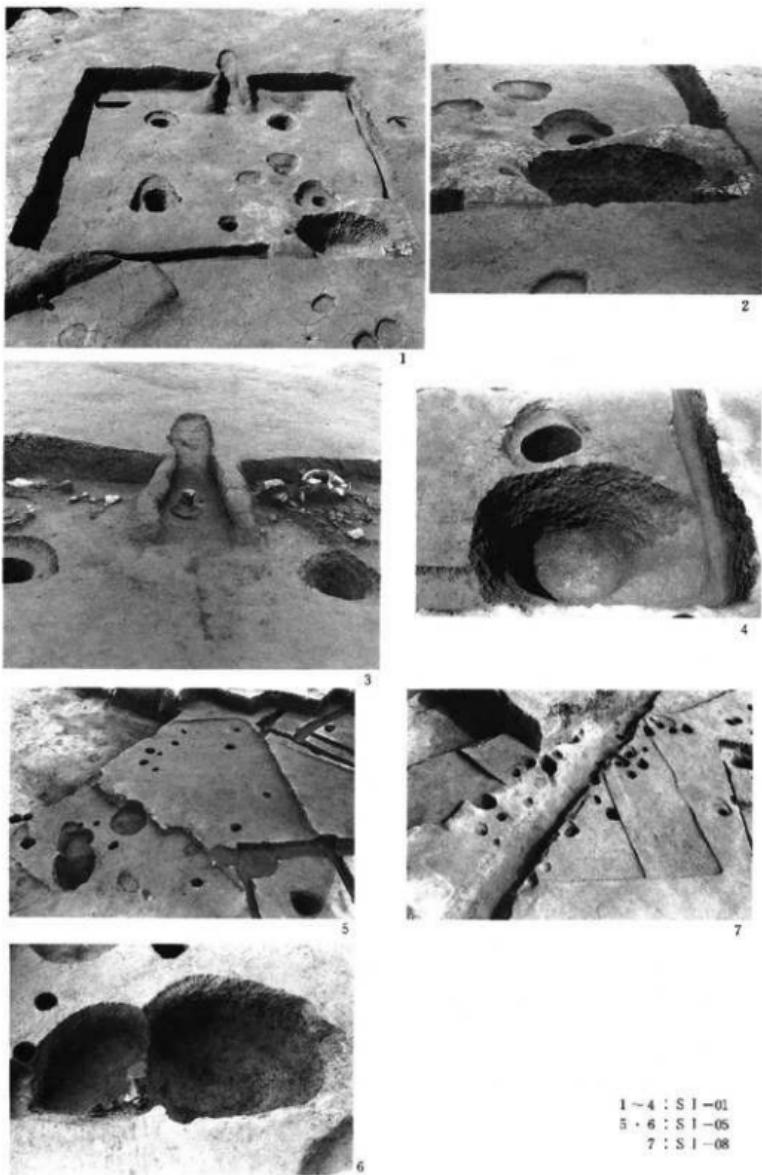
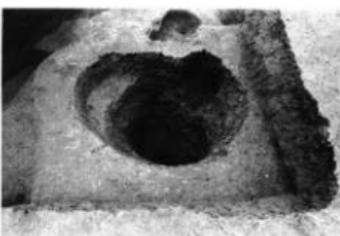


写真2 古墳時代の遺構 (1)

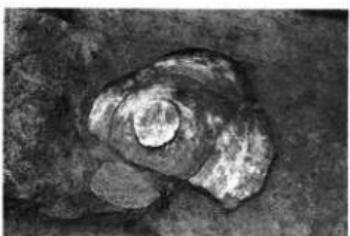
1~4 : S I -01  
5・6 : S I -05  
7 : S I -08



1



2



3



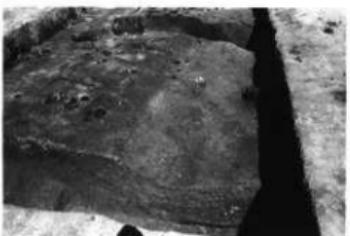
4



5



6



7



8

写真3 古墳時代の遺構 (2)

1～3 : S I -09  
4 : SD -07  
5・6 : SD -07・08  
7・8 : SR -01



1



2



4



3



5



7



6



8

写真4 平安時代の造構

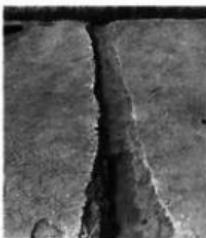
1-3 : S I -03    5・6 : 1号～3号鉄状遺構  
4 : S I -04    7・8 : SK -01・02



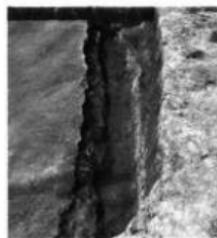
1



2



3



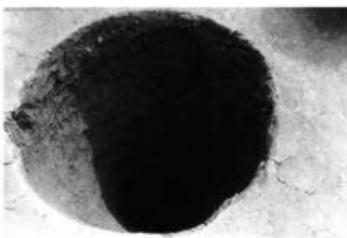
4



5



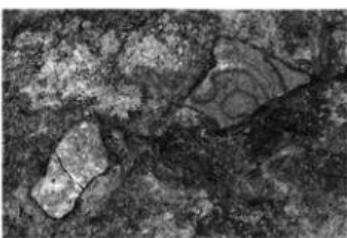
6



7



8



9

- 1・2 : SD-01・02・12      6 : SE-01  
3 : SD-01                  7 : SE-02  
4 : SD-02                  8・9 : SM-01  
5 : II区施物跡付近

写真5 中世・近世初期の遺構



1



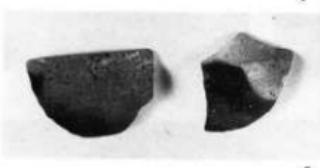
2



3



4



5



6



7



8



9



10

1~10: S 1-01

写真6 古墳時代出土遺物(1)



1



2



3



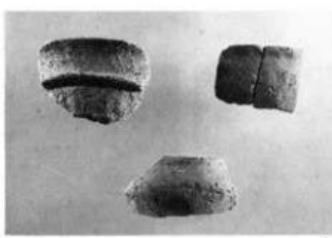
4



5



6



7



8



9

1～4 : S I - 06  
5～8 : S I - 08  
7 の下段 : S I - 09

写真7 古墳時代出土遺物(2)

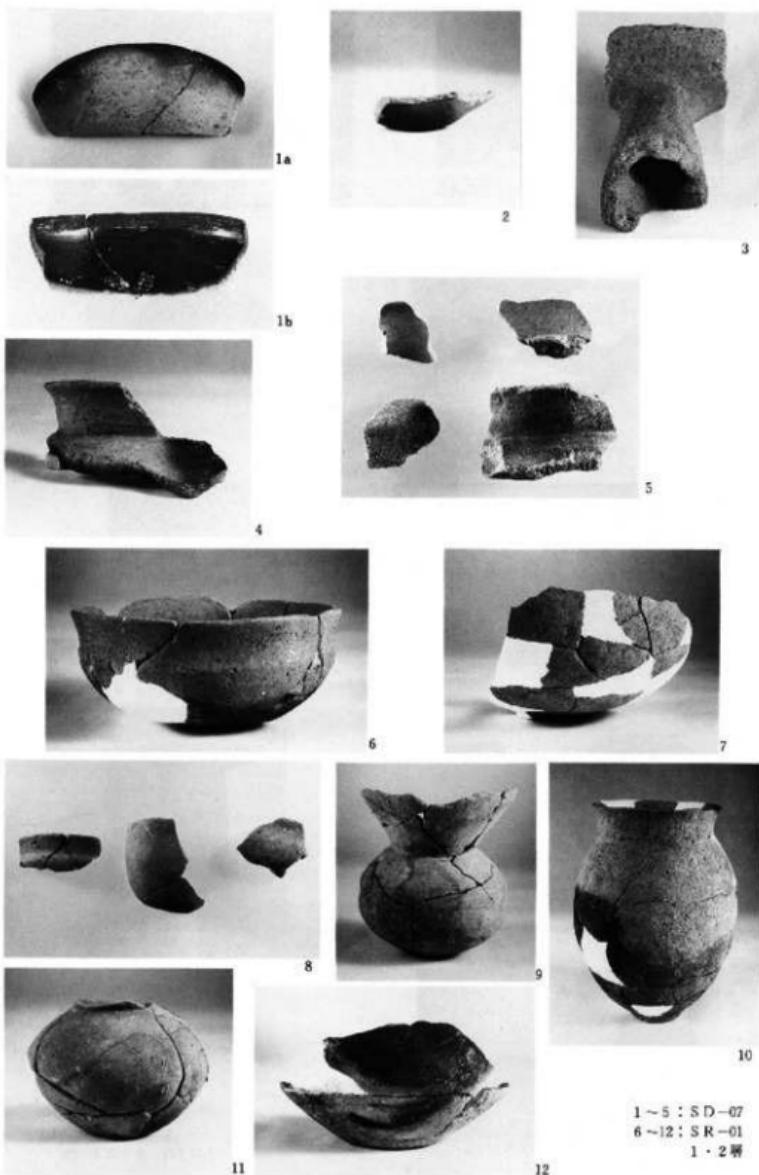
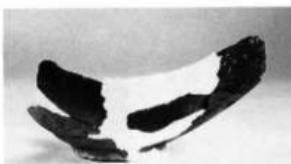
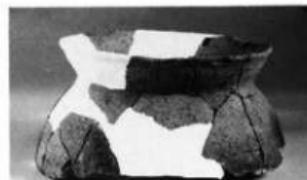
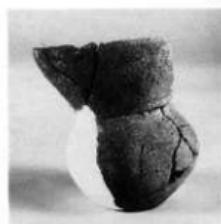


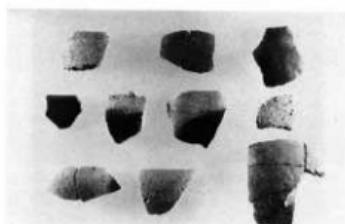
写真8 古墳時代出土遺物(3)

1~5: SD-07  
6~12: SR-01  
1・2層

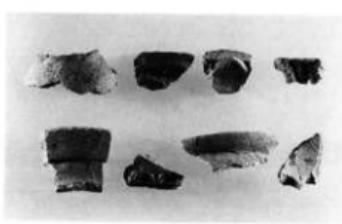


1~13 : S R -01  
3号

写真 9 古墳時代出土遺物 (4)



1



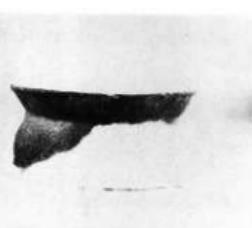
2



3



4



5



6



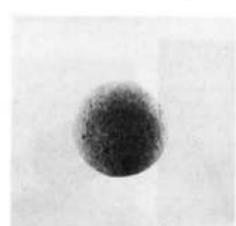
7



8



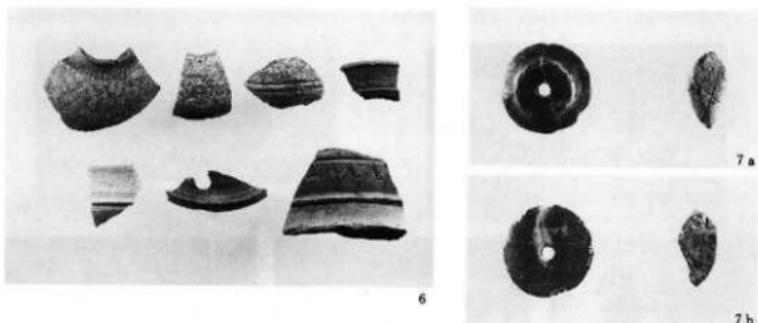
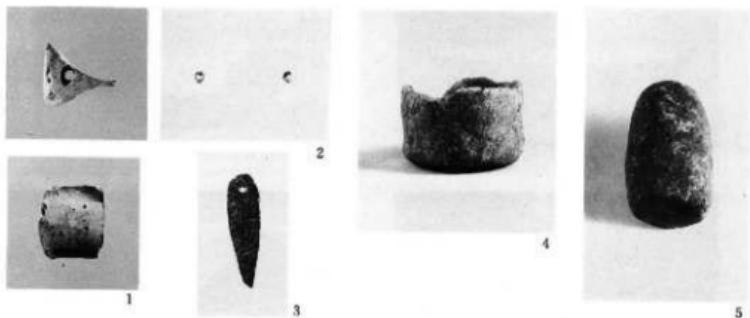
9



10

1～5 : SR-1 (3・4層上面)  
6 : SI-09  
7・8 : SI-05  
9・10 : SD-07

写真10 古墳時代出土遺物 (5)



1 : S I -01  
 2 · 3 : S I -05  
 4 · 5 · 9 : S R -1 (3 個)  
 6 · 8 : S R -1 (1 · 2 個)  
 7 · 10 · 11 : S D -07  
 12 : S K -02



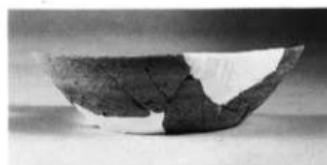
写真11 古墳・平安時代出土遺物



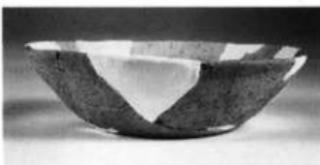
1



2



3



4



5



6



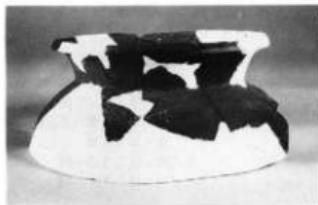
7



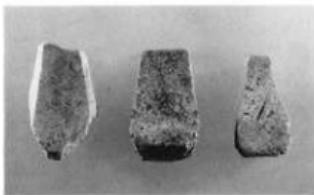
8



9



10



11



12  
写真12 平安時代出土遺物

1~12: S I-03  
(ただし、11の右端は SK-07)

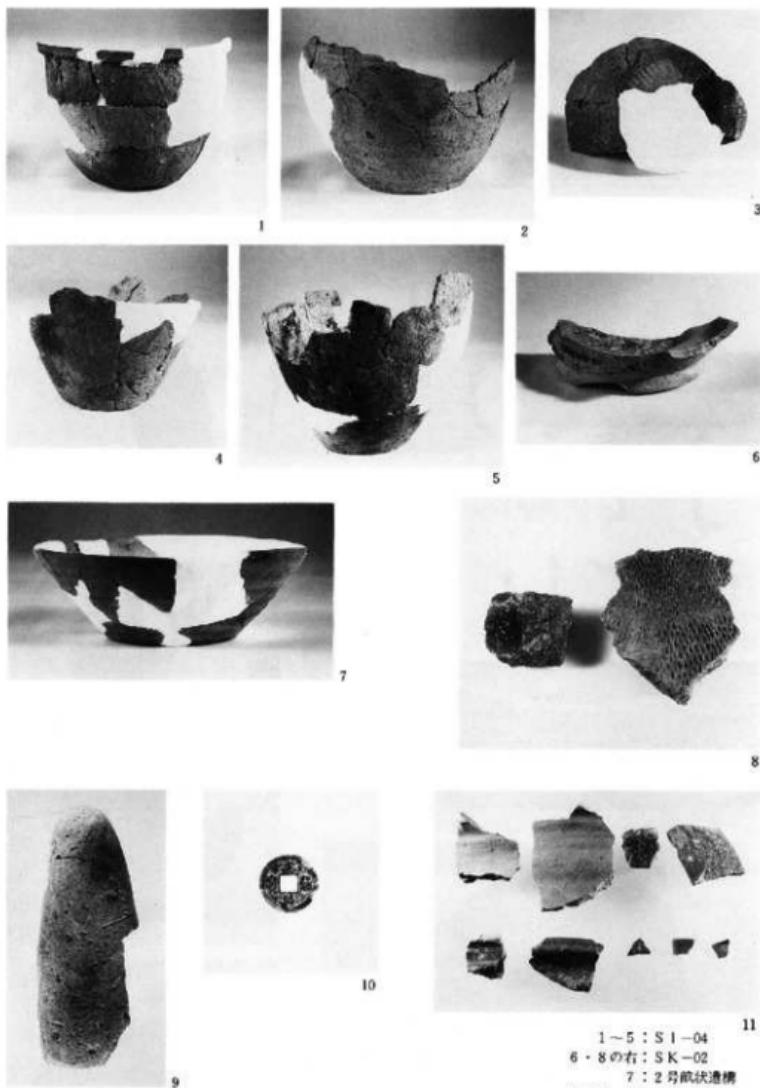


写真13 平安・中世出土遺物

1-5 : S I-04  
6・8の右 : SK-02  
7 : 2号瓦状透標  
8の左 : SD-12  
9・11下段中央 : SD-02  
11上段・下段左端 : 表土  
11下段右端 : SD-01

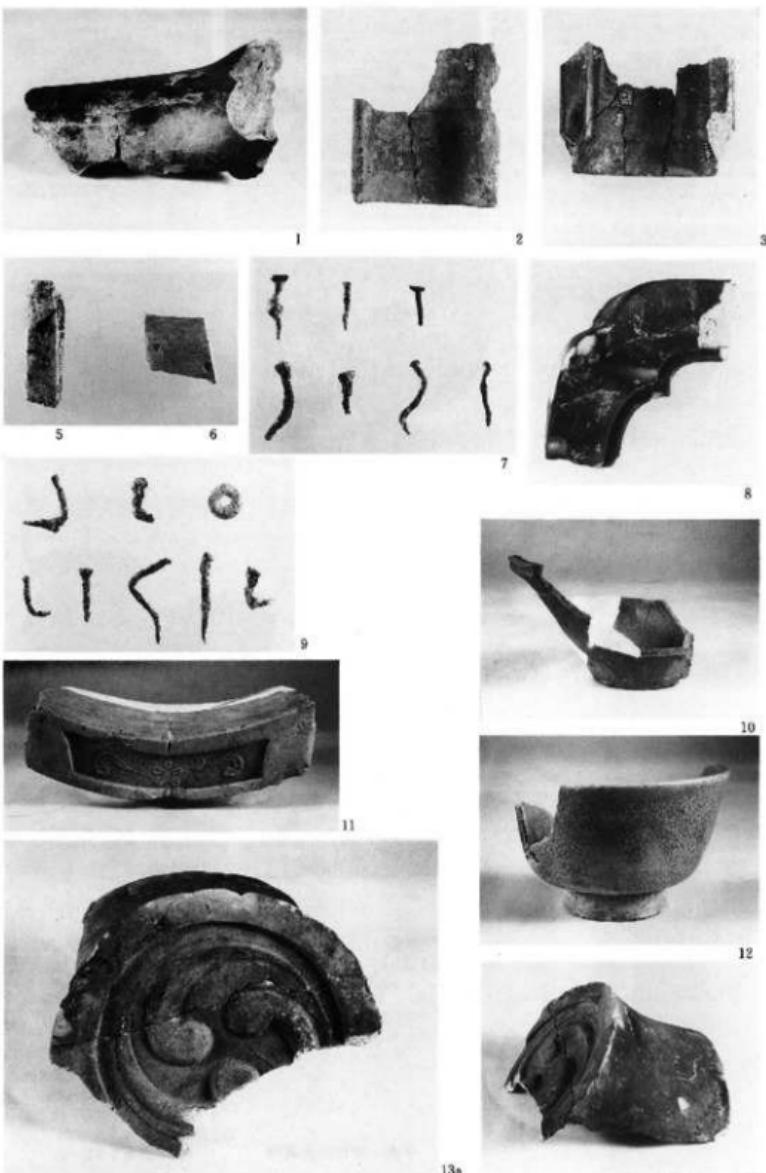


写真14 江戸時代出土遺物

1~7 : SE-01  
8 : SE02  
11~13 : SM-01

## 文化財課職員録

課長 早坂春一

管理係 係長 成田時雄

主任 岩沢克輔

主事 白樺靖子・山口 宏

調査係 係長 佐藤 隆

主事 結城慎一・木村浩二・篠原信彦・佐藤 洋・金森安孝・佐藤甲二・吉岡恭平

工藤哲司・渡部弘美・主浜光朗・斎藤裕彦・長島栄一・及川 格・平間亮輔

佐藤 淳・波部 紀・佐藤良文・中富 洋・松本素明・宮崎 明・大江美智代

教諭 千葉 仁・松本清一・太田昭夫・小川淳一・横本光一・渡辺雄二

---

仙台市文化財調査報告書第109集

### 南小泉遺跡

第14次発掘調査報告書

昭和62年11月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1  
仙台市教育委員会文化財課

印刷 (株) 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 263-1166

---

